

山形市

# 柏倉地区遺跡群

発掘調査報告書

1981

山形県教育委員会

かしわ ぐら

# 柏倉地区遺跡群

## —発掘調査報告書—

昭和 56 年 3 月

# 序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和51・52年度に実施した県営須川西部圃場整備事業にかかる塩辛田遺跡・大清水遺跡・坊屋敷遺跡・柏倉土師遺跡・館遺跡・十二月田A遺跡・窪遺跡・金池遺跡の調査結果をまとめたものであります。

山形市西部の須川流域一帯は、縄文時代から奈良・平安時代にかけての遺跡が多いことで知られています。特に昭和53年に調査した大之越古墳から五世紀代と考えられる環頭太刀（県指定）等が発見され、今まで空白となっていた山形の古代史の一ページを明らかにしました。加えて塩辛田遺跡他7遺跡の調査で縄文時代後期の祭祀遺跡や古墳時代から平安時代にかけての集落跡が発見され、柏倉地区における先史・古代史解明のうえでより一層の手がかりを得ることができます。

近年埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは、増加の傾向にありますが、地域における生産・流通体制の整備及び、農業経営の安定化を図る事業と悠久の歴史を包む埋蔵文化財の保護との間には多くの問題をかかえております。この両者の調整を行ない埋蔵文化財の保護をはかることは重要な課題であり、県教育委員会においても一層の努力を重ねているところであります。

このような意味において、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護・普及の一助になれば幸いと存じます。

終わりに、調査にあたって適切な御指導と多大なる御協力をいただいた関係各位に、心から感謝申し上げます。

昭和56年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹正治

## 例　　言

1. 本書は、山形県教育委員会が主体となり、昭和51・52年の2ヶ年に亘って実施した。県営須川西部圃場整備にかかる塩辛田遺跡他の緊急発掘調査報告書である。

2. 調査にあたっては、山形県農林水産部耕地第二課・山形県山形平野土地改事所並びに山形市教育委員会などの諸関係機関の協力を得た。ここに記して感謝を申し上げる。

3. 調査体制は下記の通りである。

調査主体　　山形県教育委員会

調査担当　　山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者　主任調査員 川崎利夫（山形県教育庁文化課埋蔵文化財係長）

調　　査　　員 佐藤鎮雄 尾形與典 佐藤正俊 苺木光裕

（山形県教育庁文化課）

横戸昭二（山形市教育委員会社会教育課）

4. 掃図縮尺は、遺構平面図では $1/20$ ・ $1/50$ 、遺物は土器実測図 $1/2$ ・ $1/4$ を原則とし、拓影図は $1/4$ 、石器実測図は打製石器 $1/2$ ・磨製石器 $1/4$ とし、それぞれスケールを示した。遺物の図版は、 $1/2$ ・ $1/4$ ・ $1/8$ とした。掃図中の記号は、S T—住居跡・S B—建物跡・E P—柱穴・S K—土括・S M—配石遺構・E U—埋設土器とし、住居跡・建物跡・土括は全体にそれぞれ一連番号を付け、住居跡の柱穴などは各掃図毎一連の数字で示した。

5. 本報告書の作成は、佐藤正俊・佐藤庄一・渋谷孝雄が中心に執筆し、土器・石器実測および掃図・図版作成にあたっては、太田八重子・津留房子・高橋貴恵子・黒金佳子・佐藤隆子・池田洋子・鏡 克子・吉田史子・奥山厚子・枝松美保子・山口由紀子が補助した。本書の編集は名和達朗・渋谷孝雄・佐藤正俊が担当し、全体について佐々木洋治（埋蔵文化財係長）が総括した。

# 目 次

<b>I 調査の経緯</b>	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査経過の概略	1
<b>II 造跡群の立地と環境</b>	
1. 造跡の立地	3
2. 造跡群とその周辺	5
<b>III 塩辛田遺跡</b>	
1. 造跡の概要	6
2. 造構	8
(1) 住居跡	8
(2) 建物跡	12
(3) 溝跡	12
3. 出土遺物	13
(1) 古墳時代	13
(2) 奈良・平安時代	15
4. まとめ	20
<b>IV 大清水遺跡</b>	
1. 造跡の概要	21
2. 出土遺物	23
(1) 繩文時代	23
(2) 弥生時代～古墳時代	30
(3) 平安時代	30
3. まとめ	32
<b>V 坊屋敷遺跡</b>	
1. 造跡の概要	33
<b>VI 塩遺跡</b>	
1. 造跡の概要	65
2. 出土遺物	67
(a) 繩文時代土器	67
(b) 出土石器	71
3. まとめ	75
<b>VII 金池遺跡</b>	
1. 造跡の概要	76
2. 出土遺物	78
(1) 繩文時代	78
(2) 平安時代	83
3. まとめ	83
<b>VIII 柏倉土師・館・十二田A遺跡</b>	84
<b>IX 総括</b>	86

## 插図目次

第1図 造跡位置・分布図	4
第2図 塩田遺跡全体図	6
第3図 塩辛田造構配置図	7
第4図 625・26号住居跡・32号建物跡	9

第5図	塩辛田遺跡30・31号住居跡	11
第6図	・ 土器実測図(1)	14
第7図	・ 土器実測図(2)	16
第8図	・ 土器実測図(3)	18
第9図	・ 土器実測図(4)	19
第10図	大清水遺跡全体図	21
第11図	・ 遺構配置図	22
第12図	・ 繩文土器拓影図(1)	24
第13図	・ 繩文土器拓影図(2)	25
第14図	・ 出土石器(1)	28
第15図	・ 出土石器(2)	29
第16図	・ 弥生土器拓影図・土師器実測図	31
第17図	坊屋敷遺跡全体図	33
第18図	・ B地区遺構配置図	34
第19図	・ A地区遺構配置図	35
第20図	・ 1号住居跡	37
第21図	・ 2号住居跡	39
第22図	・ 54号住居跡	41
第23図	・ 70号住居跡	43
第24図	・ 87号住居跡	45
第25図	・ 土壙群	47
第26図	・ 繩文・弥生土器拓影図(1)	50
第27図	坊屋敷遺跡縄文土器拓影図(2)	51
第28図	・ 縄文土器拓影図(3)	53
第29図	・ 土器実測図(1)	54
第30図	・ 土器・土製品実測図(2)	55
第31図	・ 出土石器(1)	57
第32図	・ 出土石器(2)	59
第33図	・ 土器実測図(3)	61
第34図	・ 土器実測図(4)	62
第35図	・ 遺跡全体図	65
第36図	・ 遺構配置図	66
第37図	・ 縄文土器拓影図(1)	68
第38図	・ 縄文土器拓影図(2)	69
第39図	・ 出土石器(1)	72
第40図	・ 出土石器(2)	73
第41図	・ 出土石器(3)	74
第42図	金池遺跡全体図	76
第43図	・ 遺構配置図	77
第44図	・ 縄文土器拓影図	79
第45図	・ 土器実測図	81
第46図	・ 出土石器(1)	82
第47図	・ 出土石器(2)	83

## 図版目次

図版1	塩辛田遺跡近景 25号住居跡 26号住居跡 30・31号住居跡 3号建物跡
図版2	塩辛田遺跡・32号建物跡・90号建物跡 大清水遺跡近景 大清水遺跡調査区全景
図版3	坊屋敷遺跡・全景・近景 B地区全景 1号住居跡 2号住居跡
図版4	2号住居跡 2号住居跡炉 2号住居跡土器出土状態 21号住居跡
図版5	54号住居跡 54a号住居跡カマド 54b号住居跡カマド 87号住居跡
図版6	70号住居跡 70号住居跡土器出土状態
図版7	3号土壤 4号土壤 5・6号土壤 9号土壤 12号土壤

- 図版8 15・16・17号土壤 15号土壤 16号土壤 17号土壤 E U52 U E 35
- 図版9 23号土壤 55・68号土壤 95号土壤
- 図版10 24号土壤 51号土壤 7号溝跡
- 図版11 離遺跡遠景 全景 環状列石 1・2・3号集石
- 図版12 金池遺跡近景 2号溝跡 1・9・24号土壤・6号溝跡 13号土壤
- 図版13 塩辛田遺跡出土土器
- 図版14 大清水遺跡出土土器(1) 出土土器(2) 出土土器(3)
- 図版15 大清水遺跡出土土器(4) 出土石器
- 図版16 坊屋敷遺跡出土土器(1) 出土土器(2) 出土土器(3)
- 図版17 坊屋敷遺跡出土土器(4) 出土土器(5) 出土土器(6)
- 図版18 坊屋敷遺物出土土器(7)
- 図版19 坊屋敷遺跡出土土器(8)
- 図版20 坊屋敷遺跡出土土製品 出土石器
- 図版21 離 遺跡出土土器(1) 出土土器(2) 出土土器(3)
- 図版22 離 遺跡出土土器(4)・土製円盤 出土石器(1) 出土石器(2)
- 図版23 金池遺跡出土土器(1) 出土土器(2) 出土石器
- 図版23 金池遺跡出土土器(3)

# I 調査の経緯

## 1. 調査に至る経過

山形市には数多くの遺跡があり、昭和49年から昭和52年度にかけて山形県教育委員会が実施した分布調査の結果（「山形県遺跡地図」昭和53年）、189ヶ所の遺跡が登載されている。とくに須川流域の西部には、須川を支流とする小河川による扇状地や小段丘が発達しており、縄文時代から平安時代の集落跡・古墳・条里制などの遺跡が多く分布している。今回圃場整備事業に係る柏倉地区の、塩辛田・大清水・坊屋敷・柏倉土師・館・窪の7遺跡では以前から水田・畑地の耕作により遺物が採集され、「山形県遺跡地名表」（昭和38年）にも登載されている。

この地区が、県営須川西部圃場整備事業によって、遺跡が破壊される恐れが出てきたため、山形県教育委員会では昭和49・50年の二度に亘って分布調査を実施して、遺跡の内容・規模・性格を明らかにした。また新たに金池・十二月田A遺跡の遺跡が発見され、圃場整備事業区内に8遺跡が存在することが判明した。これに基づいて山形県教育庁文化課では、山形県農林水産部耕地第二課・山形平野土地改良事務所・土地改良区等の諸関係機関と充分な協議・調整を行ない、山形市教育委員会の協力を得て、昭和51年と昭和52年に記録保存のための緊急発掘調査を実施することになった。

## 2. 調査経過の概略

発掘調査の基本的な方法は、いずれの遺跡においても遺跡の全体に、 $2 \times 2\text{ m}$ を一単位とするグリッドを設定し、圃場整備事業区内に限定して調査を進めた。第1段階では、遺物・遺構の密集する区域を判断するため、6~10mおきにグリット・トレーニングを入れ、粗掘作業を実施した。第2段階で、確認した密集地区を重機械などを使用して拡張作業を行ない、10~40m四方の拡張区の面整理により、遺構などを確認した。第3段階では、確認した遺構の精査・検出を行ない、遺構内出土の土器・石器などの測図・写真撮影などの記録作業を実施した。第4段階は、検出した遺構の全体写真の撮影および平面図等の作成を行なった。調査終了一週間前に多くの方々に埋蔵文化財に対する理解を深めてもらうための現地説明会を開催した。

なお、塩辛田遺跡・大清水遺跡・坊屋敷遺跡・柏倉土師遺跡・館遺跡・十二月田A遺跡・窪遺跡・金池遺跡についての、所在地・調査期日・立地・標高・遺跡の概略については、次の通りである。

(1) 塩辛田遺跡

所在地 山形市大字柏倉字塩辛田。調査期日 昭和51年5月17日～6月25日（延34日）

立地 富神川に形成された小扇状地の微高地。標高133～134m。

(2) 大清水遺跡

所在地 山形市大字柏倉字大清水。調査期日 昭和52年4月18日～6月9日（延32日）

立地 須川の支流小河川に形成された小扇状地の微高地。標高152～154m。

(3) 坊屋敷遺跡

所在地 山形市大字柏倉字坊屋敷。調査期日 昭和52年5月17日～7月28日（延51日）

立地・標高 須川に流入する小河川に形成された小扇状地。標高149～154m。

(4) 柏倉土師遺跡

所在地 山形市大字柏倉字坊屋敷。調査期日 昭和52年5月16日～6月20日（延7日）

立地 須川に流入する小河川に形成された小扇状地。標高147～149m。

遺跡概略 本遺跡は坊屋敷遺跡の南東部に隣接し、遺構は検出されず、縄文時代大木8a式・土師・須恵器片が若干出土。坊屋敷遺跡よりの流れ込みである。

(5) 館遺跡

所在地 山形市大字柏倉字館。 調査期日 昭和52年6月15日～6月28日（延12日）

立地 須川に流入する小河川に形成された扇状地の扇端部。標高138～140m。

遺跡概略 今回の調査は、遺跡の西端部の約5分の1を調査。平安時代後半の溝跡1を検出。遺物は整理箱に2、縄文時代中期土器片・土師器・須恵器片が出土。

(6) 十二月田A遺跡

所在地 山形市大字柏倉字十二月田。調査期日 昭和52年7月26日～8月10日（延10日）

立地 富神川の右岸の段丘状の微高地。 標高175～179m。

遺跡概略 遺構は検出されず、縄文時代土器片・石器・須恵器・土師器片が若干出土。おそらく遺跡の主要な地区は、北側の畠地一帯と考えられる。

(7) 窪遺跡

所在地 山形市大字柏倉字窪。 調査期日 昭和52年7月25日～10月3日（延40日）

立地 富神川の右岸の段丘状中位。 標高169～171m。

(8) 金池遺跡

所在地 山形市大字柏倉字金池。調査期日 昭和52年11月7日～11月30日（延17日）

立地 須川へ流入する小河川の小扇状地の微高地。標高151～153m。

## II 遺跡群の立地と環境

### 1. 遺跡の立地

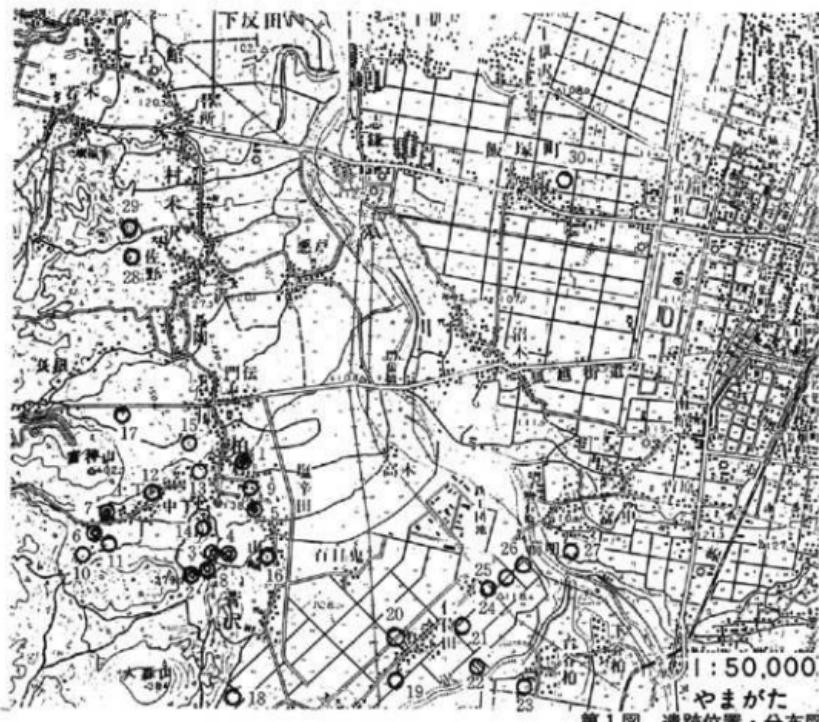
山形市の柏倉地区は、最上川の支流須川の左岸、山形盆地の南西縁に位置し、これらは白鷹山からのびるいくつかの丘陵によって区画されている。白鷹山丘陵より流れ出る富神川・本沢川などの数本の小河川は、東流して須川にそそぐ。遺跡群は、これら小河川に形成された扇状地の扇頂部・扇央部あるいは小段丘などの微高地上に立地している。

また、遺跡群の南側には標高166～184mの菅沢山、南西側には標高280mの大日向山、ほぼ中央部には標高176mの白鷹山からのびる残丘などがあり、北西方向には、山形盆地に特徴的にみられる円錐形をなしている標高402.2mの富神山がある。これら残丘などの縁辺に沿って遺跡群が立地している。それぞれの遺跡の地目は、大部位が水田で若干畠地（ホップ・菜園）あるいは果樹畠（桜桃）、そして一部は宅地となっている。今回の調査対象地区は水田となっている。

各遺跡の層序は、基本的には次の通りである。

- |         |   |
|---------|---|
| 第Ⅰ層黒色土  | 表土（耕作土）下部には水田耕作により出来た酸化した層がみられる。<br>厚さ15～30cm。若干遺物が出土する。  |
| 第Ⅱ層黒褐色土 | 炭化粒子・風化礫粗が混り微砂質である。古墳・歴史時代遺構の確認面で遺物が出土する。厚さ20～30cm。       |
| 第Ⅲ層暗褐色土 | 炭化粒子をやや多く含み粘質微砂土である。縄文時代遺物包含層および縄文時代の土壤などの確認面。厚さ15～35cm。  |
| 第Ⅳ層黄褐色土 | （褐色土）地山で若干砂礫などが混る。古墳～平安時代の住居跡は上面を若干掘り込んで造られている。厚さ35～50cm。 |
| 第Ⅴ層黒褐色土 | 粘質に富む。無遺物層。厚さ45～65cm。                                     |
| 第Ⅵ層砂礫土  | 大形の自然礫などに砂層が混る。無遺物層。                                      |

基本層序は、各遺跡とも扇状地・段丘地形にそって東側の方向に流れ込むように堆積しているが、大清水遺跡では南西方向へ、窪遺跡では北東方向に堆積している。また、塩辛田遺跡の西側一帯・大清水遺跡の南側寄り一帯・柏倉土師遺跡の全体・十二月田遺跡の全体および窪遺跡の西側一帯には、第Ⅲ層暗褐色土中に砂層・礫層が混り、遺構や遺物の検出はない。遺物包含層が良好な遺跡は、坊屋敷遺跡・道路をはさんで東側の塩辛田遺跡・窪遺跡の東側で、その他の遺跡では、水田耕作やホップ畠に開墾する際に遺物包含層まで達していることから、遺存状態は良くない。



第1図 遺跡位置・分布図

遺跡名	所 在 地	立地 (標高)	時 期	遺跡名	所 在 地	立地 (標高)	時 期
1 駐幸田	山形市大字柏倉字権幸田	脛状地(134m)	奈良・平安時代	16 露武古墳	山形市大字番字山崎	丘陵(200m)	古墳時代(5世紀)
2 大清水	山形市大字柏倉字大清水	脛状地(154m)	麗文後期・平安	17 日光山	山形市大字門比日光山	・ (173m)	麗文中期
3 逸屋敷	山形市大字柏倉字坊宿敷	脛状地(154m)	麗文・奈良・平安	18 百々山	山形市大字長谷堂字百々山	山麓(167m)	麗文中期・平安時代
4 柏倉土師	山形市大字柏倉字坊宿敷	脣状地(149m)	麗文・平安時代	19 萩原	山形市大字長谷堂字萩原	平地(133m)	古墳～平安時代
5 墓	山形市大字柏倉字越	脣状地(140m)	麗文中期・平安	20 川落	山形市大字二鹿田字川落	・ (121m)	古墳時代
6 十二月田A	山形市大字柏倉字十二月田	丘(179m)	麗文	21 二鹿田	山形市大字二鹿田	・ (130m)	戴弥生古墳・平安
7 墓	山形市大字柏倉字羅	丘(171m)	麗文後期	22 本沢川	山形市大字柏倉	・ (128m)	麗文時代
8 金池	山形市大字柏倉字金池	脣状地(153m)	麗文後期・平安	23 寄平田	・	・ (122m)	・
9 宿	山形市大字柏倉字宿	脣状地(140m)	麗文中期	24 前嘴石	山形市大字前嘴石落合	・ (118m)	古墳・平安時代
10 十二月田B	山形市大字柏倉字十二月田	・ (156m)	麗文中期・後期	25 落合	山形市大字前嘴石	・ ( + )	古墳・平安時代
11 三月田	山形市大字柏倉字三月田	・ (150m)	麗文後期	26 銭ヶ瀬	・	・ (117m)	・
12 柏倉中丁	山形市大字柏倉字中丁	丘 陵(164m)	麗文中期	27 箕内	山形市大字南丽字館ノ内	・ (119m)	古墳時代
13 柏倉八幡	山形市大字柏倉字八幡	・ (168m)	麗文前期・中期	28 村木浜古墳	山形市大字村木浜字北谷地	丘 陵(158m)	古墳時代(6世紀)
14 中林古墳	山形市大字柏倉字中林	・ (160m)	古墳時代(6世紀)	29 爱宕山	山形市大字村木浜字愛宕山	山 麓(150m)	平安時代
15 大之越古墳	山形市大字門底字大之越	・ (149m)	・ (5世紀)	30 阪塚	山形市大字阪塚	平地(110m)	古墳時代

## 2. 遺跡群とその周辺

山形市の須川西部の地域は、山形盆地の西縁を区画する白鷹山丘陵に近接し、丘陵より東流する富神川・本沢川・後明沢川などの数本の小河川が、小規模な扇状地や河岸段丘を形成する微高地に、多くの遺跡が群集している。なかでも、縄文時代や奈良・平安時代の大小の集落跡が多い（第1図）。

縄文時代の遺跡は、中期から後期にかけての遺跡が大部分で、標高140～173mの扇頂部や丘陵など、比較的高位に位置している。前期は柏倉八幡遺跡の1ヶ所で高い所に位置し、大木5・6式の土器片が多く出土している。中期前葉では、一部調査がなされた百々山遺跡が知られ、大木7b式期を主体とする住居跡や土器・石器が多く出土し、良好な資料が得られている（註1）。二位田遺跡では、中期末葉の大木10a式に比定される土壌群が検出され、撫糸を地文とする大木10a式の土器が多く出土している（註2）。

弥生時代の遺跡は、本沢川に形成された扇状地の先端部にあり、谷柏遺跡・二位田遺跡（註2）が知られ、平行沈線による連続山形文・連弧文を併なう土器片が出土しており、桜井式併行期と考えられている。

古墳時代から平安時代の遺跡は、山形盆地の西縁部に多く群集している。集落跡は、谷柏遺跡・萩原遺跡・二位田遺跡・本沢川遺跡などが認められ、古墳時代前期の南小泉II式に併行関係を有する土師器なども出土している。また古墳も、山形盆地の西縁丘陵には、この時期5～6世紀の円墳を主体とするものが群集しており、菅沢古墳・大之越古墳・中林古墳・村木沢古墳などが確認されている。菅沢古墳は、菅沢山の丘陵の頂きに営まれ、2号墳は、二段構築の円墳で底径56mを測り、円筒埴輪の一括も出土している（註3）。大之越墳は、富神川の左岸に位置し、道路改良工事の際発見されて調査がなされた。形状は墳丘が削平されているが、周溝などから円墳と考えられ、径14～16mと推定される。二つの箱式石棺が検出され、1号棺より副葬品として、単龍鳳環頭大刀を含む鐵劍・大刀3本が出土し、その他鐵製品が出土している。また古墳時代前期の塩釜ないし南小泉式併行期の埴輪が出土し、構造年代は5世紀中頃から6世紀と考えられる（註4）。

またこの地域には、一連の条里遺構が分布し、谷柏遺跡から大曾根遺跡かけての大曾根条里やこれより以北の山辺町の山辺条里など広範囲に分布している。このように、須川西部一帯には、古墳時代から律令制下にいたるまで、集落跡や条里遺構あるいは古墳群など相互に有機的な関連をもつ遺跡が多数存在している（註5）。

註1 「山形県史」考古資料 昭和44年

註4 「大之越古墳」発掘調査報告書 県教委 昭和54年

註2 「山形県文化財発掘調査報告書第6集」昭和51年

註3 「山形市史」第一卷

註5 「山辺条里遺構」発掘調査報告書 県教委 昭和54年

### III 塩辛田遺跡

#### 1. 調査の概要

本遺跡は、富神川に形成された小扇状地の微高地にあり、西側から北側へと全体的に傾斜し、遺跡の東端と南東端で1~1.5mの比高差がみられる。北側は富神川が流れしており、若干北側にも傾斜している（第2図）。

層序は概略して、第Ⅰ層黒色土（耕作土）・第Ⅱ層黒褐色土で多量の風化礫粒が混り若干炭化粒子を含む・第Ⅲ層暗褐色土で若干炭化粒子が混り、遺構の検出面となっている。それぞれの堆積する厚さは、第Ⅰ層15~25cm・第Ⅱ層25~30cm・第Ⅲ層35cm前後となり、それ以下の層序は疊層である。とくに疊層が著しくみられる地区は、X軸方向のCA軸より西側あり、わずかに堆積している第Ⅲ層以下は、疊層が厚く堆積しており、建物跡1を検出したのみである。

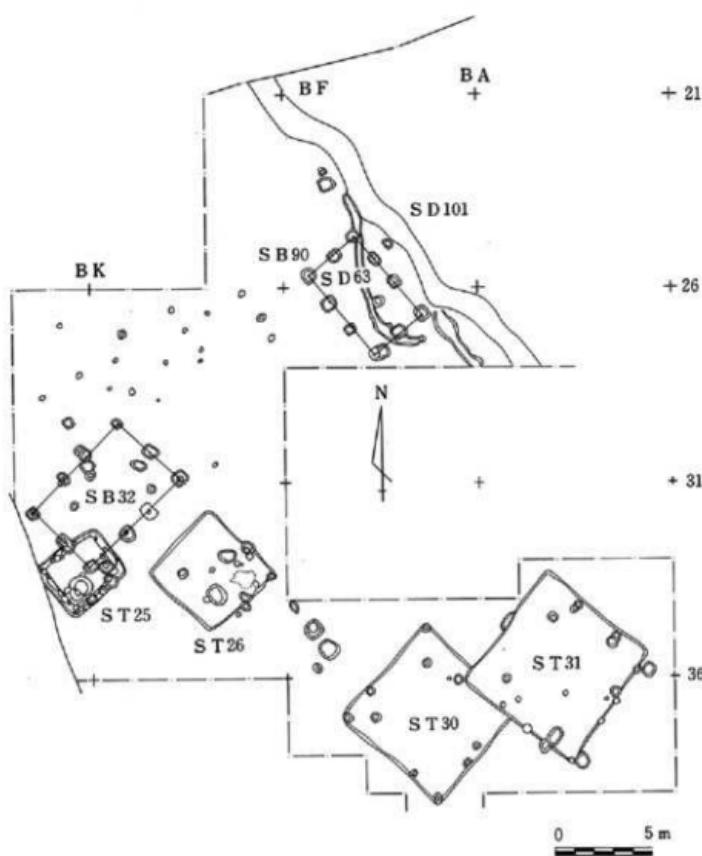
検出した遺構は、住居跡4・建物跡3・溝跡2・その他不明のピット54である。遺構は、3号建物跡がCV~CA-46~51グリッドの拡張区で検出され、遺跡の中心部よりかけ離れている。今回遺構を検出した地区は、遺跡の中央部をはしる道路の西側地区で、住居跡はいずれも方形を呈し、4~7mの大きさである。25・26号住居跡は近接し、30・31号住居跡は重複関係にある。32号建物跡は、25号住居跡と重複し、90号建物跡では101号溝跡と近接し、63号溝跡と重複関係にある。その他不明のピット群が32号建物跡の北側地区にみられる。また、26・30号住居跡との中間に位置する地区および31号住居跡の東側で、建物跡を構成する柱穴が確認された（第3図）。



第2図 塩辛田遺跡全体図

遺構群の主軸方向をみると、1号建物ではほぼ南北方向になっており、25・26・30・31号住居跡や32・90号建物跡および101号溝跡は概して、磁北方向より32~37°西方向へ向きをとっているのが、特徴的である（第3図）。

CJ~CK-47・48グリッド内において、南北方向に走る疊層を検出した。状況からみて、自然的に造りだされたものである。



第3図 遺構配置図

遺物は、整理箱にして約60箱出土しており、その大半は古墳時代前期と奈良・平安時代の土師器・須恵器である。その他、縄文時代の石核1・剝片3が発掘区南西側の第Ⅱ層中より出土している。

遺物の出土状況をみると、古墳時代前期の土器は、CR・CS-49~51、DD-41グリッドより出土し、とくにCR・CS-49~51グリッドからは、投棄されるように壺など5個体が出土している。奈良・平安時代の土器は、その大半が住居跡や建物跡の柱穴の覆土や床面より出土している。

## 2. 遺構

### (1) 住居跡

#### 25号住居跡 (第4図 図版1)

発掘区の中央部の平坦地、B I～B K-32～35グリッド内にあり、北東側で32号建物跡と重複し、南東側で26号住居跡と近接している。遺存状態は、あまり良くない。

平面形は、やや胴が張る方形を呈している。規模は長軸3.80m、短軸3.70mで短軸方向がN-35°-Wを計る。壁は、北西側隅の一部が道路下にあるほかは、緩やかに掘り込んでおり現存高15～18cmである。さらに内側に階段上に掘り込まれ方形を呈している。周溝は外壁の内側に長さ0.9～1m・幅20～30cmで東・南・西辺壁にみられる。床面は、部分的に凹凸があるが概して平坦で、中央部付近がやや堅く踏みしめられているほかは軟弱である。柱穴は、16本検出され、主柱穴はE P 13と考えられ、支柱穴・壁柱穴はE P 14～19で、径15～30cm、深さ15～20cmである。炉跡は、確認されていない。

覆土は、2層に分けられ、1層黒褐色土で炭化粒子を含み軟らかい、2層暗褐色土で炭化粒子を多量に含んでいる。ほぼ水平に堆積している。

25号住居跡と32号建物跡の重複関係は、25号住居跡が埋没した段階で32号建物跡が造られている。時期は、出土した須恵器より奈良時代末葉から平安時代初頭期の所産と推定される。

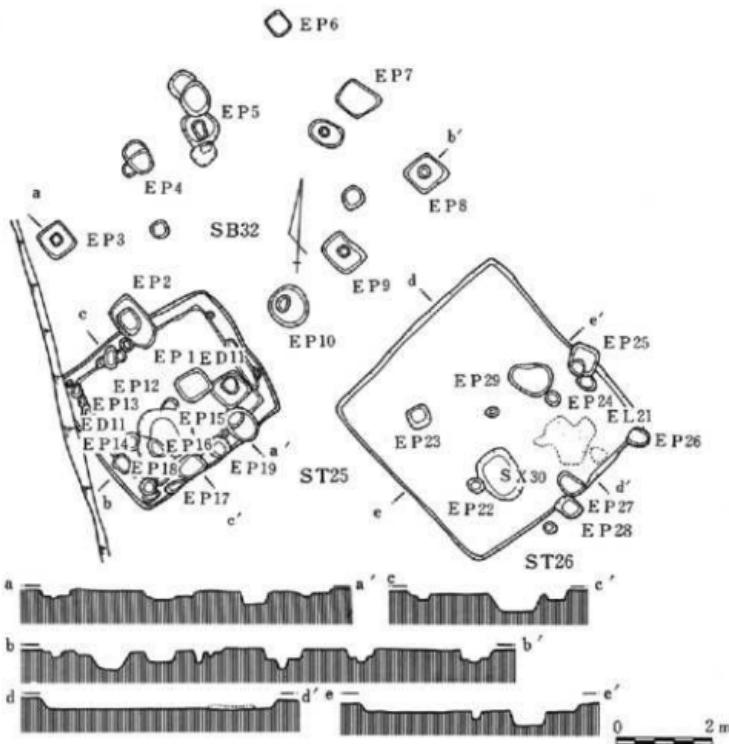
なお、S X 20については、不整円形を呈し径1.3×1.2mで深さ45cmで、E P 14と重複しS X 20が新しい。出土遺物もなく、土壤と考えられるが性格は不明である。

#### 26号住居跡 (第4図 図版1)

発掘区の中央部の平坦地、B D～B H-32～35グリッド内にあり、北東側で25号住居跡と近接している。遺存状態は、あまり良くない。

平面形は、南西辺の部分がやや脛の方形を呈する。規模は長軸4.90m、短軸4.50mで長軸方向がN-32°-Wを計る。壁は、南西壁がやや垂直に掘り込まれ、その他の壁では緩やかに傾斜がついて掘り込まれ、北西側が高く南東方向へ低くなっている、現存高14～25cmである。周溝および壁溝は検出されない。床面は、E P 29付近の住居跡中央部がやや高くなっている、その他はおおむね平坦で、全体として軟弱で、とくに壁際が顕著である。柱穴は8本確認され、主柱穴はE P 22～24で、対応する北側に位置する主柱穴は検出されず、径20～50cm・深さ20～35cmである。支柱穴はE P 29で住居跡の中央部に位置し、E P 25～28は壁柱穴となり、E P 26は東側隅に在る。

炉跡(E L 21)は、住居跡の東側隅に位置し、おそらくカマドと考えられるが上部が攪乱



第4図 25・26号住居跡・32号建物跡

されているためその全体的な構造は不明である。

覆土は1層のみ確認され、レンズ状に堆積しており、黒褐色土で炭化粒子を多く含み、風化礫も混る。

S X 30は、住居跡の床面を精査している際に確認され、平面形は橢円形を呈し、径 1.1 × 0.8 m で、深さ25~30cmである。覆土は暗褐色土で炭化粒子を含み堅くなっている。出土遺物は、覆土下層より須恵器の小破片が2点出土している。おそらく奈良時代末葉から平時代初頭の土壤と考えられる。

本住居跡の時期は、25号住居跡の覆土の状況からみて若干新しいと考えられるが、出土した須恵器からみて、奈良時代末葉から平安時代初頭の所産と推定される。

### 30・31号住居跡 (第4図 図版1)

発掘区の中央部の南西寄りの平坦地に位置し、AS～BC-33～40グリット内にあり、30号住居跡の東側で31号住居跡と重複している。両住居跡ともこの地区で面整理・確認作業の際、同時に検出された。遺存状態は、30号住居跡の西側壁隅の一部と31号住居跡の北東壁付近で搅乱を受け、全体的にはあまり良くない。

#### 30号住居跡

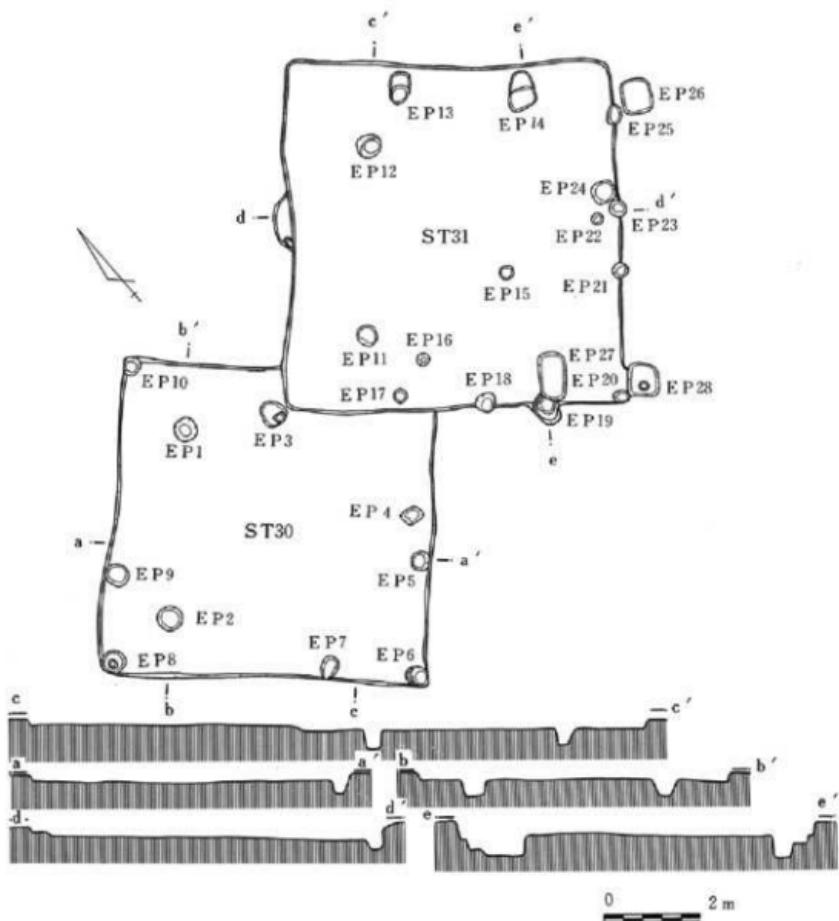
平面形は、東側壁・隅が31号住居跡によって切られ、若干住居跡内側に脹らみをもつ不整の正方形を呈している。規模は長軸6.90m、短軸6.70mで、短軸方向がN-32°-Wを計る。壁は、北東側および南東側壁でほぼ垂直に掘り込まれている他は、暖やかに掘り込まれており、現存高は12～20cmである。周溝および壁溝は検出されていない。床面は、中央部が若干高く凹凸がみられ、壁際で平坦となり、中央部付近でやや堅く踏みしめられ、壁付近で軟弱となっている。柱穴は10本確認され、主柱穴はEP1・2で西側壁に寄っており、円形を示し径46～50cm・深さ38～43cmである。なお対応する東側の主柱穴は未検出である。支柱穴はEP3・4で径35～50cm・深さ25～30cmで、壁柱穴はEP5～10・17で、EP6・8・10・17は住居跡の隅に在り深さ35～40cmで、EP5・7・9は住居跡の壁際に位置し、径25～45cm・深さ20～35cmである。炉跡は確認できなかった。

遺物は、住居跡中央部の東寄りから多量出土した。覆土は2層に分けられ、ほぼ水平に堆積している。

#### 31号住居跡

平面形は、やや胴が内側になるような不整方形を呈し、西側へ約38cm脹り出しがみられる。規模は、長軸7.10m・短軸6.80mで短軸方向はN-33°-Wを計る。壁は、全体にはほぼ垂直に掘り込まれており、確認面からの深さは約12～38cmで、南東側付近でやや高くなっている。周溝および壁溝は検出されていない。床面は、南西側で若干の凹凸がみられる他は、ほぼ平坦で、全体にやや堅く踏みしめられている。柱穴は15本検出され、主柱穴はEP11・12で径40～60cm・深さ41～48cmを計り、東側に対応する主柱穴は認められない。EP13・14は東辺壁寄りに位置するが、規模からみて主柱穴と考えられ、径45～60cm・深さ40～55cmを計る。支柱穴は、EP15～17、壁柱穴はEP18～25で、ほとんどが南側の壁および隅に位置している。なおEP26～28は、31号住居跡と重複する建物跡の柱穴で、31号住居跡より新しくなる。炉はEP15とEP16の中間地点に、若干焼土が検出されただけで、明確な炉跡は確認されていない。

遺物は、住居跡の西側の脹り出し付近の床面より、須恵器の壺などが多く出土している。覆土は、2層に分けられ、1層黒褐色土・2層暗褐色土であり、レンズ状に堆積している。



第5図 30・31号住居跡

30・31号住居跡は、土層の堆積状態からみて30号住居跡より31号住居跡が新しく、両住居跡とも、奈良時代末葉から平安時代初頭の時期の所産と推定される。

## (2) 建物跡

### 3号建物跡

発掘区の西側の緩傾斜地、C T～C W-46～49グリッド内に位置し、遺存状態は良くない。北側の地区は砂礫層となっている。東西2間・南北2間になるが南側不明であり、ほぼ南北方向になる。柱穴の掘り方は、方形を呈しほぼ垂直に掘り込まれ、大きさは50～70 cm、深さは確認面より27～35 cmであり、柱穴間は 170～195 cmである。覆土はいずれも黒褐色土で砂礫が混っている。柱穴より須恵器の壺片が出土しており、その時期は、平安時代の初頭と推定される。倉庫跡と考えられる。

### 32号建物跡 (第3図 図版2)

発掘区の中央部の平坦地、25号住居跡と東側で重複し、25号住居跡より新しく、遺存状態はあまり良くない。東西3間・南北2間でE P 1～E P 10となり、南北軸方向がN-34°-Wを計る。柱穴の掘り方は、方形あるいは円形を示し、大きさは40～110 cmで深さ35～48 cmで、ほぼ垂直に掘り込んでいる。柱穴間は 210～240 cmである。時期は、奈良時代末葉から平安時代初頭と推定され、掘立柱建物跡と考えられる。

### 90号建物跡 (第3図 図版2)

発掘区の中央部の平坦地に在り、63号溝跡を切り、101号溝と東側で隣接している。東西2間・南北3間になり、南北軸方向がN-36°-Wを計る。柱穴の掘り方は、円形ないし方形を呈し、大きさは40～60 cm・深さ40～52 cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴間は 170～190 cmとなる。時期は、奈良時代末葉から平安時代初頭と推定される。倉庫跡と考えられる。

## (3) 溝 跡

63・101号溝跡は、いずれも90号建物跡に重複あるいは隣接して位置している。63号溝跡は、東西方向から南北方向にかけて走っておりL字形を呈し、北側で101号溝跡を切っている。長さ約9 mで幅35～45 cm・深さ15～34 cmである。覆土は、暗褐色土で若干風化礫粒を含み、出土遺物はみられない。性格は不明である。

101号溝跡は、上面の平面形を確認したのみである。南東側より北東方向に蛇行しながら走っており、幅1.2～1.4 mである。覆土は、暗褐色土で風化礫粒が多量に含まれている。いずれの溝跡の時期も奈良時代末葉から平安時代にかけての時期と考えられ、101号溝跡も性格は不明である。

## 2. 出土遺物

塩辛田遺跡から出土した遺物には、土師器・須恵器など整理箱にして約60箱分がある。明確に遺構と判別し得ない遺物包含層からもかなり出土するが、豊穴住居跡の床面および覆土内から比較的良好な資料が得られた。土器については、製作技法やセットとしての共伴関係などから、古墳時代前期と奈良・平安時代の二つに大別して述べる。

### (1) 古墳時代前期の土器 (第6図1~6 図版60)

古墳時代前期の土器は、発掘区の西南C R・C S-49~51Gで5個体まとめて出土した(第6図1~5)。傾斜変換線の下部、第Ⅲ層上面から中位にかけて一括投棄された状態で検出されたもので、とくに遺構は認められない。器種には台付鉢・小形壺・大形壺・瓶などがある。各土器とも色調は暗い乳灰褐色を呈し、遺存状態はあまり良くない。

1はやや小形の瓶で、内外面ともヘラミガキ調整が施されている。底部は丸底で、焼成前に孔が1つ穿たれている。2は台付の鉢で、外面に細い刷毛目、内面にヘラミガキが施されている。体部下半と台部との接続部には縦方向の指ナデ痕が明瞭に認められる。

4は体部が丸味を持ち、口縁部がやや外反する小形の壺で、体部下半の内外面にヘラミガキ、体部上半の内外面にヘラナデ調整が施されている。5は単純口縁で体部が球形を呈する大形壺の上半である。外面の頸部から体部全面および内面の口頸部に細い刷毛目が施されている。3は体部中程が脹り出し、口頸部がやや外反する小形の壺である。内外面と損耗が著しく詳しい調整技法は不明であるが、外面に刷毛目調整の痕が一部認められる。

6は発掘区の西端D D-41G第Ⅲ層から出土した。体部がやや扁平な小形の壺で、体部外面にヘラケズリ、口頸部内外面にナデ調整が施されている。

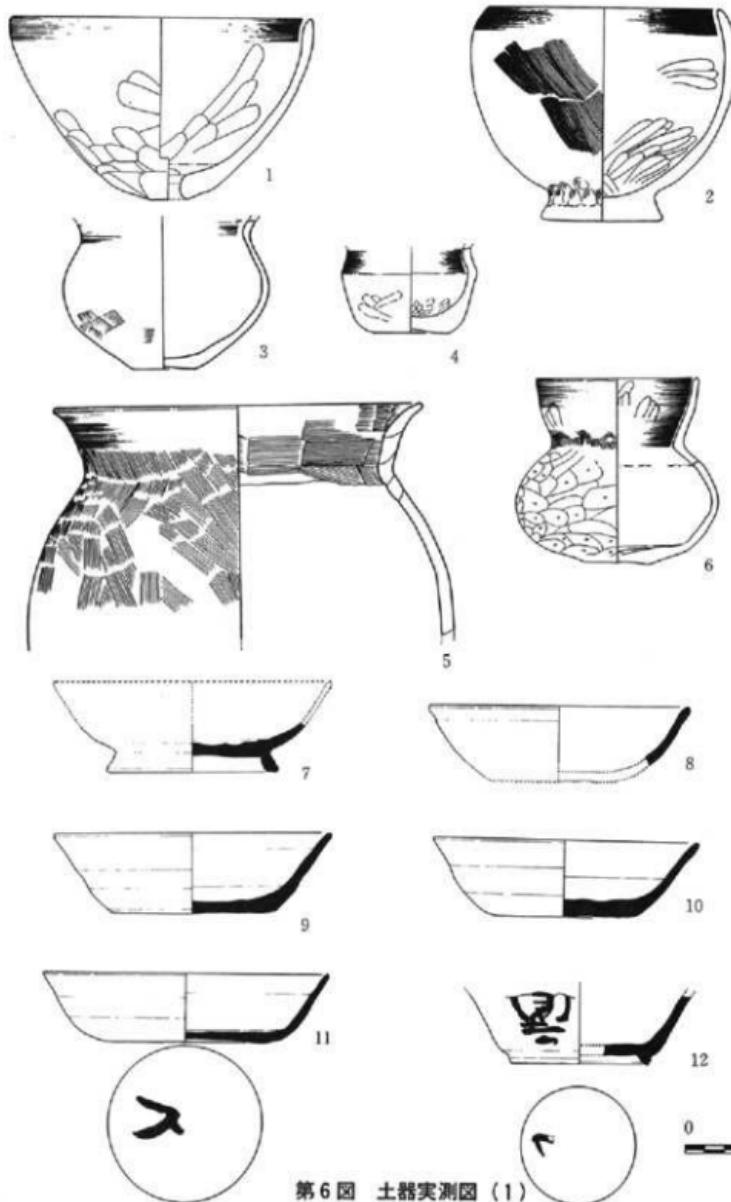
1~5の一括遺物は、(1) 口縁がすべて単純口縁であること、(2) 底部は瓶を除いて平底ないしやや凹む形を呈すること、(3) 瓶が単孔式で浅い鉢形をなしていること、(4) 器台が認められること、などの特徴があり、時期的には古墳時代を二区分した場合の前期、形式的には東北地方南半の土師器でいう「南小泉式」(註1)期に位置付けられる。6もほぼ同時期と考えられる。

山形県内では、南小泉式期の良好な資料はあまり見られないが、河北町熊野台遺跡(註2)の第Ⅱ群土器としたものにややまとまった資料が見られる。熊野台遺跡の場合は、器種として塩辛田遺跡の上記のものに加えて、环・器台なども存する。また最近河北町下植遺跡(註3)から南小泉式とその前の塙釜式をつなぐ良好な資料が発見されている。

註1 氏家和典1957「東北土師器の型式分類とその編年」歴史14

註2 山形県教育委員会1980「熊野台遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第31集

註3 山形県教育委員会他1980「河北町下植遺跡調査説明資料」



第6図 土器実測図(1)

[1~6・12(包含層)・7・8(ST25)・9~12(ST26)]

## (2) 奈良・平安時代の土器 (第6~9図・図版60)

塩辛田遺跡から出土した奈良・平安時代の土器は、土師器・須恵器・赤焼き土器の三つに大別できる。さらに土師器は、成形および調整の段階ともロクロを用いないものと、ロクロ使用のものに分かれる。器種として、ロクロ不使用の土師器には、壺・長胴甕・甕・壺、ロクロ使用の土師器には、壺・長胴甕・甕・壺などがある。須恵器には、壺・高台付壺・蓋・鉢・甕・壺などがある。赤焼き土器には、皿・壺・甕などがある。

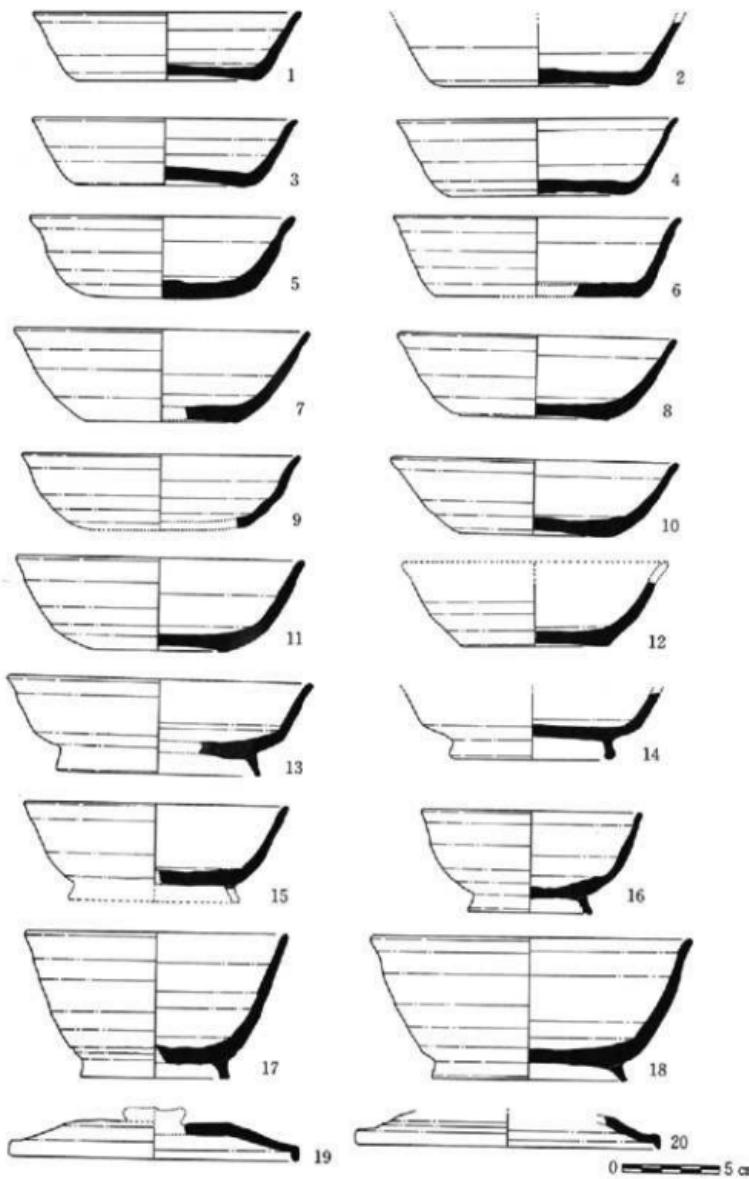
土器の底部片による個体数は約700点を数え、土師器・須恵器・赤焼き土器の占める比率は、それぞれ3:4:0.3となる。各器種の中で主体を占めるのは、須恵器壺と土師器長胴甕および甕で、ついで須恵器高台付壺と土師器壺が多い。須恵器の壺および高台付壺の底部368点のうち、底部の切り離し手法の比率は、ほぼヘラ切り(3):糸切り(2)となっており、ややヘラ切り手法のものが多い。

つぎに竪穴住居跡内の床面および覆土最下層の土器について述べる。

**第25号住居跡** (第6図7・8); 須恵器が2点出土している。7は覆土最下層出土の高台壺で底部の切り離しは糸切り手法による。8は床面出土の壺で、底部の切り離しは不明である。第26号住居跡(第6図9~11); 9~11は床面出土の須恵器壺である。底部の切り離しはヘラ切り手法によるもので、ケズリなどの再調整は認められない。いずれも器高に比して底径が大きく、体部から口縁部にかけて直線的に外反する。11の底部には「ス」の墨書銘がみられる。12はCL-48G第Ⅲ層から出土した墨書銘を持つ須恵器高台付壺である。第26号住居跡の床面からは、このほか土師器長胴甕の体部片が1点出土している。

**第30号住居跡** (第7図・第9図8~11); 須恵器には壺・高台付壺・蓋・甕・壺などの器種がある。第7図1~12は須恵器壺で、底部の切り離しは1~6がヘラ切り、7~12が糸切り手法による。切り離し後の再調整は、3の体部と底部の境に回転ヘラ削り、11の同じ個所にヘラナデが認められる。全体的に器高に比して底径が大きく、底部がややあげ底状を呈する。13~18は高台付壺で、底部の切り離しは14~17がヘラ切り、13・18が糸切り手法による。再調整は高台接着の際のナデ調整だけでは認められない。13・14は体部下半が一段屈折する様碗である。17・18は器高が高く、壺というよりは碗の仲間に入ってよいものである。19・20は蓋で、つまみ部や天井部が欠損しており、調整技法については不明な点が多い。19の天井部に一部ヘラ削りの痕がみられる。

第9図8は土器の甕、同9・10は土師器の長胴甕である。内外面に刷毛目およびヘラ削りによる調整が施されている。8は口縁部が「く」字状に外反、9は口縁部が強く屈曲し、ともに口頭部にヘラナデによる軽い段が認められる。第9図11は赤焼き土器の鍋で、内外面の体部下半に同心円状の叩き目、体部上半にロクロ回転を伴なうナデ調整を持つ。



第7図 土器実測図（2） [ST30]

**第31号住居跡**（第8図・第9図1～5）；第8図1～6は須恵器坏で、底部の切り離しは1がヘラ切り、2～6が糸切り手法による。削りなどの再調整は認められない。4の仲部から底部にかけて墨書銘がみられる。7～14は高台付坏で、底部の切り離しは7・9がヘラ切り、8・10～14が糸切り手法による。高台の接続部以外は再調整が認められない。9・10がやや小形のもの、12は器高が高い环形のもの、14が体部下半が一段屈折する稜碗とでも呼ぶべきものである。15は須恵器蓋で、つまみ部が欠損しているが、天井部に回転ヘラ削り調整が施されている。16は須恵器大形鉢の口縁部で、内外面にロクロ整形の後、体部外面に平行な叩き目調整を施している。

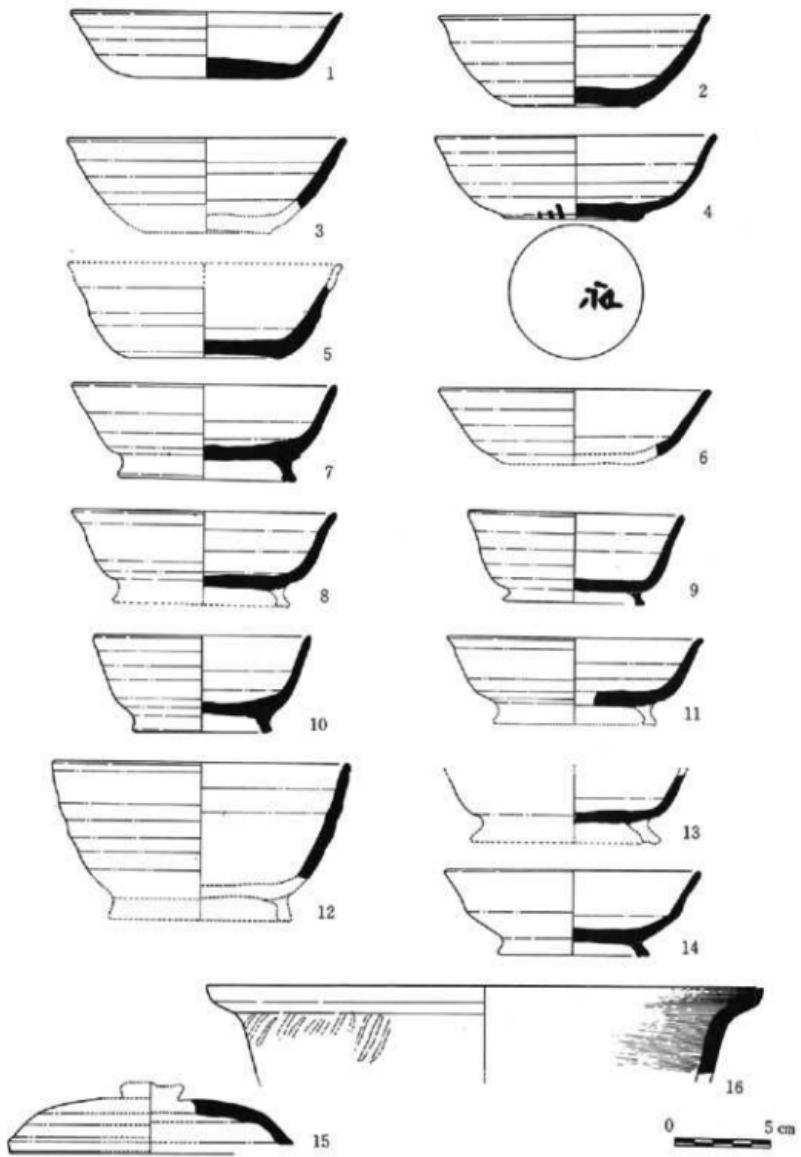
第9図1は土師器の坏である。全体的に磨滅が著しく調整技法は不明であるが、内面にヘラミガキの後黒色化処理が施されている。2は土師器の碗で、外面に横方向のヘラ削り調整、内面にヘラミガキの後黒色化処理が施されている。底部は木葉痕がみられる。3・5は土師器の甕で、両者とも口縁部外面に横ナデ、内面にヘラミガキの後黒色化処理が施されている。5は体部上半を刷毛目整形した後、ヘラ削り調整を施している。4は内外面に刷毛目整形を持つ土師器の甕である。遺物包含層からも同様な器種がみられるので参考資料として6・7にあげておく。

ところでこれら4棟の竪穴住居跡出土の土器は、いつ頃の時期に比定されるであろうか。資料的に豊富な第30・31号住居跡では、須恵器の坏・高台付坏・蓋などと土師器の坏・碗・甕および赤焼き土器鍋の共伴関係が認められる。須恵器の坏と高台付坏における底部切り離し手法はヘラ切りと糸切りが相半ばし、両者の共存がうかがえる。ただし形態的にはヘラ切り手法のものが底径が大きく器高が低い、糸切り手法のものが底径がやや小さく器高が高いという特徴がみられる。これは意図的な器形の区分というよりは、切り離し手法の相違によって必然的になされたものと考えられる。高台付坏の中で特徴的なものは第7図13・14、第8図14のような体部外面に段を有する稜碗のタイプである。県内では川西町壇山窯跡（註1）、同道伝遺跡（註2）に類例がみられる。土師器ではロクロ不使用の甕の内面に黒色化処理を施すこと、甕の頭部にヘラナデによる軽い段を持つことが特徴である。県内で塩辛田遺跡の第30・31号住居跡出土の土器組成に類似するのは、山形市下反田遺跡第1号住居跡（註3）と河北町熊野台遺跡第V群土器である。また道伝遺跡第1号大溝の最下層（第V層下面）の土器群とも稜碗その他のセット関係において類似する。これらのことから本遺跡第30・31号住居跡の土器群の年代は9世紀前半を中心とする奈良時代末葉から平安時代初頭頃と推定される。第25・26号住居跡の時期もほぼ同じであろう。

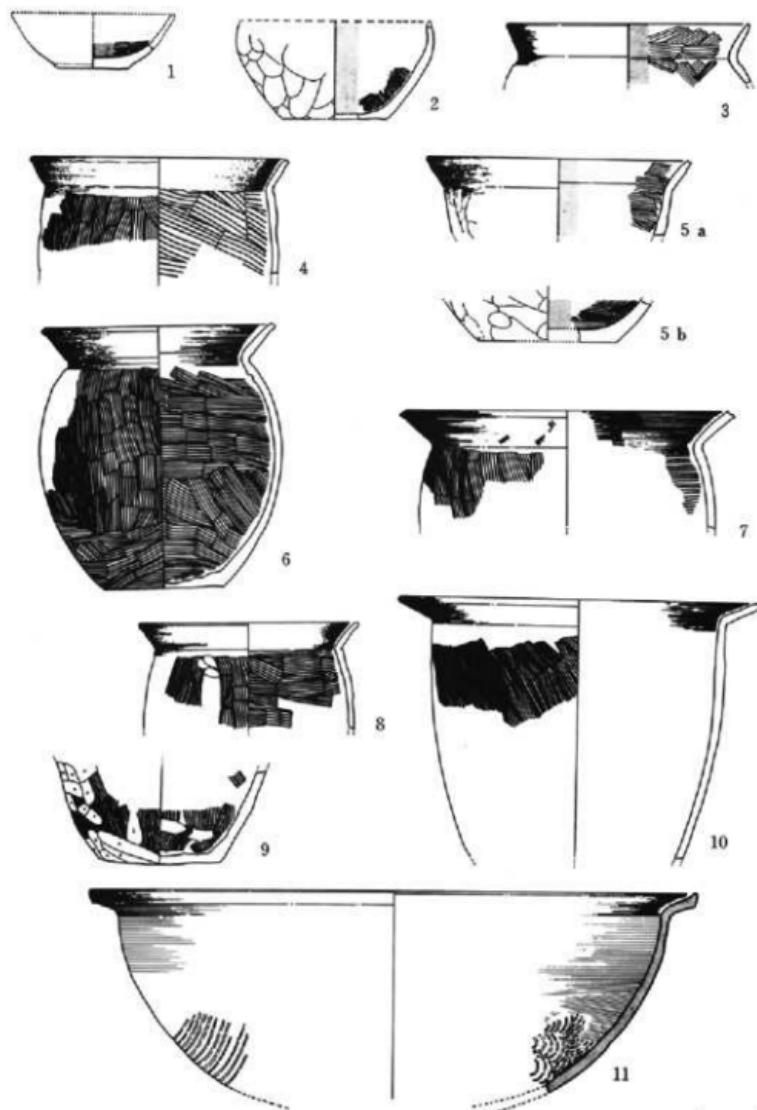
註1 柏倉亮吉・伊藤 忍1970「平野山古窯跡群」

註2 手塚 孝1979「道伝遺跡出土土器をめぐって」山形考古学会第15回研究大会レジュメ

註3 山形県教育委員会1976「大曾根条里遺跡」『山形県埋蔵文化財報告書』6所載



第8図 土器実測図(3) (ST31)



第9図 土器実測図(4)

(1~5 (ST31) · 6·7 (包含層) · 9~11 (ST30))

#### 4.まとめ

今回の発掘調査によって塩辛田遺跡からは、竪穴住居跡4・建物跡3・溝跡2・その他不明のピット群54であり、遺構群が密集する地区は、遺跡の中央部の道路をはさんで東側と西側の地区であり、地形および土層の堆積状態からみて主要な地区と考えられる。この地区は、富神川によって形成された微高地上の緩傾斜から平坦地となっており、遺構群が構築される場所としては、最適とみられ、検出した遺構および出土した土器からみて、奈良時代末葉から平安時代初頭の小単位の集落跡とみられる。

遺構群の分布状況は、3号建物跡の軸方向がほぼ磁北方向になっている他は、25・26・30・31号住居跡、32・90号建物跡および101号溝跡は、概して磁北方向より32~37°西方向に軸が寄っており、住居跡は、25・26号住居跡と隣接し、26号住居跡の南東約7mの地点に、30・31号住居跡が位置しており、住居跡がほぼ一直線上に配列されている。建物跡は東西・南北の長軸方向が32・90号建物跡では逆転しており、約12mの間隔となっている。

##### (1) 検出された遺構について

竪穴住居跡は、方形ないし不整方形を呈し、規模は一辺が3.70~7.10mと小形から中形のものである。25号住居跡は一辺3.70mと小さく、住居跡が階段状に構築されているのが特徴的である。31号住居跡の西側の脹り出し部については、おそらく出入口の施設と考えられる。炉跡およびカマド跡については、不明確ではあるが、26・31号住居跡の焼土の検出状況から考え、いずれも住居跡にカマドがあるとみられ、26号では南東・30号住居跡では南側、31号では南側よりにあったと思われる。

竪穴住居跡と掘立柱建物跡は、ともに奈良時代末葉から平安時代初頭の所産であるが、その切合関係から、小型住居と中型住居が一体となって構成された集落の廃絶後に建物が営まれたことが明らかとなった。前者の集落構成は二位田遺跡と類似する点が多い(註1)。

##### (2) 出土した遺物について

出土した遺物は、土師・須恵器など約60箱で、その大半が竪穴住居跡内から検出された。古墳時代前期の土師器は、C R・C S-49~51グリッド内より一括して出土し、範磨きや刷毛目による調整技法を有する、台付鉢・小形壺・大形壺・甌などで、「南 小泉式」に相当するものである。住居跡内より出土した土師・須恵器は、壺の底部が範切りや範削りを有する技法で、奈良時代末葉から平安時代初頭にかけての8世紀末から9世紀前半頃の所産とみられる。

註1 山形県教育委員会1976「二位田遺跡」山形県埋蔵文化財調査報告書第6集

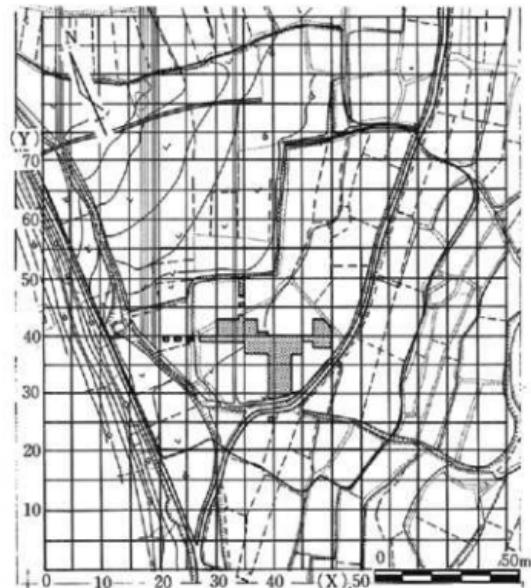
# IV 大清水遺跡

## 1. 遺跡の概要

本遺跡は、須川の支流の小河川によって形成された小扇状地の微高地にあり、遺跡の北東部に隣接して金池遺跡がある。全体的に北側から南側へと傾斜し、今回の発掘調査の対象地区は、遺跡の南側区域となっている。現状は畠地となっているが南側は以前水田となっていた（第10図 図版2）。

層序は概略して、4層に大別され第Ⅰ層黒色土（15~30cm）・第Ⅱ層黒褐色土（5~10cm）・第Ⅲ層暗褐色土（5~8cm）・第Ⅳ層黄褐色土となり、ほぼ全域にホップ畠などの開墾による第Ⅳ層までたつする擾乱がみられる。遺物包含層は第Ⅱ・Ⅲ層で部分的にしかみられない。

検出した遺構は、住居跡2（柱穴のみを検出）・建物跡1・土壙33・溝跡2・不明ピット112で、いずれも第Ⅳ層の砂礫混りの上面で確認した。住居跡は、縄文時代後期でいずれも橢円形を呈し、大きさ径5~6mで、壁・床面・炉跡などの検出はない。柱穴は、住居跡の外周に多くみられ、円形を呈し径15~45cm・深さ17~36cmである。



第10図 大清水遺跡全体図

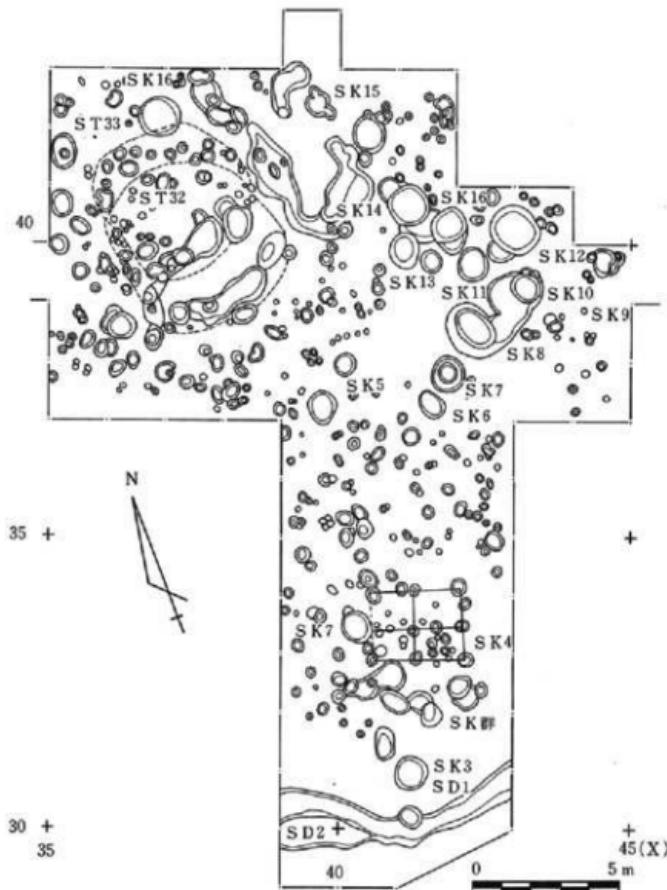
建物跡は、東西・南北とも2間で、柱穴間1.51~1.72mで掘り方は垂直に掘り込まれ、径25~30cmで深さ25~30cmである。土壙は、円形ないし橢円形を呈する二つの形状がみられ、径0.9~1.8mで、深さ0.5~1.2mで、垂直に掘り込まれるものと緩やかに掘り込まれるものとがあり、発掘区の北東側と南側に群在している。溝跡は、幅約1.0~1.2mで深さ15~25cmで、40~30グリッド内まで2本走り、東側で1本になっている。

土壤の時期は縄文時代後・晩期で、建物跡および溝跡は平安時代のものである。

(Y) +  
45

+

+



第11図 遺構配置図

遺物の出土状況は、発掘区全体が攪乱しているため明確な分布状況は不明であるが、発掘区の北西側では縄文時代後期が多く分布し、弥生時代中期の土器片が43—39グリッドの第Ⅱ層より出土し、平安時代の土師器・須恵器の土器片は、発掘区の南側に多く出土する傾向がみられた。

## 2. 出土遺物

大清水跡から出土した遺物には、縄文土器・石器・弥生土器・土師器・須恵器など整理箱にし約20箱分がある。遺物は土壤や性格不明の落ち込みが主として分布する35~42—30~43G付近から出土するが、土壤覆土内の遺物が極めて少ないため包含層出土の遺物も一括して述べる。

### (1) 縄文時代

a 縄文土器 (第12・13図 図版61・62) 第13図が土壤および性格不明の落ち込み覆土内、第12図が包含層出土内の土器である。これらの縄文土器は、9小類型に大別できる。

#### 第1類土器 (第12図8・9・18・20・28・29 第13図9・28)

撚糸文を文体とした地文の上に獨得の曲線的な沈線文を加えて文様とする土器群である。撚糸文を地文とし口縁部がやや内湾する深鉢形土器 (第12図18・20・29、第13図9)、縄文を地文とし口縁が「く」状に外反する變形土器 (第12図28)、無文で口縁部が直立する深鉢形土器 (第12図9)などがある。第12図8・第13図28は縄文を地文とした上に太い曲線文を描く例である。第12図29は裏面に格子状の沈線文が施されている。

#### 第2類土器 (第12図12・13・15・17・22 第13図1・2・5・6・11・15)

太い2~3条の沈線によってできる磨消縄文手法による紐線文を中心とする土器群である。紐線文が良く残っているもの (第13図1・2・5・6)と、やや幅の広い横方向の磨消縄文帯を有するもの (第12図12・13・15・17・22 第13図15)、流線状の磨消縄文を有するもの (第13図11)などがある。器形は口縁がゆるやかな波状を呈する鉢ないし深鉢形土器が多い。第13図6・15の口縁部裏面には1条の沈線が施されている。

#### 第3類土器 (第12図10・14・21・23・26・27 第13図10・18・23・24)

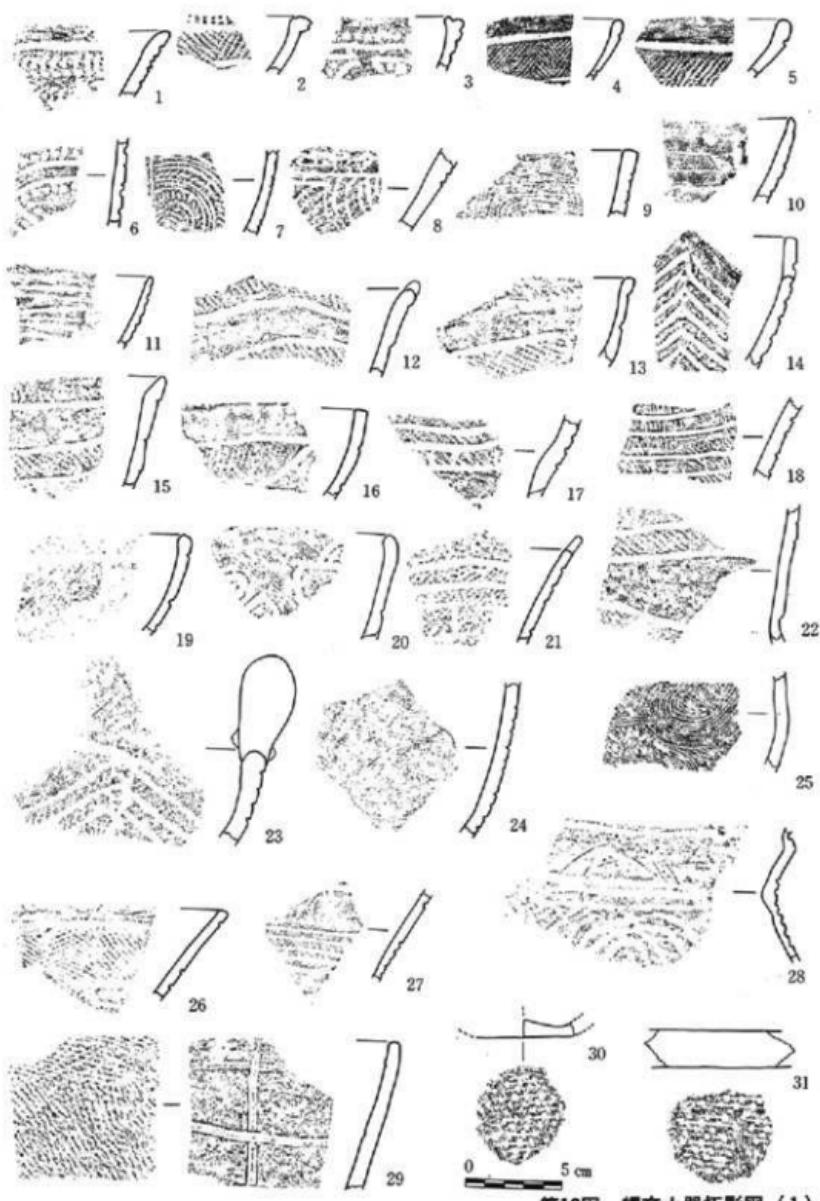
いわゆるS字状沈線文を有する土器群である。器形によって文様の手法が若干異なる。第12図23は肥厚した大波状突起を持つ深鉢、第12図14・21・26はゆるやかな波状口縁を有する深鉢、第12図10・27、第13図23・24は口辺部が直立する鉢形土器である。各器形とも口縁部から体部上半にかけて2~6条の平行な磨消縄文帯を持つ。第13図10は表面が研磨され、口縁部裏面に2条の磨消縄文帯を有する。第13図18は平行な縄文帯の間に山形の磨消縄文を有する鉢形土器である。

#### 第4類土器 (第12図5・16・19 第13図4・8・12・13・16・17・27)

S字状沈線文と横方向に展開する磨消縄文が組み合わさる土器群である。口縁が平らでやや内湾する鉢形土器がほとんどで、焼成・磨きとも良好である。

#### 第5類土器 (第12図3・6・7 第13図25)

円形の連続刺突文によって文様を区画し、内部に磨消縄文を有する土器群である。本群



第12図 繩文土器拓影図 (1)



第13図 繩文土器拓影（2）

土器の器形については不明な点が多いが、大波状突起を持つ鉢形土器を構成するものと思われる。

#### 第6類土器 (第12図1・2・4・26 第13図3・7・14・20・21)

羽状縄文を有する土器を主体とする一群である。口縁が波状で、口唇部に連続した刻目を持つ鉢形土器 (第12図2) と、平縁で口縁がやや内湾する鉢形土器の二種がある。第12図1も残存部に羽状縄文はみられないが、刺突文のあり方から本類に含められる。

#### 第7類土器 (第13図22)

全面が研磨され口頭部に刻目を伴なう横方向の連弧文を有する小形壺形土器で、本類は22の1片のみである。

#### 第8類土器 (第12図24・25)

曲線的な刷毛目文を有する土器群である。連続した沈線によって刷毛目的な手法を描くもの (24) と、板を割ったような工具による一定幅の細い刷毛目を持つもの (25) の二種がある。器形は体部が直立し口縁部がやや内傾する深鉢形土器である。

#### 第9類土器 (第12図11・第13図19)

工字ないし変形工字文を有する土器群である。口縁部に変形工字文が施される浅鉢ないし台付浅鉢 (第12図11) や頸部に工字文が施される壺形土器 (第13図19) などがある。

以上9類の土器群は、時期的に縄文時代後期前半から晩期末葉までに属するものであり、とくに後期前半の資料がやまとまって出土している。型式的には第1類土器が東北地方南半でいう宮戸I b式、関東の堀之内I式に比定できる。第2類土器は東北地方北半の十腰内I式に比較的まとまった資料があり、ほぼ関東地方の堀之内II式に対比できるが、第2類土器としたもののうちやや幅の広い横方向の磨消縄文を持つものについてはなお検討を要する。第3類土器は東北地方南半の宮戸II a式、関東の加曾利B I式にはほぼ対比できるが器形による文様の多様化の傾向が強い。第7類土器としたものもこれとほぼ同時期であろう。第4類土器は一部加曾利B I式に特徴的なS字状沈線文も残るが、体部上半の磨消縄文は第6群土器に類似しており加曾利B II式期に併行するものと捉えておきたい。第5類土器は、山形県遊佐町神矢田遺跡で第3類土器に伴なって出土することが確かめられている。第6類土器は東北地方南半の宝ヶ峰式ないし宮戸II b式に対比できるものであり、関東の加曾利B II式に併行関係が求められる。第8類土器は明確な型式名を比定することは困難であり、上述した各類のいずれかに併行するものとゆるく考えておきたい。第9類土器は縄文時代晩期末葉大洞A式に比定できる。

大清水遺跡の各類土器は一つの型式としてみた場合なお文様や器形の欠落が多い。後述する窟遺跡の土器群についても参照していただければ幸いである。

### b 石 器 (第14~15図 図版15)

本遺跡から出土した石器は総数570点である。そのうち30点は土壌・ピットの遺構から出土したが、大半は包含層から検出された。その種類は、打製石器として石鎌・石錐・石匙・打製石斧・スクレーパー・剝片・石核等があり、磨製石器には磨製石斧・石刀・石棒、さらに礫石器としての凹石・磨石・石皿がある。

#### 石 鎌 (第14図1~4)

12点の出土をみており、石材は1点の玉髓質を除き頁岩である。これらは基部の形態から有茎のI類と無茎のII類に分類でき、前者が10点、後者が2点となっている。また、完形品はI類のもの2点だけで、他は破損品、ないしは未成品である。1~3にはいずれもタール状物質の付着が認められる。3はb面の右側に、尖頭部下端から先端をもぎ取るようなフルーティング状の剥離がある。4はb面右脚部と先端に熱作用によるハジケ現象が認められ、同様な破損現象がみられるものが他に2点ある。

#### 石 锥 (第14図5~6)

5点出土しており、石材はすべて頁岩である。これらはつまみをもつI類と、棒状のII類に分類でき、I類はさらにつまみ部分が尖頭部より長いIa類と、短かいIb類に細分できる。内訳はIa類2点、Ib類1点、II類2点で完形品はなく、いずれも先端部に折損あるいは破損が認められる。5はIb類、bはII類に属し、先端部断面は5点全部が菱形である。

#### 石 匙 (第14図7~10)

7点出土し、石材は9が玉髓質の他はすべて頁岩である。これらはつまみに対して刃部を平行にもつ縦形のI類、直角にもつ横形のII類に分けられ、それぞれが、両面加工のa類、片面加工のb類に細分できる。内訳はIa類1点、Ib類3点、IIa類2点、IIb類1点で7はIa類、8はIb類、9はIIa類、10はIIb類に属する。

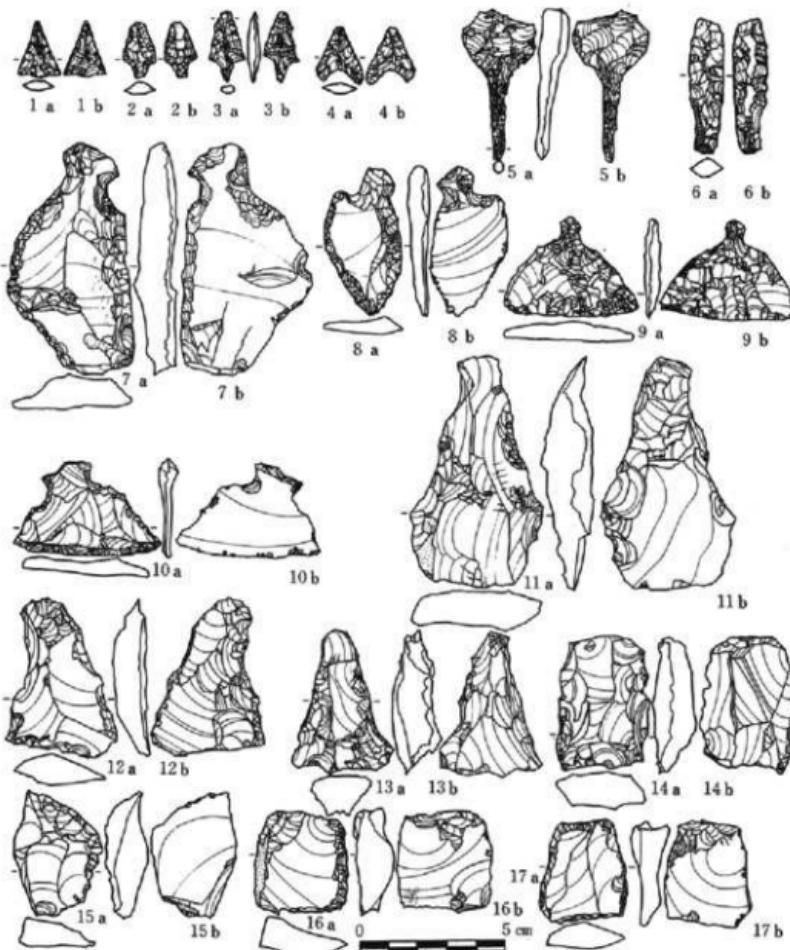
#### 打製石斧 (第14図11~14)

5点出土し、石材はすべて頁岩である。これらは撥形のI類と短櫛形のII類に分けられ、それぞれは、先端部から基部に向う加工のあるa類と加工のないb類に細分できる。内訳はIa類1点、Ib類3点、IIa類1点で、11・12はIb類、13はIa類、14はIIa類に属する。

#### スクレーパー (第14図15~17)

剝片の縁辺に連続した二次加工を施した石器で27点出した。石材はすべて頁岩である。15は先端部に、16は側縁に、17は両側縁と先端に加工がみられる。

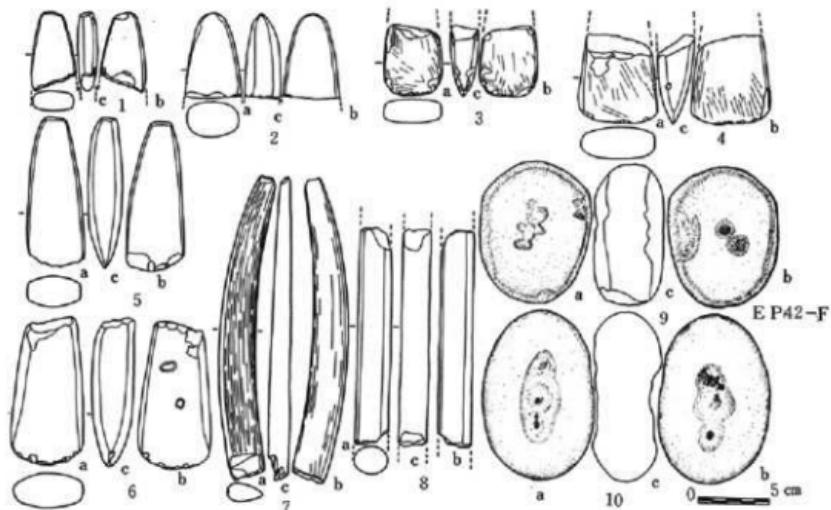
他に打製石器としてノッチ7点、打製石斧や甕状石器の未成品と思われる両面に加工が施されたもの21点、加工痕ある剝片61点、剝片359点、石核38点がある。



第14図 出土石器 (1)

磨製石斧 (第15図 1~6)

9点出土している。石材は石英安山岩 (2・4・5・6他3点) と流紋岩 (1・3) である。5は刃部に破損がみられるものの、ほぼ完形となっているが、他はすべて折損している。基部資料2点、刃部資料3点、中間部資料3点で、基部の平面形から尖るI類、幅広のII類、そして刃部の平面形から角刃のa類、丸刃のb類に分けられる。刃部資料によ



第15図 出土石器（2）

ると、その断面形はいずれも両刃状である。3・4は恐らくⅡa類、5はⅡb類、6はⅠb類に属し、1は小型のⅡ類、2はⅠ類、他にⅡ類のものが3点ある。6はb面に凹みがあり、折損後の再利用と考えられ、同様な資料が他に1点ある。

#### 石刀（第15図7）

1点だけの出土であり、石材はスレートである。切先を若干欠く刀身部だけの資料で、刃部が相当に内湾するいわゆる内反りの石刀である。横断面の形は丸みをおびた三角形を呈し、峯の中央部に幅、深さとも約1mmの一条の溝がある。

#### 石棒（第15図8）

1点だけ出土し、石材はスレートである。中央部だけの資料で横断面は楕円形を呈する。

#### 四石（第15図9・10）・石皿

円礫の片面、あるいは両面、場合によっては両側面にも凹みをもつ石器で10点出土している。石材はすべて多孔質の花崗岩・安山岩・凝灰岩の類である。凹みだけをもつⅠ類と凹みと研磨痕をもつⅡ類に分けられ、また、両面の凹みの数によってⅠ-1・1類（両面に1個づつの凹みをもつ）、Ⅱ-2・2類（両面に2個づつの凹みをもちさらに研磨痕をもつ）…のように細分できる。9はⅡ-2・1類、10はⅠ-3・3類に属し、他にⅠ-1・0類1点、Ⅰ-1・1・1類1点、Ⅱ-2・2類2点、Ⅱ-2・2類、Ⅰ-3・0類、Ⅰ-3・2類、Ⅰ-4・3類が各1点ある。

図示しなかったが、片面に磨面をもつ凝灰岩製の石皿の剥片が2点出土している。

## (2) 弥生時代～古墳時代 (第16図1～8)

弥生時代および古墳時代の遺物は50片に満たない資料なので一括して述べる。

弥生土器は全部で6片出土している(第16図1～6)。発掘区のほぼ全域から出土しているが、2号溝・4号掘立柱建物跡柱穴・32号住居跡・土壙群などの造構覆土中からものが多い。1・2は口縁部が「く」状に外反する壺形土器の口縁部で、口唇部に押圧繩文、頸部に結節回転による綾繩文を有する。体部には全面にLRの細い斜繩文が施される。3・4は壺形土器の体部中程の破片で、体部上半に半截竹管状工具による2本1組の平行沈線文、体部下半に斜方向の付加繩文が施されている。5・6は甕ないし壺形土器の底部近くの破片で、全面にLRの斜繩文が施される。時期的には弥生時代中期末葉、東北地方南半でいう広義の「桜井式」期にあたるものである。

古墳時代の土器は、2号溝の覆土2層および32号住居跡の付近からやまとまって出土している。すべて壺形土器の破片で、複合口縁で朱塗がなされている土師器壺(7)、單純口縁で口縁部が「く」状に外反し、頸部から体部にかけて細い刷毛目を有する土師器壺(8)などがある。総じて土器の遺存状況が悪く、細部の調整については不明な点が多い。時期的には古墳時代前半、東北地方南半でいう「塙釜式」に相当すると思われるが、一部はつぎの「南小泉Ⅱ式」に含まれるものもあるようである。

## (3) 平安時代 (第16図9)

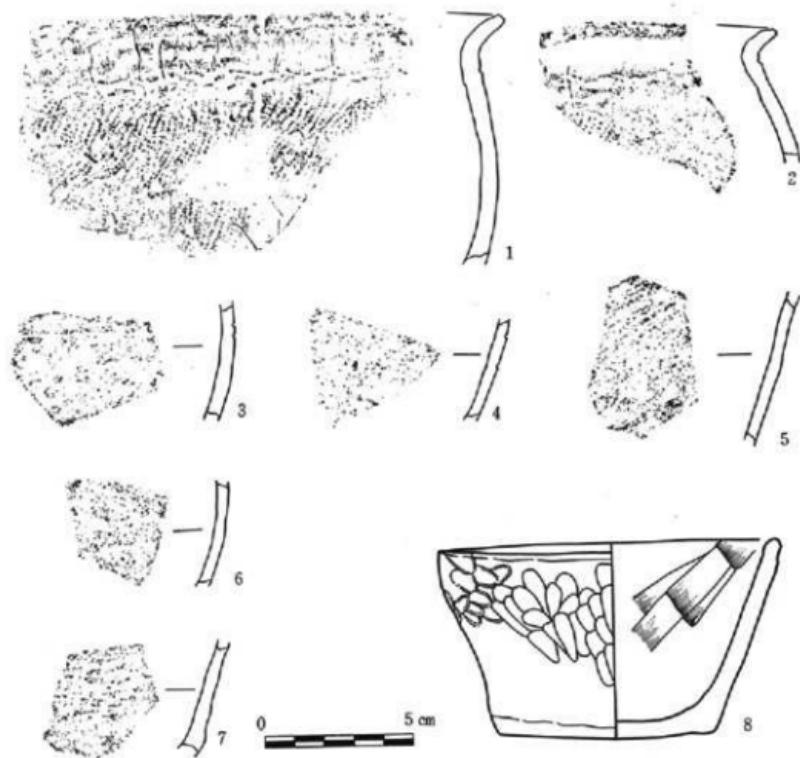
平安時代の土器は、土師器・須恵器・赤焼き土器の三つに大別される。全部で15片程の少ない資料であるが、2号溝覆土2層、4号掘立柱建物跡の柱穴覆土、1・23号土壙覆土2・3層などから出土している。

土師器は1号土壙の覆土内から3片出土している。すべて大形の壺形土器の体部片で、外面に縱方向の刷毛目、内面に横方向の刷毛目調整がみられる。9は32号住居跡付近の包含層II層から出土した平底の鉢形土器である。体部外面にヘラミガキおよびケズリ調整、内面にヘラナデ調整がみられる。

須恵器は4号建物跡の柱穴および調査区北半から少量出土している。壺と壺形土器の器種があり、ケズリなどの再調整は認められない。

赤焼き土器は2号溝覆土2層と4号建物跡柱穴覆土から3片出土している。器種には壺と甕ないし瓶があり、壺は底部の切り離し手法が糸切りによるもので再調整は認められない。甕ないし瓶は、内外面に縱ないし横方向の刷毛目調整がみられる。

これらの土器の時期は、2号溝の赤焼き土器が平安時代後半11世紀頃、その他のものは平安時代中期10世紀前後頃と推定される。



第16図 弥生土器拓影図・土師器実測図

#### 4.まとめ

今回の発掘調査によって大清水遺跡からは、住居跡2（柱穴のみを検出）・建物跡1・溝跡2・土壤33・不明ピット112が検出された。調査区全体にわたって遺構が分布しているが、遺物包含層や遺構がポップ烟開墾の際に大半が擾乱を受け、遺存状態は良好とはいえない。明らかになったことは次の通りである。

- (1) 今回の発掘調査の状況からみて、遺跡の主要な地区は圃場整備事業の地区外にある遺跡の中央部から北側の約3分2の区域の畠地と考えられ、遺物の散布状態や遺物・遺構の包含状況からみてその保存状況は良好であると思われる。

(2) 検出した縄文時代の遺構のうち、柱穴のみで確認した住居跡は、プランが、楕円形を呈し、大きさが径5～6mである。第3類土器から第4類土器が多く出土していることから、縄文時代後期中葉宮戸IIa式期に比定される。県内においては最上町水上遺跡（註1）からも同時期の住居跡が検出されており、そのプランは不整方形を呈し壁柱穴を主体とした住居跡で8.00×6.23mの規模がある。

土壤は、円形あるいは、楕円形を呈し、径25～30cmで二つの形状に分類することができるが、両者に時間的な差異ではなく、縄文時代後期中葉の宮戸IIa式期からIIb式期を中心とする時期を主体とする。

建物跡・溝跡は、出土遺物からみて平安時代中葉から後半の時代であるが、本遺跡においての、内容・性格は不明である。平安時代の住居跡や建物跡は発掘区外にある区域が有望とみられる。

(3) 出土遺物は、縄文時代後期・弥生時代中期末・古墳時代・平安時代と広範な時代にわたっており、量的には縄文時代後期の遺物が多い。内反りの石刀が出土していることは特異であり、県内での石刀の出土例として、水上遺跡（註1）・西川町的場遺跡（註2）・遊佐町神矢田遺跡（註3）がある。弥生時代の遺物は土器片のみで2本の平行沈線による文様を描出する桜井式の斐形土器である。

註1 山形県教育委員会1980「水上遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財発掘調査報告第27集

註2 山形県教育委員会1978「的場遺跡他発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財発掘調査報告書第14集

註3 遊佐町教育委員会1972「神矢田遺跡第3・4・5次調査報告書」

# V 坊屋敷遺跡

## 1. 遺跡の概要

本遺跡は、須川へ流入する小河川に形成された小扇地の微高地にあり、遺跡全体の地形は西側で高く、東側で低くなり傾斜している。1.5~2mの比高差がみられる。東側で柏倉土師遺跡と小河川をはさんで南側に金池遺跡と隣接している（第17図 図版3）。

遺跡の層序は、大別して4層に分けられる。第Ⅰ層黒色土（耕作土15~25cm）、第Ⅱ層黒褐色土（15~25cm）で炭化粒子や風化礫が混り、第Ⅲ層暗褐色土（15~20cm）で炭化粒子を多く含む粘質微砂で、第Ⅳ層黄褐色土で微砂質で地山である。遺構の確認面は、古墳時代から平安時代は第Ⅱ層中位から下部で、縄文時代は第Ⅲ層中である。遺物包含層は同様で第Ⅱ・Ⅲ層中である。

検出した遺構は、住居跡7・建物跡3・土壙34・溝跡2・ピット15（古墳時代から平安時代の時期）・不明ピット78である。住居跡は第Ⅳ層の上面を掘り込んでいるほかは、建物跡の柱穴・土壙・溝跡などは第Ⅳ層中を掘り込んでいる。

遺構の分布状況については、各時代で次の通りである（第18・19図 図版3）。

(1) 縄文時代は土壙のみであり、発掘区A・B地区に広範に分布しているが、A地区ではSK16を中心とする北東部、中央部でSK132を中心に、南側でSK135である。B地区では東側でSK12を中心に、中央部でST21付近にみられ、五地区に偏在している。

(2) 古墳時代は、住居跡のみでB地区に偏在しST2・21・87で、ST70が離れてA地区

(Y)  
160  
150  
140  
130  
120  
110  
100  
20 30 40 50 60 70 80 (X) 50m

第17図 坊屋敷遺跡全体図

北側中央に位置しており、ST2とSD7が重複し、ST99がST21の北東側に接している。ST2を中心にST21・87の距離は約10mで、ST21とST87では約16mである。

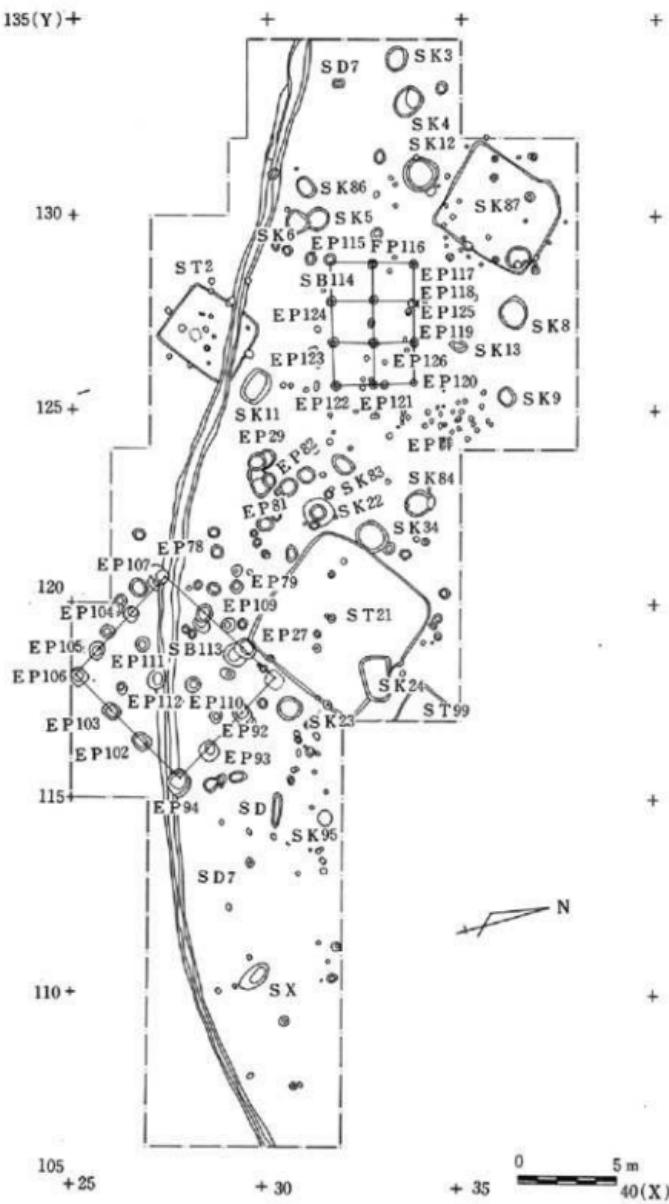
(3) 奈良時代から平安時代にかけては、住居跡はA地区の中央部と東側に位置しており、ST54は重複している。建物跡はA地区の北側にSB25、B地区の中央部付近にSB113・114

がありSB113はSD7と重複している。土壤は方形ないし梢円形を呈し、4基確認されSK11・17・24・51と散在している。

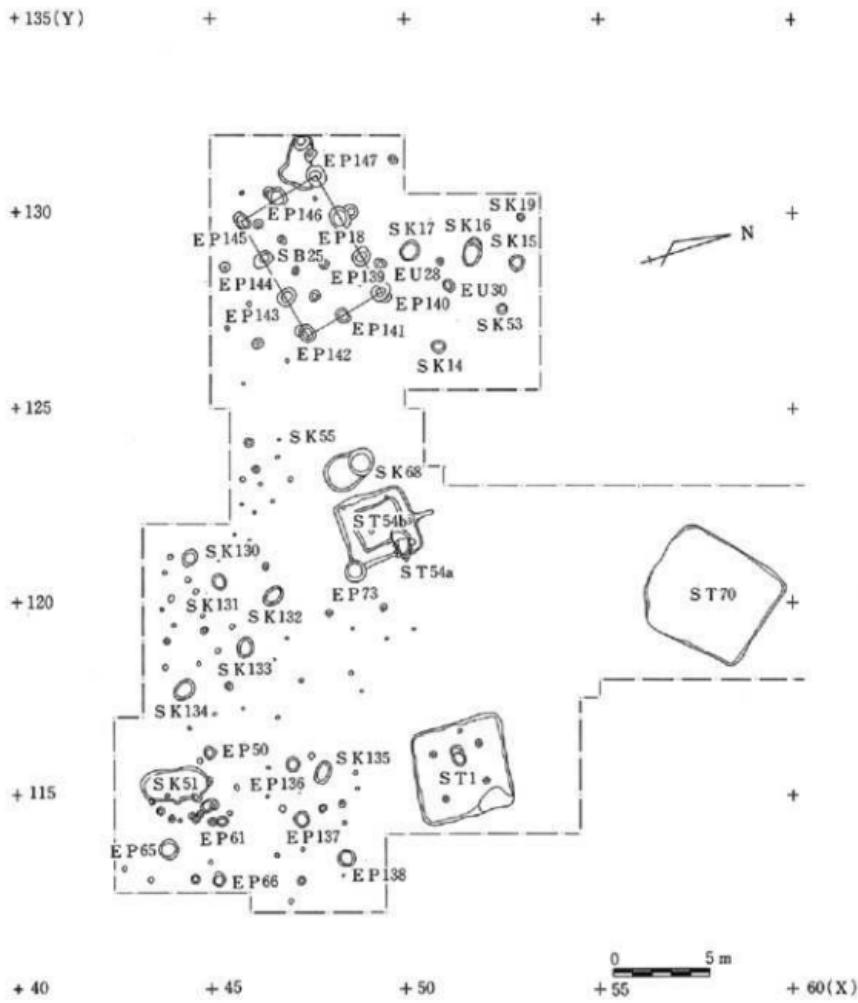
(4)溝跡は、B地区の南側にあり、ほぼ東西に走り弧を描いている。

このように、検出された遺構は、とくに古墳時代から平安時代にかけての住居跡・建物跡は、SB114の長軸方向が東西になっている他は、一定の方向をもっているのが特徴である。

出土した遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・赤焼き土器・石器で、整理箱にして約57箱である。



第18図 B地区遺構配置図



第19図 A地区遺構配置図

出土したた遺物の大半は、住居跡・溝跡・土壤内の覆土・床面などから出土しており、包含層より出土した遺物は約9分の1程度である。とくに弥生土器片はS T 2 の覆土および29—134 グリッド内で出土している。縄文時代の石器の大半は S D 7 の覆土中からその大半が出土している。

## 2. 遺構

### (1) 住居跡

#### 1号住居跡 (第20図 図版3)

A地区の東側のやや傾斜地、50~52- 114~117 グリッド内にあり、第Ⅱ層下部で確認され、遺存状態はやや良好である。

平面形は、住居跡の隅が丸くなる不整の正方形を呈し、規模は一辺が4.90~5.00mで、南北軸方向がN-5°-Eを計る。壁は、南側ではほぼ垂直になり、北・東・西側壁では緩やかに掘り込まれ、北東側ではとくに顕著であり、確認面からの深さは32~35cmである。床面は、住居跡の中央西側よりEP2付近で凹凸がみられ、EP1付近でやや高くなり、その他は平坦であり、EP5からSX8にかけては堅く踏みしめられている他は軟弱であり、とくに壁付近が軟弱である。周溝はみられない。柱穴は5本検出され、主柱穴はEP1~4で径25~45cm・深さ28~50cmで、南北方向の間隔は3.5m・東西方向は2~2.20mである。支柱穴はEP5・6で径15~20cm・深さ20~25cmである。

カマド (EL7) は、住居跡の北東壁付近に位置し、全体が崩れて規模は不明であるが長軸9.50m・幅約1.10mと推定され、長軸方向がほぼ東西になっている。構造は、角柱礎の検出からみて、袖・天井部に使用したとみられ、粘土塊の出土から砂質土と混合して構築したものと考えられる。煙道や焚口については不明確である。

住居跡の層序は、大きく分けて4層に分けられる。1層黒褐色土で炭化粒子・風化礫粒を含みやや堅い土質で、2層黒褐色土で1層と近似するが粘質で軟らかく、3層暗褐色土で炭化粒子を多量に含み軟らかく、4層暗褐色土に風化礫粒が混り壁際でみられ、全体に中央部が窪むようにレンズ状に堆積している。

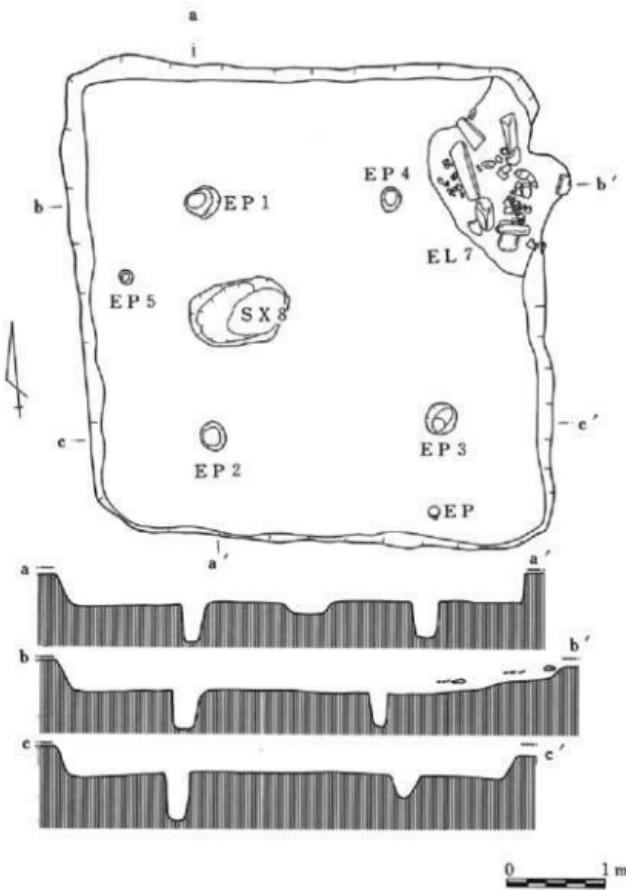
出土遺物は、床面から須恵器の高台壺1と土師器・須恵器の壺・甕・壺の小片が出土し、その他縄文時代の遺物が混入している。

SX8は、覆土3層中を精査している際に確認され、径1.05×0.65m・深さ25~30cmで不整梢円形を呈し、1号住居跡より新しく、性格は不明である。

本住居跡の時期は、出土した土器からみて奈良時代末葉の所産と推定される。

#### 2号住居跡 (第21図 図版3・4)

B地区の西側の平坦地、27~29- 125~128 グリッド内に位置し、第Ⅱ層下部で確認され、第Ⅲ層を掘り下げ床面としている。住居跡内東側で7号溝跡と重複しており、さらに東南側で11号土壙と隣接している。覆土上面が水田耕作により西側半分が擾乱されている他は、遺存状態は良好である。



第20図 1号住居跡

平面形は、東側から北側にかけて大きく隅丸になる不整方形を呈する。規模は、ほぼ東西が長軸になり4.35m、南北に短軸をもち3.70mで、長軸方向はN-62°-Eを計る。壁は東側で垂直に掘り込まれ、北・西・南側で緩やかに掘り込まれ、検出面からの深さは15~20cmである。周構および壁溝はみられない。

床面は、住居跡の中央部でやや高くなり、壁付近で低くなる。やや凹凸がみられ、炉跡(EL)を中心とし、EP 3・4・10付近まで堅く踏みしめられ、西・北側壁付近ではとくに軟弱である。柱穴は13本検出され、主柱穴は住居跡中央部の炉跡付近と北側壁と東側壁

と南側壁にそれぞれ1~2本あり、E P 2・3・5・6・7・8であり、径30~40cm・深さ30~45cmで、E P 6~8は住居跡の外側に向け掘り込まれている。支柱穴はE P 4・10~14で、径20~40cm・深さ15~25cmである。壁柱穴はE P 9・15であり径10~15cm・深さ5~12cmである。

炉跡（E L 1）は、住居跡の中央南西より位置している地床炉である。不整の楕円形を呈し、径6.50×6.00cmで炉中央部が良く焼けている。若干の掘り込みをもっている。

住居跡の覆土は、2層に分けられる。1層暗褐色土で炭化粒子を含みやや堅くしまっており、2層褐色土で炭化粒子を多量に含み軟らかく、ほぼ水平に堆積している。

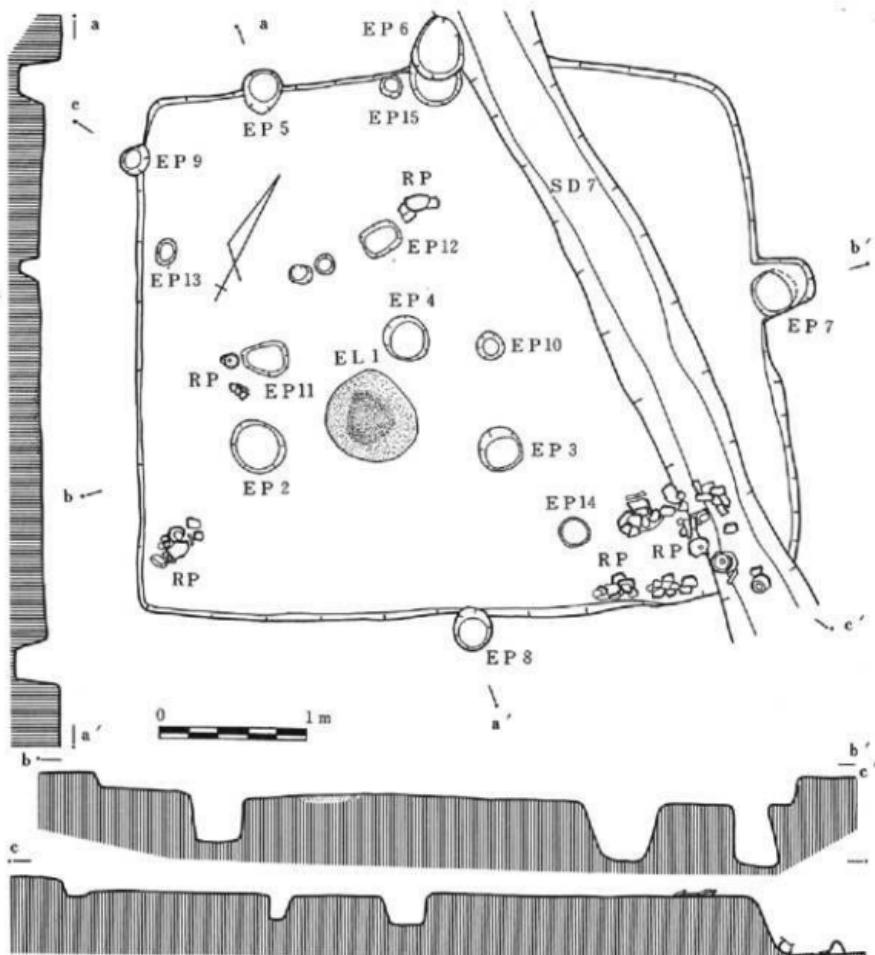
出土した遺物は、いずれも覆土2層より土師器の环・甕・壺などの破片が多く出土している。一括土器は、住居跡の南西隅で壺形土器、E P 11の付近で高台环の台部が、E P 12の北側で甕形土器、南東側のS D 7の付近で甕形土器の一括が出土し、いずれも押しつぶされたような状態である。その他、覆土1層より弥生時代の土器片が出土している。

本住居跡は、7号溝跡と重複しており、土層セクションの観察により7号溝跡が新しく、時期は、出土した遺物からみて、古墳時代前期の所産と推定される。

#### 21号住居跡（第18図 図版3）

A地区のほぼ中央部の平坦地、29~34-17~21グリッド内に位置し、南東側で24号土塙と重複し、さらに99号住居跡と近接し、南側で113号建物跡と近接している。第Ⅲ層において確認され、床面は第Ⅱ層下部となっている。遺存状態はあまり良くない。

平面形は、全体に胴が脹らむ隅丸になる不整正方形を呈している。規模は一辺が7.40~7.50mで、南北方向軸がN-64°-Eを計る。壁は、北側壁でほぼ垂直に掘り込まれている他は、全体に緩やかな傾斜をもって掘り込んでおり、検出面からの深さは12~16cmである。床面は、住居跡の中央部がやや高くなり、北側壁の方向に傾斜しており、中央部の1mの範囲がやや堅く踏みしめられているほかは軟弱である。周溝および壁溝は、認められない。柱穴は8本検出され、主柱穴は確認されず、支柱・壁柱と考えられる。



第21図 2号住居跡

炉跡は、住居跡の中央西側よりに炭化粒子や焼土粒子が15cmの範囲でみられる程度で、  
炉跡としての確証はない。出土遺物は、住居跡南西隅の付近の床面より土師器の變形土器  
の一括が押しつぶされた状態で出土している。

本住居跡と24号土壤との重複関係は、24号土壤が新しい。時期は出土遺物からみて奈良  
時代前期の所産と推定される。

## 54号住居跡 (第22図 図版5)

A地区のほぼ中央部の平坦地、49~51~21~22グリッド内にあり、南東側でE P 70と重複し、西側で55・68号土壌と隣接している。第Ⅱ層下面で確認され、第Ⅳ層上面まで掘り込まれ床面としている。54a・b号住居跡の新旧関係は、54a号住居跡の床面および北側壁を精査する際に、54b号住居跡が検出された。

### 54a号住居跡

平面形は、北東隅が丸くなる正方形を呈している。規模は一辺が3.50~3.65mで、南北方向がやや長軸方向になっている。壁は、全体にはほぼ垂直に掘り込んでおり、検出面からの深さは24~31cmである。床面は、54b号住居跡の部分が暗褐色土で黄褐色土ブロックが混じり踏みしめられており、壁付近で軟弱になっている。全体に床面は凹凸もなく平坦である。周溝および壁溝は認められない。柱穴は3本検出されE P 1~3で、E Pは住居跡の中央南寄りにあり径45cm・深さ40cmで、E P 2はE L 5(カマド)の焚口の部分にあり径23cm・深さ15cmで、E P 3は南西壁隅にあり径25cm・深さ13cmである。柱穴の構成については不明確である。

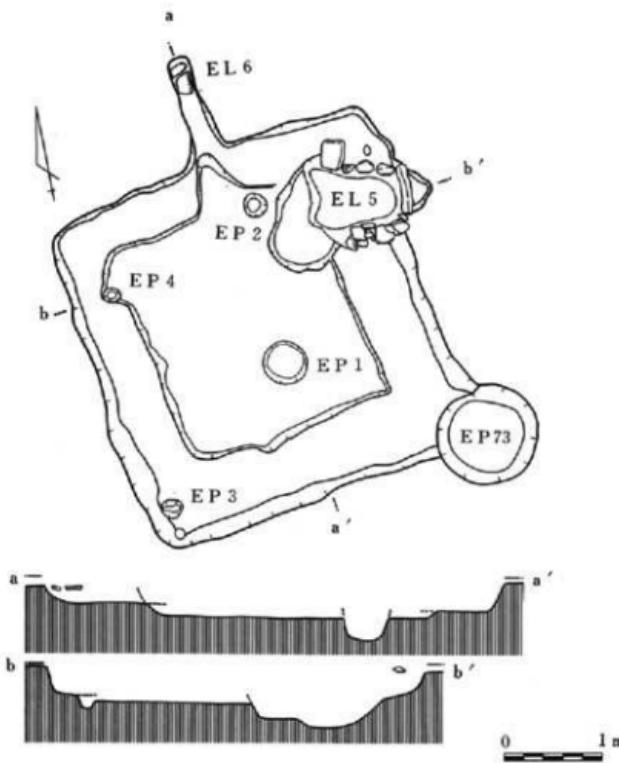
カマド(E L 5)は、住居跡の北東壁隅寄りに位置している。規模は長軸方向が東西になり1.80mで、最大幅が95cmである。構築の状態は、左右の袖に約15~35cmの偏平な河原石や10~15cmの礫を使用し、まわりを灰褐色の粘土でかためておりその上部を砂質土で築き固めている。焚口部から焼成部にかけては、二段に掘り込まれ床面からの深さは25~35cmである。煙道部は、住居跡からわずか25cm程度突出しているのみであり、天井石には長さ約55cmの角柱礫を使用している。カマド全体の焼成は、炭化粒子や焼土も余り検出されておらず、推らく廃棄する時点で清掃したものと考えられる。

出土遺物は、覆土2層より内面が黒色化処理された土師器壺・須恵器壺・高台付壺や赤焼土器が出土し、赤焼き土器が多く出土している。

### 54b号住居跡

平面形は、北西壁隅と南側壁が外側を脇り出す不整の長方形を呈している。規模は、長軸方向が2.56mで短軸方向が2.15mで長軸方向はN-3°-Wを計る。壁は、全体に緩やかに傾斜をもって掘り込まれ、54a号住居跡床面よりの深さは10~13cmである。床面は、全体に凹凸がみられるがやや堅く踏みしめられている。壁溝および周溝は認められない。柱穴は1本検出され、E P 4は住居跡の北東隅壁寄りに在り径12cm・深さ15cmである。

カマド(E L 6)は、住居跡の北側の中央東寄りに位置している。カマド全体は54a号住居跡が構築された際に大半以上が壊されている。規模は長軸方向がほぼ南北になりN-3°-Wで1.5mの長さである。煙道部のみ遺存しており、先端部に25~30cmの偏平な河原石



第22図 54号住居跡

がみられる。遺物の出土はみられない。

54号住居跡の覆土は、大きく分けて4層に分けられる。1層黒褐色土で炭化粒子や風化礫粒を含む。2層黒色土でやや粘質で炭化粒子や焼土粒子が混り、3層茶褐色土で微砂質で炭化粒子を多く含み、4層暗褐色土で黄褐色土ブロックが混じる54b号住居跡の覆土であり、レンズ状に堆積している。

54a・b号住居跡の新旧関係は、土層の堆積状態からみて54a号住居跡が新しく、54b号住居跡が古い。なお両住居跡の時間的な差は、54b号住居跡の埋没過程で54a号住居跡が構築され、近接した時期と考えられる。時期は、54a号住居跡では出土遺物からみて平安時代後半の所産と推定され、54b号住居跡は54a号住居跡との関係からみてほぼ同時代と考えられる。

### 70号住居跡（第23図 図版6）

A地区の北側中央部の傾斜地、56~59—118~121 グリッド内に位置し、単独に住居跡のみがある。遺存状態は、以前の水田開墾の際に覆土上面がほとんど擾乱を受けているため良くない。確認面は第Ⅱ層下部で、第Ⅲ層の上面をわずかに掘り込んで床面としている。

平面形は、南西側壁が住居跡の外側へ張り出す不整の隅丸方形を示している。規模は長軸方向がほぼ南北にあり、長軸6.35mで短軸5.30mになり長軸方向はN-40°-Eを計る。壁は、全体にほぼ垂直に掘り込まれておらず、東南隅・南側中央および西側では垂直になっている。確認面からの深さは12~38cmで、西側から西南側が高くなっている。床面は、西側では平坦になり、住居跡中央部が高くなり、東側から壁付近にかけて低くなっている。かなりの凹凸になり、中央部が堅くなっているほかは、軟弱である。壁溝および周溝は認められない。柱穴は1本検出され、住居跡のほぼ中央部に位置し、径18×10cmで深さ13cmであり、性格については不明である。炉跡については、確認できない。

本住居跡は、炭化材や焼土が住居跡全体に検出された焼失家屋である。焼失の状態は、炭化材が住居跡の北側の壁付近にみられ、いずれも住居跡中央部に向けて炭化材が倒壊した状態が顕著にみられる。焼土は、住居跡の中央部や北側に部分的に検出されている。土器の出土状況は、住居跡の中央部から南側にみかけられ、北・西・南側から投棄された状態で、河原石も混じっている。おそらく焼失した時点で土器や河原石を一括投棄したものと考えられる。土器はすべて二次焼成を受けている。

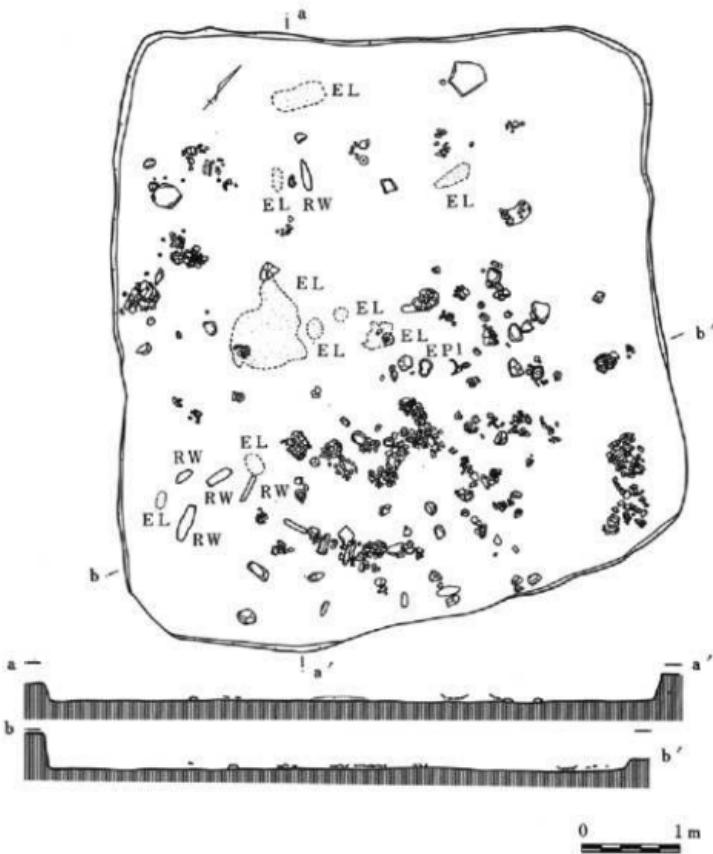
住居跡の覆土は、2層に大別される。1層黒褐色土で炭化粒子や風化礫粒が混じり微砂質でやや固くなっている。2層暗褐色土で炭化材・粒子や焼土ブロックが多く含まれ軟らかくなっている。覆土の堆積状態は、住居跡中央部が大きく窪むレンズ状に堆積し、南側から流れ込んでいる。

出土した遺物は、土師器が主体で、覆土1層から縄文時代の土器や石器も出土している。土師器は、完形・半完形・一括土器を含む15~17個体が住居跡の中央部から南側にかけてまとまって出土し、高环・器台・小形壺・壺・甕などの器種が出土している。

本住居跡の時期は、出土した遺物からみて古墳時代前期の所産と推定される。

### 87号住居跡（第24図 図版5）

B地区の西側の平坦地、34~37—128~131 グリッド内に位置しており、西側に12号土壙と接し、南東側で8号土壙と南側で114号建物跡と隣接している。確認面は第Ⅱ層下部で、第Ⅲ層を若干掘り込んで床面としている。遺存状態は、この付近は水田耕作が著しくため、覆土の上面から中位にかけてそのほとんどが擾乱を受けている。



第23図 70号住居跡

平面形は、北東隅において丸味をもち若干張り出す不整の方形を呈している。規模は長軸方向がほぼ東西方向になり、長軸5.78mで短軸5.08mであり、長軸方向はN—40°—Wを計る。壁は、全体に緩やかな傾斜をもって掘り込まれており、確認面からの深さは8～12cmである。床面は、住居跡の中央部に高い凹凸がみられ、東側壁付近でやや傾斜がみられ、その他は凹凸がみられずほぼ平坦である。壁溝および周溝はみられない。柱穴は住居跡内で16本、住居跡外側の廻りで12本で計28本検出される。主柱穴はE P 1～4で、北側のE P 1・2と南側のE P 3・4はいずれも対応せず若干ずれており、径30～55cmで深さ28～

36cmでほぼ垂直に掘り込んでいる。支柱穴は、EP 5～12・13で、住居跡の南側壁寄りにみられ、EP 8は中央部に位置し、径15～35cmで深さ8～24cmを計る。壁柱穴は、EP 15・16で径30～52cmで深さ25～28cmである。なお住居跡外側にある柱穴は、住居跡内柱穴と覆土が同様であるため、本住居跡に付随する柱穴と考えられ、径12～30cmで深さ8～17cmである。炉跡は確認されないが、EP 1とEP 2の間で床面直上で焼土粒子やブロックが15cmの範囲で検出されたが、床面は焼けておらず掘り込みなどの施設がみられない。

住居跡覆土は上部から中位が不明で、下層のみみられ暗褐色土に炭化粒子を含み軟らかくなっている。出土遺物は住居跡の西側壁付近で土師器の高杯片や器台片など7点出土している。

本住居跡の時期は、出土した遺物からみて古墳時代前期の所産と推定される。

#### 99号住居跡 (第18図)

B地区の中央部の平坦地、33・34—17・18グリッド内にあり、南西側で21号住居跡と接しており、擾乱が著しく遺存状態は良くない。平面形は方形を呈し、規模は不明である。壁は傾斜をもって掘り込まれ、確認面からの深さは8～9cmである。床面は軟弱で、凹凸している。出土遺物は、土師器の器台の破片が1点出土している。時期は、出土遺物からみて古墳時代前期と推定される。

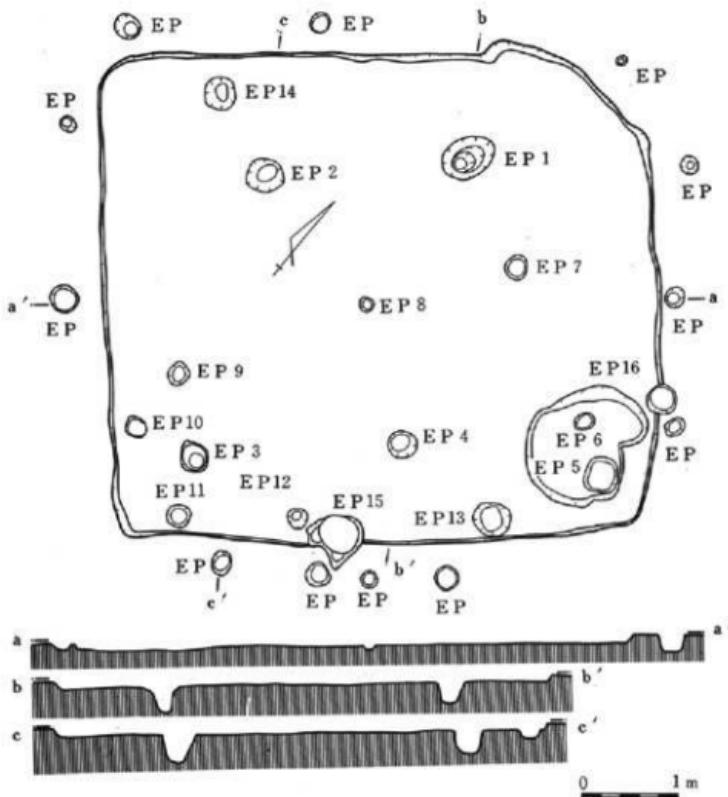
### (2) 建物跡

#### 25号建物跡 (第19図)

A地区の西側の平坦地、45～49—126～131グリッド内に位置し、第Ⅲ層下部において確認される。遺存状態は良好である。ほぼ東西3間・南北2間になりEP 18・139～147で、長軸(東西方向)はN—171°—Wを計る。柱穴の掘り方は、いずれも掘立柱となり方形あるいは不整の方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込んでおり、大きさは径64～82cmで深さ65～72cmで、柱穴間は225～236cmである。覆土はいずれも黒色土で炭化粒を多量に含み、まわりに小礫および褐色土の粘土ブロックが混じる。EP 18の覆土中より須恵器片が出土している。時期は、出土した須恵器からみて奈良時代末葉から平安時代初頭にかけての、掘立柱建物跡である。

#### 113号建物跡 (第18図)

B地区の中央部東寄りの平坦地から傾斜地に変る地区、2～29—115～121グリッド内25に位置し、EP 94・107で7号溝跡と重複している。遺存状態はほぼ良好である。確認面



第24図 87号住居跡

は、第Ⅲ層下部である。東西3間・南北3間になり、EP27・92~94・102~107・109であり、長軸がわずか東西方向で770 cmで短軸710 cmで、長軸方向はN-168°-Wを計る。柱の掘り方は、いずれも掘立柱となり方形あるいは不整方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込んでいる。大きさは径84~112 cmで深さ72~78 cmである。覆土の状態はほぼ25号建物跡の覆土と近似しているが色調は黒色土でやや明るくなっている。出土遺物は、縄文時代の土器や石器のみで、土師器や須恵器は出土していない。

113号建物跡と7号溝跡の重複関係は、113号建物跡が新しい。時期は、覆土の状態からみて、25号建物跡と同時期と考えられ奈良時代末葉から平安時代初頭と推定される。

#### 114号建物跡 (第18図)

B地区の中央部の西寄り平坦地、32・33—125～129グリッド内に位置し、北側で87号住居跡と隣接している。第Ⅲ層上面で確認される。遺存状態はほぼ良好である。ほぼ東西3間・南北2間になり、E P 115～126で、長軸640cm・短軸420cmで長軸方向(東西)がN—69°—Wを計る。柱穴は掘り方がみられず、円形を示し径42～64cm・深さ25～29cmで、柱穴間は210～240cmである。柱穴の覆土は、黒褐色土で炭化粒を多量に含む微砂質土である。出土遺物はみられない。時期は、確認面および覆土の状態からみて平安時代と考えられる。

#### (3) 溝 跡

##### 7号溝跡 (第18図 図版10)

発掘区全体の南側の平坦・緩傾斜地で、B地区27～30—106～134グリッド内に位置しており、2号住居跡や113号建物跡と重複関係にある。第Ⅱ層下部から第Ⅳ層上面までかけて確認され、第Ⅳ層下部まで掘り下げられている。断面形は、27～30—120～134グリッド内ではロート状を呈し、27～30—106～118グリッド内ではV字ないしはU字形を示している。上面の幅は80～115cmで底面の幅は24～56cmで、深さは38～74cmである。

時期は、出土した土師器からみて古墳時代前期の所産と推定される。

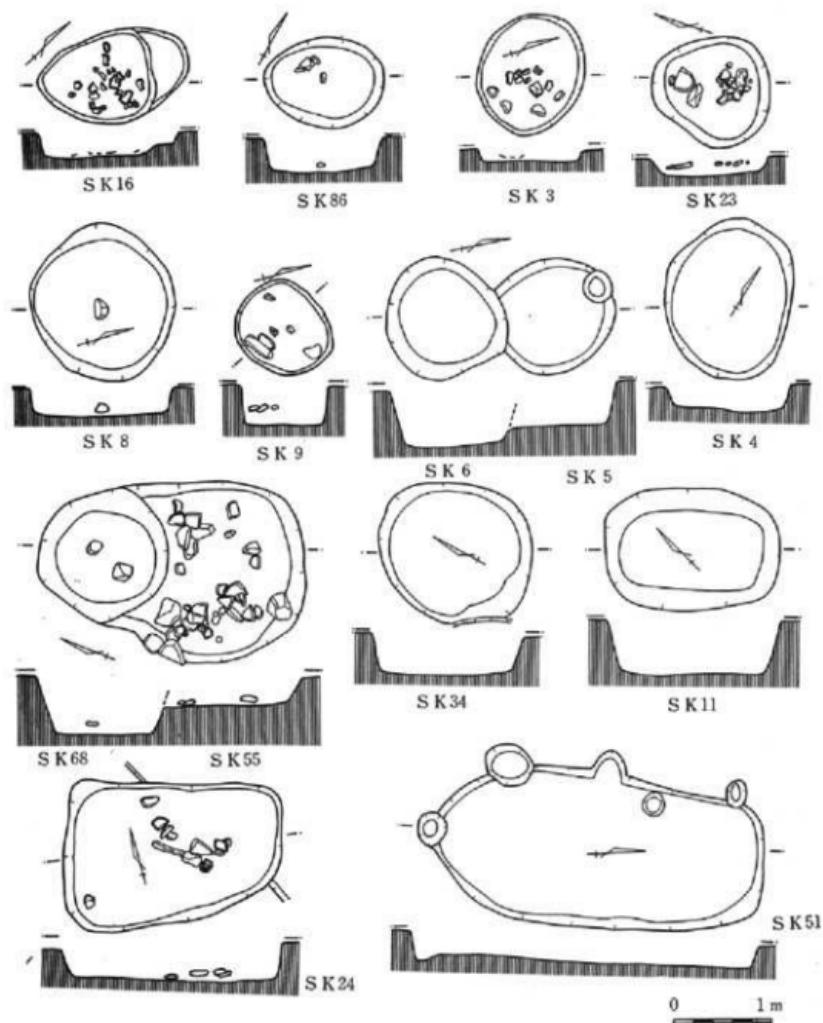
#### (4) 土 壤 (第25図 図版7～10)

3号土壤 平面形は楕円形を呈する。長径125cm・短径118cm・深さ18cmで長軸方向はN—45°—Wを計る。壁は緩やかに掘り込まれ、底面中央部が高くなっているがほぼ平坦である。時期は縄文時代晩期大洞C<sub>1</sub>式期に比定される。

4号土壤 平面形は楕円形を呈する。長径167cm・短径130cm・深さ25cmで長軸方向はN—20°—Wを計る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面西側が平坦で東側が傾斜になっている。時期は縄文時代晩期大洞C<sub>1</sub>式期に比定される。

5・6号土壤 いずれも平面形は不整円形を呈し6号土壤が新しい。SK6は径120cmで深さ54cm、壁は中位まで暖やかで下部で垂直になり、底面は平坦で南側に傾斜している。SK5は径126cm・深さ43cmで、壁はほぼ垂直になり、底面はほぼ平坦である。いずれの土壤も時期は縄文時代晩期大洞B式期になる。

8号土壤 平面形は円形を呈する。径は90～100cmで深さ26cmである。壁はほぼ垂直になり、底面もほぼ平坦であるが西側で凹凸がみられる。時期は縄文時代晩期大洞B式期である。



第25図 各 土 壺

**9号土壺** 平面形は円形を呈する。径は 100~110 cmで深さ42cmである。壁はほぼ垂直になり、底面は中央部で凹凸がみられ墻付近で平坦になっている。覆土上層からは、浅鉢形土器の一括と、自然の河原石が混合して出土している。時期は出土した土器からみて縄文時代晩期大洞C1式期に比定される。

**11号土壙** 平面形は方形を呈する。長軸 180 cm・短軸 132 cm・深さ 56cmで長軸方向が N-45°-W を計る。壁は上部で緩やかで中位から下部で垂直になり、底面もほぼ平坦である。覆土は54号住居跡と近似する。出土遺物はみられないが時期は覆土からみて平安時代後半と推定される。

**16号土壙** 平面形は不整橢円形を呈する。長径 160 cm・短径 95cm・深さ 38cmで長軸方向は N-25°-E を計る。壁はほぼ垂直になり、底面は二段になり掘り込まれるが平坦である。土器は底面近くに散在している状態である。時期は出土遺物からみて縄文時代晚期大洞C<sub>1</sub>式期に比定される。

**23号土壙** 平面形は不整円形を呈する。径 118 ~ 120 cm・深さ 16cm である。壁は緩やかになり、底面は南側から北側に傾斜している。土壙中位で偏平な礫や小礫がみられ、上面より落ち込んだように出土している。出土土器はみられない。時期は縄文時代晚期と推定される。

**24号土壙** 平面形は不整方形を呈し、21号住居跡より新しい。長軸 227 cm・短軸 192 cm・深さ 42cmで長軸方向 N-80°-E である。壁は西側で傾斜があり、東側で垂直になっている。底面は、中央から東側にかけ窪んでいるほかはほぼ平坦である。時期は、平安時代後半に比定できる。

**34号土壙** 平面形は不整円形を呈し、21号住居跡が新しい。径 164~170 cm・深さ 43 cm である。壁はほぼ垂直に掘り込んでいる。底面は壁付近から中央部へ傾斜がみられるが、ほぼ平坦である。覆土の状態・形状からみて時期は縄文時代晚期と推定される。

**51号土壙** 平面形は南側が若干円になる不整方形を呈する。長軸 360cm・短軸 146cm・深さ 23~31cmで長軸方向が N-7°-E を計る。壁はほぼ垂直になり、底面も南側から北側へ傾斜しているがほぼ平坦である。南側から西側にかけて 5 本の柱穴があり、径 28~43cm で深さは 15~32cm である。時期は出土遺物からみて平安時代後半に比定される。

**55・68号土壙** いずれも平面形は不整円形を呈している。68号土壙は径 126~130 cm・深さ 57cm である。壁はほぼ垂直になり、底面も平坦である。覆土中層から土偶の足が出土している。55号土壙は推定径 190 cm 前後で深さ 28cm になり、壁は傾斜をもって掘り込まれ、底面は平坦である。底面付近にかけて自然の礫群が散在し、中央部に向て流れ込んでいる。南西壁付近の底面で土偶の上半部 1 が出している。新旧関係は68号土壙が新しい。時期は、55号土壙が縄文晚期大洞B式期で、68号土壙もほぼ同時期である。

**86号土壙** 平面形は橢円形を呈する。長径 120 cm・短径 93cm・深さ 32cm で主軸方向は N-22°-W を計る。壁はほぼ垂直になり、底面は中央部に凹凸がみられる他は平坦である。時期は縄文時代晚期大洞C<sub>1</sub>式期に比定される。

### 3. 出土遺物

坊屋敷遺跡から出土した遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・赤焼き土器・石器など整理箱にして約57箱分がある。遺構が重複しているため、ある時期の遺構覆土からやや異った時期の遺物も出土する。土器は挿図については遺構毎に、記述については文様・器形毎の分類を行ない、石器は器種を主とした記述を行なう。

#### (1) 縄文時代

a 土 器 (第26~30図 図版63~67) 本遺跡出土の縄文土器は、15小類型に分類できる。

##### 第1類土器 (第26図17)

口縁が大波状を呈し、体部上半に刷毛目状の連続した沈線文を施す深鉢形土器。

##### 第2類土器 (第27図1・15 第28図14)

平縁で研磨された口縁帯と、太い磨消縄文を持つ土器群。深鉢・壺などの器種がある。

##### 第3類土器 (第26図1・2 第27図11・18 第29図3)

口縁に突起を有し、体部に連続した刻目手法による入組文を持つ土器群。縦方向の細い刻み目を持つものと、円形の刺突文を持つもの(第26図1)とに分けられる。第29図3は34号土塙から出土した小形の台付鉢で、口縁部に一条の刻目文帯を有する。

##### 第4類土器 (第26図23・24 第27図5・16 第28図10・16・18・21・24・27~30)

磨消縄文による入組文土器のうち三叉状陰刻が未発達で、一部張瘤小突起を有する土器群。

口縁が平縁のもの(第28図21)、波状突起を持つもの(第26図24)、口唇部に横方向の連続した刻目を持つもの(同23)などがある。第29図1はS17北側から単独出土した埋設土器(E U28)で、器形は体部中程で一旦締まり、底部がやや台状になる。口縁に2対6単位の中突起、体部上半に6単位2段の入組文を有し、体部中程に眼鏡状の張瘤文を持つ。第29図2は、65号土塙から出土した小形の台付鉢で、口縁に8個の波状突起が付くものと推定される。体部および台部の文様は磨滅が著しく不明である。

##### 第5類土器 (第26図27 第27図7・8 第28図13・15)

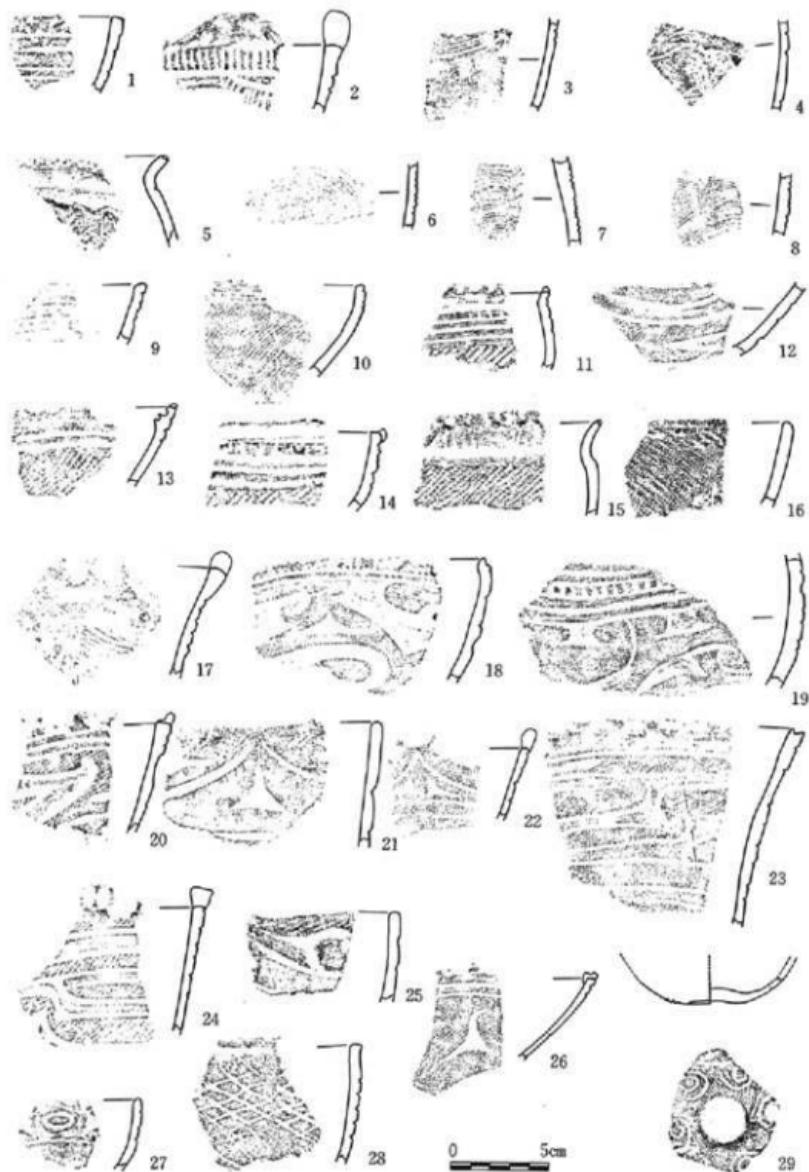
磨消縄文による入組文土器のうち玉抱き三叉文を持つ土器群。深鉢・鉢・浅鉢などの器種がある。

##### 第6類土器 (第26図21・22・25・26・29 第27図9 第28図22)

磨消縄文による入組文土器のうち、三叉状陰刻を持つ土器群。深鉢・鉢・浅鉢などの器種がある。第26図29は入組文から独立した三叉文が施される例である。

##### 第7類土器 (第27図6・10)

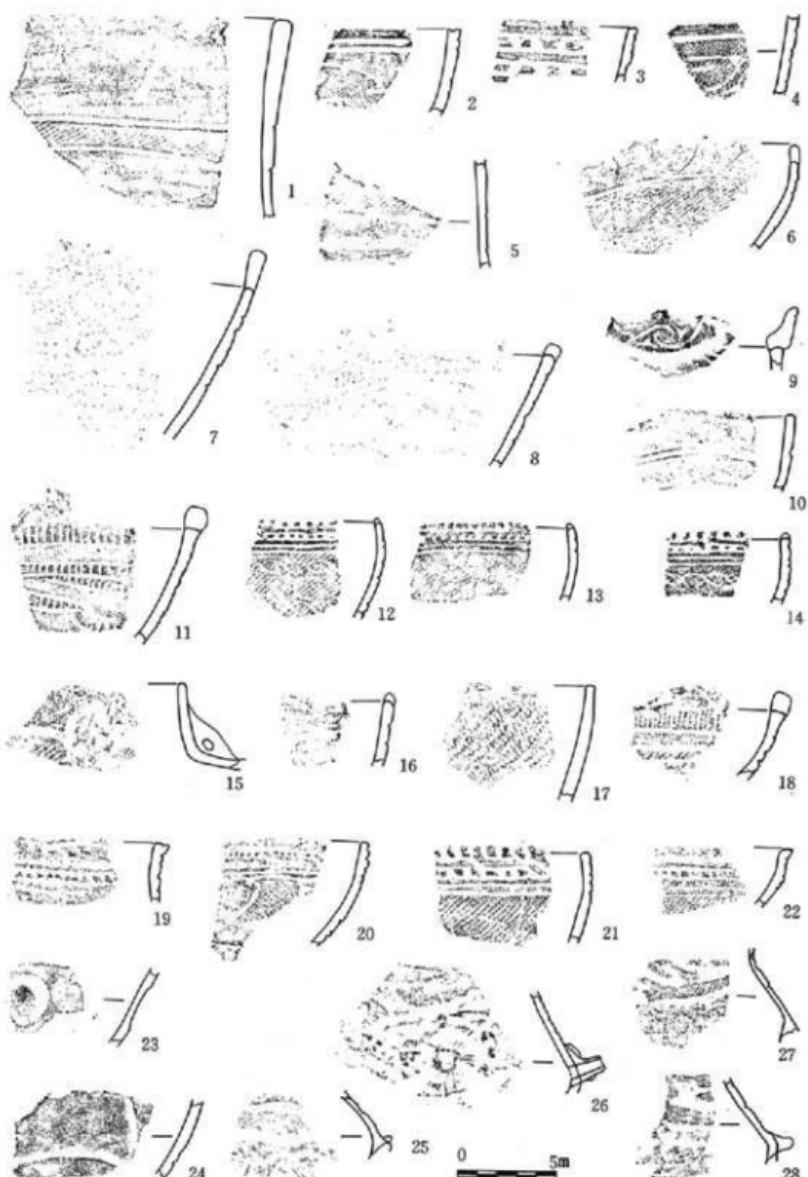
波状の口縁部に無文帯を持ち、その下全面に縄文が施されている土器群。器形は小形の鉢ないし深鉢形を呈すると思われる。



第26図 繩文・弥生土器拓影図 (1)

- 50 -

1~4 (ST 1) · 5~8 (ST 2) · 9~12
(ST 21) · 13~16 (ST 54) · 17~29 (SD 7)



第27図 縄文土器拓影図 (2)

- 51 -

[ 1・2・5 (SK17) · 3 (SK22) · 4 (SK27) · 6~10  
 (SK26) · 11~14 (SK34) · 15 (SK50) · 16 (SK64)  
 · 17 (SK81) · 18 (SK83) · 19 (SK86) · 20~28  
 (SK95) ]

**第8類土器** (第26図9・10 第27図3・12~14・20・21 第28図17)

三叉文の浮彫的手法が発達した羊齒状文を持つ土器群。浅鉢・鉢・台付鉢・壺など器種の多様性が目立つ。

**第9類土器** (第26図18・19 第27図23・24 第30図1)

口頸部に羊齒状文が変化した殊子文、体部に大腿骨文やX字状文などの磨消繩文が施される土器群。浅鉢・鉢・壺・注口土器などの器種がある。第30図1は52号土壙から出土した注口土器で、口縁部が直立し頸部に磨消手法を伴う殊子文が施されている。

**第10類土器** (第26図11・13・14 第27図19・22 第30図2)

口唇部の波状の小二連突起、口頸部に3~5条の平行沈線と連続し刺突文を伴う土器群。第30図2は9号土壙から出土した浅鉢形土器で、口縁部に平行沈線と連続刺突文、体部に細い斜繩文が施されている。本類の器種にはこのほか、鉢・台付鉢などがある。

**第11類土器** (第26図12・20 第27図2・4・25~28 第28図1・5・9)

口縁部から体部全面にかけて発展した大腿骨文や雲形文などの磨消繩文が施される土器群、皿・浅鉢・鉢・注口土器などの器種がある。

**第12類土器** (第26図15 第28図2・6・12・19・31)

口唇部に範状工具の押圧による小波状突起、口頸部に平行沈線が施される土器群。体部は全面に斜繩文ないし範磨きが施され、鉢・深鉢・壺などの器種がある。

**第13類土器** (第26図3・4)

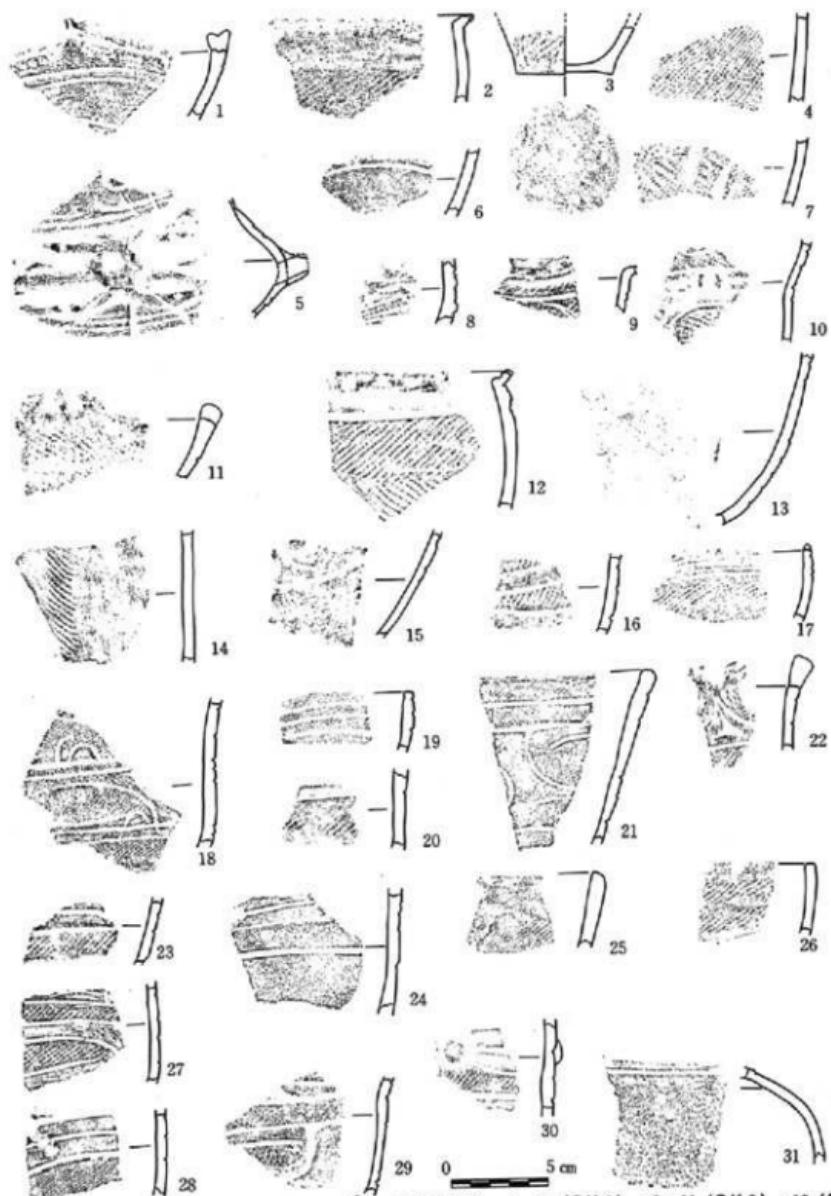
器面全体に流水的な刷毛目状の沈線が施される土器群。器形は深鉢が主である。

**第14類土器** (第26図28)

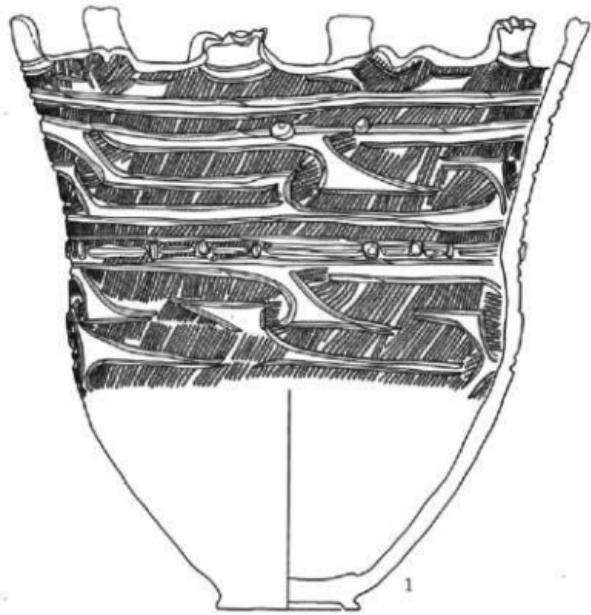
器面全体に網目状の撚糸文が施される土器群。器形は平縁の深鉢形土器である。

**第15類土器** (第26図16 第28図3・4・7・25・26)

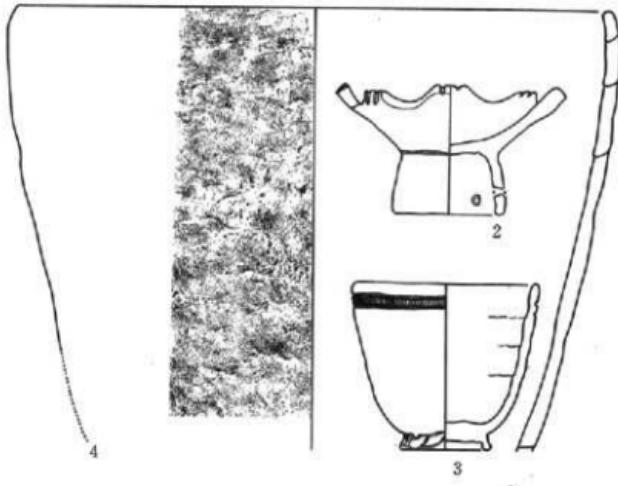
器面全体に繩文が施される土器群。体部から口縁部にかけて直線的に立上る深鉢が多い。以上15類の土器群は、時期的に繩文時代後期後半から晩期中葉に属するものであり、とくに後期末葉から晩期前葉にかけての資料が豊富である。繩文時代の後期と晩期との境界をどこに画するかは、山内清男氏の先駆的な業績から30年経た今日でも大きな課題である。土器を様式として把握した場合は、コブ付土器様式から亀ヶ岡土器様式へとして理解されるが、坊屋敷遺跡で第4類土器とした幅の狭い入組文の扱い方にはなお疑問が残る。ここでは器形や文様描出手法などから第1~3類土器を繩文時代後期、第4類土器以降を晩期として把握する。型的には、4・5類が大洞B<sub>1</sub>式、6・7類が大洞B<sub>2</sub>式、8・9類が大洞B-C式、10・11類が大洞C<sub>1</sub>式、12類が大洞C<sub>2</sub>式となる。13~15類は粗製土器の仲間で各型式との併行関係を求めるることは困難である。



第28図 縄文土器拓影図 (3) [ 1~2 (SK3) · 3~8 (SK6) · 9~11 (SK9) · 12 (SK12) · 13~16 (SK14) · 17~20 (SK15) · 21~31 (SK16) ]

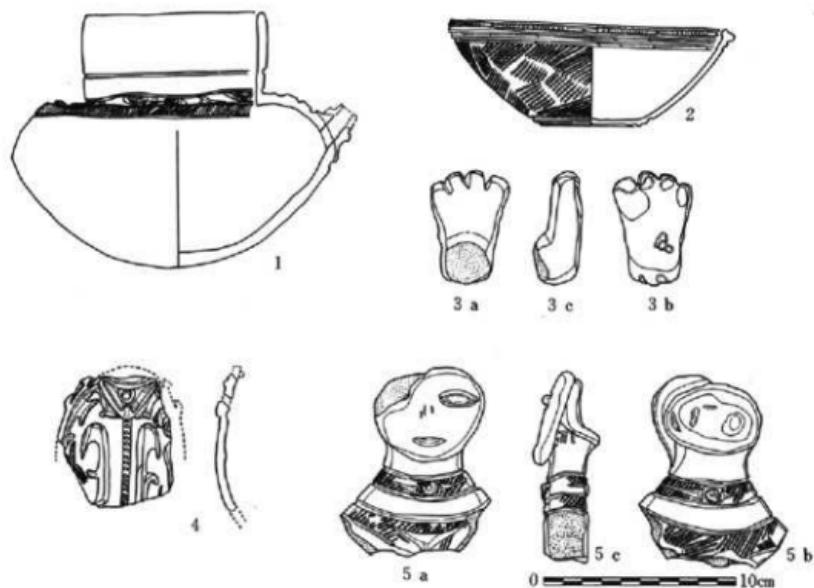


1



0 10m

第29図 土器実測図（1）



第30図 土器・土製品実測図（2）

**b 土 製 品** （第30図 3～5 図版67）

土製品として土偶、甲羅形の土製品などがある。

第30図4は、7号満覆土から出土した甲羅形の土製品である。下面が欠損しているが形状はほぼ椭円形を呈するものと思われる。中央の刻目文帯を軸に雲形文が左右対象に描かれ上部に穿孔を有する。瓢状土製品と呼ばれるものにも類似する。時期は大洞C<sub>1</sub>式期である。

第30図5は55号土壤床面から出土した土偶の上半部である。首から胸にかけて磨消縄文を伴う玉抱き三叉文ないし三叉文が表裏に施される。時期は縄文時代晩期大洞B式期である。このほか68号土壤覆土より土偶の足首部も1点出土している（3）。

### ○ 石 器 (第31~32図 図版20)

本遺跡から出土した石器は総数746点である。このうち約4割にあたる313点は包含層からの検出である。約6割にあたる433点は、縄文時代の遺構から、そしてまた相当数の遺物が、古墳・平安時代の遺構の覆土から、土師器等に混じって検出された。石器は打製石器・磨製石器・礫石器・石製装飾品に大別される。打製石器には石鎌・石錐・石匙・打製石斧・箆状石器・スクレーパー・剝片・石核等があり、磨製石器には磨製石斧・石刀・石棒が、礫石器には凹石・磨石がある。

### 石 鎌 (第31図1)

1に示した無茎の石鎌1点のみの出土である。

### 石 锥 (第31図2~4)

7点出土しており、石材は頁岩4、玉髓質2、鉄石英1となっている。つまみのあるI類と棒状のII類に大別でき、I類はつまみ部分が尖頭部より長いIa類と、短かいIb類、II類は両端に尖頭部をもつIIa類と、一方に尖頭部をもつIIbに細分できる。Ia類1点、Ib類2点、IIa類2点、IIb類1点、他に尖頭部資料が1点(4)がある。2はIIa類、3はIIb類に属する。

### 石 匙 (第31図5~9)

14点出土し、石材はすべて頁岩である。通常、縦形I類、横形II類、刃部が円弧を描くIII類に大別されるが本遺跡ではI類の出土はない。また、それぞれが両面加工のa類と片面加工のb類、半片面加工のc類に細分できる。内訳はIIb類が6点(うち2点は未完成)、IIIb類が4点、IIIC類が2点、III類の未完成品が2点となっている。9がIIb類、5・6がIIIb、7・8がIIIC類に属する。7にはタール状物質が付着している。

### 打製石斧 (第31図10)

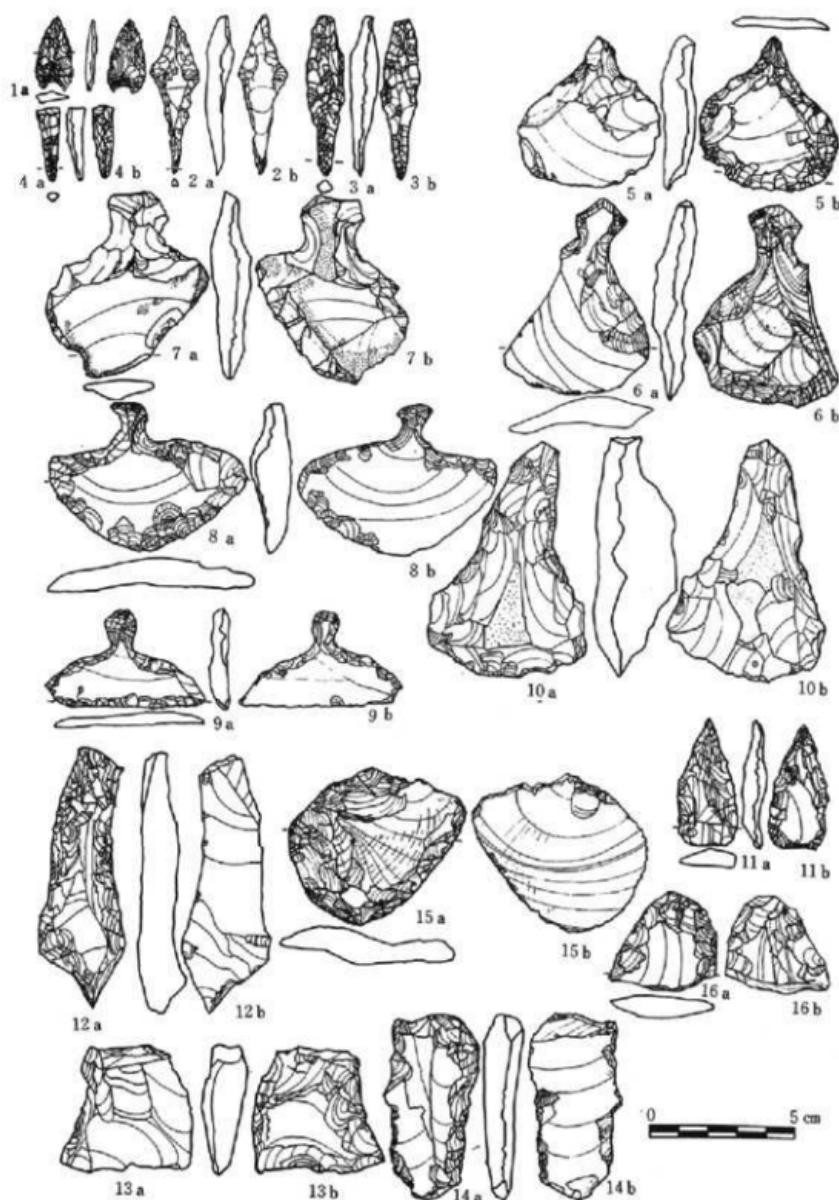
4点出土し、石材はすべて頁岩である。撥形のI類と短柵形のII類に大別でき、さらに、先端部加工のあるa類と加工のないb類に細分できるが、本遺跡出土のものはIa類3点とII類の基部資料1点で、10はIa類に属する。

### 箆状石器 (第31図11)

2点の出土をみ、石材は頁岩と玉髓質である。いずれも両面加工で長い二等辺三角形を呈し、長さは4cm前後である。先端部分のフルーティング加工は両者ともない。

### スクレーパー (第31図12~15)

主として片面に連続する二次加工が施される石器で18点出土している。石材は頁岩の他玉髓質がある。これらは加工部位によって次のように分類できる。剝片の末端に加工のあるI類、側縁にあるII類、側縁と末端にあるIII類。またII類は両側縁にあるa類、一侧縁



第31図 出土石器（1）

にある b 類、また III 類は角形になる a 類、円弧状になる b 類、先端の尖がる c 類にそれぞれ細分できる。I 類 1 点、II a 類 4 点 (12・14)、II b 類 10 点、III a 類 1 点 (13)、III b 類 1 点 (15)、III c 類 1 点である。

その他の打製石器としてノッチ 7 点、打製石斧や籠状石器の未成品やその一部と考えられる両面加工品が 18 点 (16)、加工痕ある剝片 62 点、剝片 509 点、石核 44 点が出土している。

#### 磨製石斧 (第32図1~8)

8 点出土している。3 が完形の他はすべて折損しており、基部資料 5 点、刃部資料 1 点、中間部資料 1 点である。基部の平面形から尖る I 類、幅をもつ II 類、刃部の平面形から角刃の a 類、丸刃の b 類に分けられる。3 は II a 類、8 は恐らく II a 類に属すると思われる。1・2・5・6 は I 類、4・7 は II 類である。また、3・4 は、擦り手によるものである。

#### 石 刀 (第32図9・10)

3 点出土している。いずれもスレート製で、刀身部資料である。9 は刀身の中央部で、横断面形は扁平な橢円形で、刃部と峯を特定することはできない。10 は切先を含む資料であるが、節理面に沿って剥落している。9 と同様刃部と峯の区別は明りようではない。他に剥落した資料が 1 点あるが、それぞれ別個体である。

#### 石 棍 (第32図11・12)

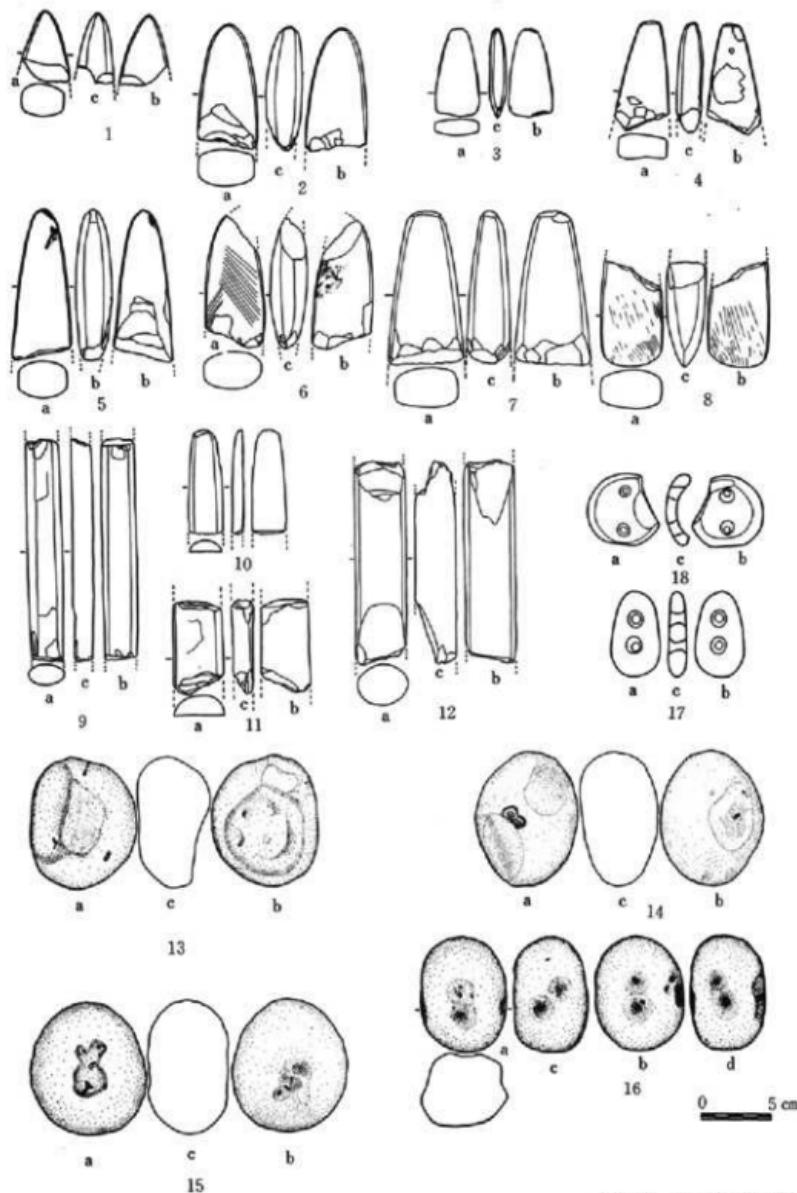
2 点出土し、いずれもスレート製の中間部資料である。横断面形が石刀にくらべ円に近く、大型である。

#### 凹 石 (第32図13~16)・磨石・石皿

円礫の片面、あるいは両面、場合によっては両側面にも人工的な凹みをもつ石器で 23 点出土した。石材は花崗岩・安山岩・凝灰岩等の多孔質のものである。凹みだけの I 類と、凹みと研磨痕をもつ II 類に分けられ、それぞれの面の凹みの数によって I-1・1 類 (両面に研磨痕をもつ)、II-2・2 類 (両面に 2 個の凹みと研磨痕をもつ) ……に細分できる。内訳は I-1・0 類 3 点、I-1・1 類 4 点、I-2・0 類 3 点、I-2・1 類 3 点 (15)、I-2・2 類 6 点、II-1・0 類 2 点 (14)、II-2・0 類 1 点 (13)、II-2・2・2 類 1 点 (16) である。礫に研磨痕がある磨石は 22 点、それに石皿の破片が 1 点出土している。

#### 石製装飾品 (第32図17・18、縮尺は 1/2)

いずれも泥岩製で、17 は研磨による整形の後、表裏から穿孔している。18 は b 面の内部を抉り取った後、主に b 面側から穿孔している。



第32図 出土石器 (2)

### (2) 弥生時代 (第26図5~8 図版64)

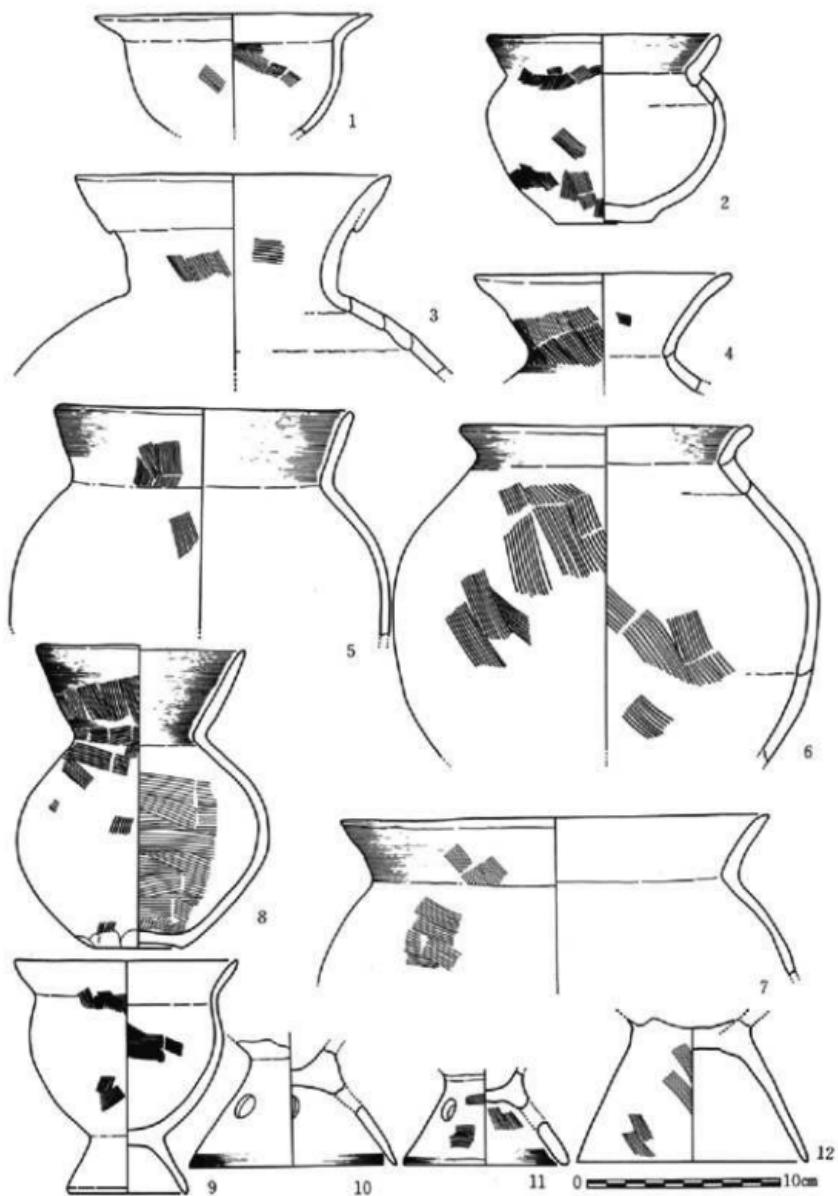
2号住居跡の覆土Ⅱ層および床面から弥生土器が7片出土している。器種として壺・甕などがある。第26図5は甕の口縁部で、口唇部に押圧繩文、頸部から体部にかけて結節回転による綾絹文が施されている。6~8は壺の体部上半片で、半截竹管状工具による2本1組の連弧文および渦巻文が施されている。このほか口縁部が「く」字状に外反し、体部上半に半截竹管文による連弧文を有する鉢形土器が1片出土している。各土器片とも時期は弥生時代中期末葉、東北地方南半の土器型式では広義の「桜井式」に対比される。

### (3) 古墳時代 (第33図 図版65)

古墳時代の土器は、2・21・70・87号住居跡、7号大溝の覆土および床面から出土している。すべて古墳時代前期にあたる古式土師器の仲間である。これらの遺構のうち70号住居跡の中央部から南側にかけて15~17個体の土師器が投棄された状態で検出されているのでこの一括土器を中心に述べる(第33図1~12)。

土器は二次焼成を受けているため遺存状況が悪く、刷毛目やミガキなどの調整技法はごく一部にしか確認できなかった。土師器の器種には、壺・高壺・器台・壙・壺・鉢・甕などがある。壺は、口縁部が強く外反し、体部が丸味を持つもので、内外面の頸部から体部上半にかけて細い刷毛目調整の痕跡が認められる(1)。後述する台付の鉢と似た器形であり底部附近が欠損しているが、体部下半の傾きなどから壺として分類しておく。高壺と器台は台部しか発見されておらず区分が不明確である(10・11)。台の裾部がやや長く延び、2~3個の小孔を有する。11の台部内外面に刷毛目調整の痕がみられる。壙は口縁部が外反し体部が球形を呈するもので、内外面に深い刷毛目調整が認められる(8)。壺は小形のもの(2)と大形のもの(3~7)に分けられるが、大形の壺も口縁部の形態に著しい多様性を有する。3は折り返し口縁を持つもの。4は口縁部が強く屈折するもの。5と7は口縁部が「く」字状に外反するもの、6は口縁が短く外反するものである。いずれも頸部から体部にかけて刷毛目調整が認められる。台付鉢は、口縁部がやや外反する壺様の鉢に短い台部が付くもので、内外面に細い刷毛目を有する(9)。その他台付甕の台部と思われるものも2点出土している(12)。

これら70号住居跡の一括土器は、時期的に古墳時代前期、東北地方南半でいう「塙釜式」の範疇に入るものと推定されるが、壺形土器の大半が単純口縁を呈すること、器台ないし高壺の脚部の発達が弱く小孔の位置も不規則なことなどから、「塙釜式」の中でも比較的新しい時期に属するものと思われる。2号住居跡および87号住居跡から出土した土師器も小片が多いが、ほぼ70号住居跡出土の土師器と同様の時期と推定される。



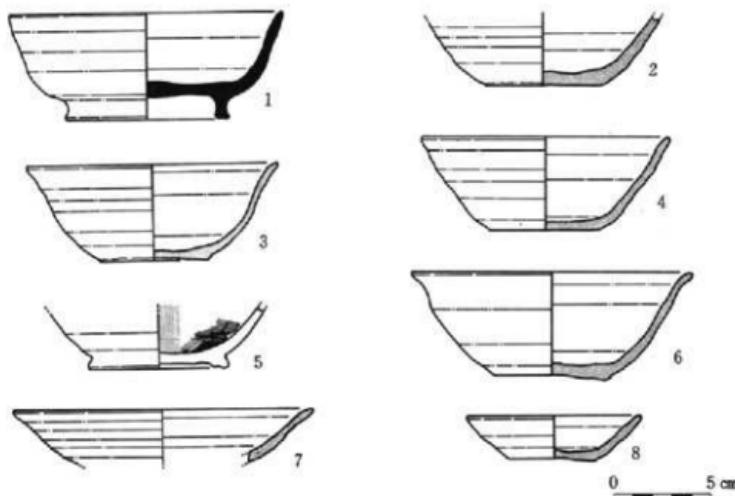
第33図 土器実測図 (3)

(4) 奈良・平安時代 (第34図・図版65)

奈良・平安時代の遺物は、1・54号住居跡、25・113・114号建物跡、E P 14・17・E P 18・24・51号土壙などから出土している。遺物は大きく土師器・須恵器・赤焼き土器などの土器類と、砥石などの石器類に分けられるが、縄文時代や古墳時代に比べ出土量が少ない。

第34図1は1号住居跡床面出土の須恵器高台付环である。底部の切り離しはヘラ切り手法によるもので、器高に比べ底径が比較的大きい。このほか床面付近から土師器甕・須恵器甕・甕・壺などの小片が出土している。時期的には8世紀後半、奈良時代末葉頃に比定できる。2は549号住居跡2層出土の赤焼き土器环である。本住居跡の床面および覆土からは、内面が黒色化処理されている土師器环や、須恵器环・高台付环・壺なども出土しているが、主体を占めるのは赤焼き土器环や第34図8のような赤焼き土器皿および甕であり、住居跡の時期は平安時代後半、11世紀前半頃に比定できる。54b号住居跡もほぼ54a号住居跡と接する時期と思われる。なお1号住居跡のカマド内から砥石が1点出土している。

3・4・6は17号土壙II層出土の赤焼き土器环である。色調が赤褐色ないし灰褐色を呈し、底部の切り離しはすべて糸切り手法による。5は17号土壙II層出土の土師器高台付环で、内面がヘラミガキのうち黒色化処理が施されている。7・8は24号土壙II層出土の赤焼き土器环および皿である。本土壙からはこのほか須恵器甕の細片と砥石も出土している。17・24号土壙出土の土器群の時期は、平安時代後半、11世紀頃に比定できる。



第34図 土器実測図 (4) [1 (ST1) · 2 (ST54) · 3~6 (SK17) · 7 · 8 (SK24)]

#### 4 まとめ

今回の発掘調査によって坊屋敷遺跡からは、竪穴住居跡7・建物3・土壙34・溝2・ピット（古墳時代から平安時代の時期）・不明ピット78である。遺構群の密集する地区は、遺跡の中央部から東側にかけての、平坦地からやや傾斜する地点にある。地形は、南西側から北東方向に傾斜し、遺跡の南側には須川へ流入する小河川が東流しており、柏倉地区的遺跡群の中では、立地する環境が最もよいといえる。検出した遺構および出土遺物から、縄文時代後・晩期、弥生時代中期、古墳時代前期、奈良・平安時代の複合した遺跡である。

##### （1）縄文時代について

遺構は土壙のみ検出され、住居跡などは確認されなかった。土壙の分布状況は、A・B地区に広範に分布しているが、A地区では西側と南側の中央部と東側に在り、B地区では西側と中央部付近に位置し、いずれも偏在している。

形状は、大半が円形を呈するが、16・86号土壙にみられるように梢円形を呈している。規模は、径100~190cmで深さ20~55cm前後で、ほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は、上層で黒褐色土を呈し、中層で暗褐色・褐色土に砂礫や褐色土ブロックが混じり、下層で黒褐色土になっている。土層の堆積状態は、上層から中層までは水平あるいはレンズ状に堆積しているが、下層では不規則的に堆積している。23・55号土壙にみられるように、中層から下層付近に、15~45cm前後の自然の礫や偏平な河原石が土壙中央に流れ込むように、検出され、自然に流れ込んだ状態ではなく、中層が埋没する以前に人為的に置いたと考えられる。3号土壙や16号土壙に一括土器がみられ、E U28では粗製深鉢形土器が正位に出土し、135号土壙付近でも埋設土器群がみられる。

土壙群の性格は、覆土の状態や検出した礫の状態からみて、土壙墓と考えられ、いずれの地区でも規則的な配置はみられず、2~3型式にわたっているが、土壙墓群としてある程度のまとまりを示している。時期は縄文時代晩期大洞B式期から大洞C<sub>1</sub>式期が主要な時期となっている。

遺物の出土状況は、その大半が7号溝跡の覆土中から出土したものが多い。土器は大別して、第1類・第2類・第3類土器群は縄文時代後期で、第4類土器から第15類土器群までは縄文時代晩期である。第1類土器は宮戸Ia式、第2類土器は宮戸IIa式、第3類土器は宮戸IIIb式にそれぞれ比定できる。

石器は、土器と同様に土壙内出土より、その大半が7号溝跡および包含層からの出土である。石鎌1・石錐7・石匙14・箇状石器2・打製石斧4・スクレイバー18・二次加工のある剥片62・剥片62・石核1・磨製石斧8・凹石23・磨石22・石棒4など総数746点が

出土している。

### (2) 弥生時代について

遺構は検出されず、變形および壺形土器の破片7点が出土している。綾絡文や連弧文が施され、弥生時代中期末葉の桜井式に比定される。

### (3) 古墳時代から平安時代について

この時期の遺構の分布は、遺跡の全体にわたって住居跡や建物跡が構築されているが、それぞれの時期では違いがみられ、大きく3期に分けてみると遺構群の変遷が次のようになる。

#### 第1期（古墳時代前期）

住居跡は2・21・70・87号住居跡で不整の方形ないし隅丸を呈し、炉跡は地床炉である。70号住居跡は焼失しており、柱穴が1本のみである。2号住居跡は住居跡群の中で構築の状態がよい。住居跡の配置は、21・99号住居跡が隣接し、70号住居跡が北側に離れて位置し、全体に広範囲に分布し、住居跡間の空間が広くとられているのが特徴である。長軸方向が、N-40°-60°-Wを計る。

溝跡は、集落の南側から東側にかけてめぐると考えられるが、性格は不明である。

#### 第2期（奈良時代末葉）

1号住居跡のみである。発掘区の北東側の区域（A地区）に位置しており、不整方形を呈しており、住居跡の北東隅にカマドを有している。柱穴が4本で、南側壁付近の中央部の床面が堅く踏みしめられており、出入口が南側と考えられる。カマドは全体的に崩れているが、粘土や角柱礫を使用しており、構造的にしっかりしている。

#### 第3期（平安時代後半）

54a・b号住居跡と11・17・24・51号土壙である。住居跡はA地区の中央部に位置し、土壙はA・B地区にみられる。住居跡はいずれも近接した時期で、正方形あるいは不整の方形を呈し、向きが異なっている。54a号住居跡のカマドは北東隅に位置し、主軸は東西方向で、河原石や角柱礫を基礎として粘土や砂礫で上部を構築している。54b号住居跡のカマドは、住居跡の北側に在り、煙道が長く突き出ている。

土壙は、方形あるいは楕円形を呈し、長軸が110-360cm・短軸が90-146cmであり、24・51号土壙は大形で、51号土壙に柱穴などの施設がみられる。性格については不明である。

このように古墳時代から平安時代にかけて、大之越古墳や菅沢古墳との関連や律令制下における周辺地域の条里制との関係が今後の課題である。

# VI 窪 遺跡

## 1. 遺跡の概要

本遺跡は、富神川の右岸の段丘中位に位置し、標高 169~171 m を計り、南西側 150 m の地区に十二月田 A 遺跡が隣接している。遺跡の西端部が高く、北東側および北側へ傾斜し、1.5~2 m の比高差がみられる。現状は、水田・畑地・宅地となっており、今回の発掘調査は、水田の区域である（第35図 図版11）。

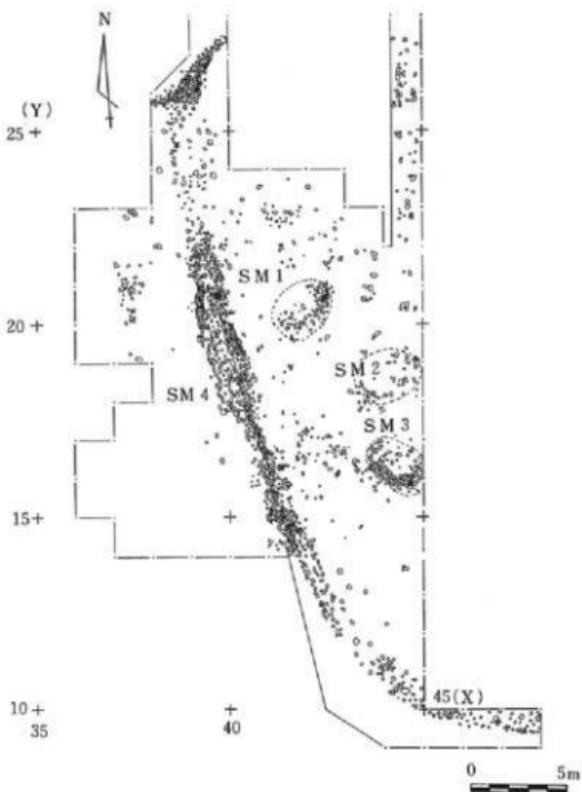
遺跡の層序は、大きく分けて5層になり、第Ⅰ層暗褐色土（耕作土で旧水田がみられ、20~25cm）、第Ⅱ層暗茶褐色土（12~18cm）で若干の炭化粒子を含む、第Ⅲ層黒褐色土（20~30cm）微砂質で炭化粒子を含む、第Ⅳ層黒色土（15~25cm）粘質土、第Ⅴ層暗黄褐色土で砂礫が混じる。遺物包含層は、第Ⅱ層下部から第Ⅲ層中にかけてである。発掘区の中央部から西側にかけての区域は、地表面から15~25cmで第Ⅴ層の上面にたっし、遺物包含層は認められない。

検出した遺構は、発掘区の東側37~48-9~28グリッド内に位置する環状列石（SM 4）と、それに付随する集石遺構（SM 1~3）で、X軸36ラインより西側の区域では、遺構が認められない。遺物の出土状況も同様である。

集石遺構は、SM 1 では41·42-19·20グリッドにあり、径3.50×3.30m の楕円形を示すように、礫が東側から南西側に集中し、中央部には礫が認められない。SM 2 は、41·42-18·19グリッド内にあり、径3.50×3.10m の楕円形になり、礫が北東・南西側にみられる。SM 3 は、43·44-15·16グリッド内にあり、径4.50×2.20m で、SM 1·2 とは長軸方向が逆で、礫は北東側でみられないが、15~35cmの礫が規則的に二重にめ



第35図 窪遺跡全体図



第36図 遺構配置図

ぐっており、中央部が径  $1.5 \times 1$  m・深さ 8~12cm掘り込まれている。なおいずれの集石遺構も礫の下部には、掘り方などは確認されない（第36図 図版11）。

環状列石（SM 1）は、北側と38・39—23・24グリッド内と南側の地区では水田耕作のため、一部破壊を受けたり、礫が抜き取られている。列石は全体に、多角形を描くように弧状を呈し、礫群は不規則に配列されている。39・40—14~20グリッド内で列の幅が最大となり、石皿の完形品4や45~60cmのやや大形の自然の河原石を配しており、それらは北側南側ではあまりみられない。列石の規模は、幅 0.8~1.5 mで半径20~24mと推定され、東側は未調査のため不明である。なお、環状列石の外側（西側）では37~19~21グリッドで礫が若干散布するほかはみられない。列石は第Ⅱ層下面から第Ⅲ層下層にかけて在る。

## 2. 出土遺物

窪造跡から出土した遺物には、縄文土器・土製品・石器・土師器・須恵器・赤焼き土器・中世陶器など整理箱にして約16箱分がある。このうち平安時代以降の土師器・中世陶器などは全体点数で30点と少なく、出土層位も後世の擾乱層によるものが主なので記述を割愛する。縄文土器や石器は、環状列石および配石構造が検出された36~44-5~15Gから主に出土する。出土層位はⅡ層とⅢ層であるが、Ⅲ層のものが大半である。

(a) 縄文土器 (第37・38図 図版68・69) 本遺跡出土の縄文土器は、9類に大別できる。

### 第1類土器 (第37図1~11)

厚手で渦巻文や磨消縄文などを持つ土器群で、さらに二つに細分できる。1a類は粘土隆帯による渦巻文を持つもの(1・2・5・6・8・9)と、沈線による磨消縄文を持つもの(9)、刺突文による楕円文を持つもの(3)などがある。1b類は粘土隆帯による渦巻文が退化するもの(4・10)、撚糸文の地文と魚鱗状の隆帯を持つもの(11)がある。

### 第2類土器 (第37図12・13・15・17・19・20 第38図1~4)

撚糸文の地文の上に、獨得の曲線的な沈線文を持つ土器群である。渦巻状の沈線文を描くa類(13・17・19)、渦巻文と斜方向の平行沈線が組み合さるb類(20・第38図1~4)がある。14は口縁部に縱方向の撚糸文、12は肥厚した口縁部の表面に撚糸文、裏面に格子状の沈線文を有するものであるが便宜上本群に含めておく。大清水遺跡第1類土器と共に通する。

### 第3類土器 (第38図20~31・37・38)

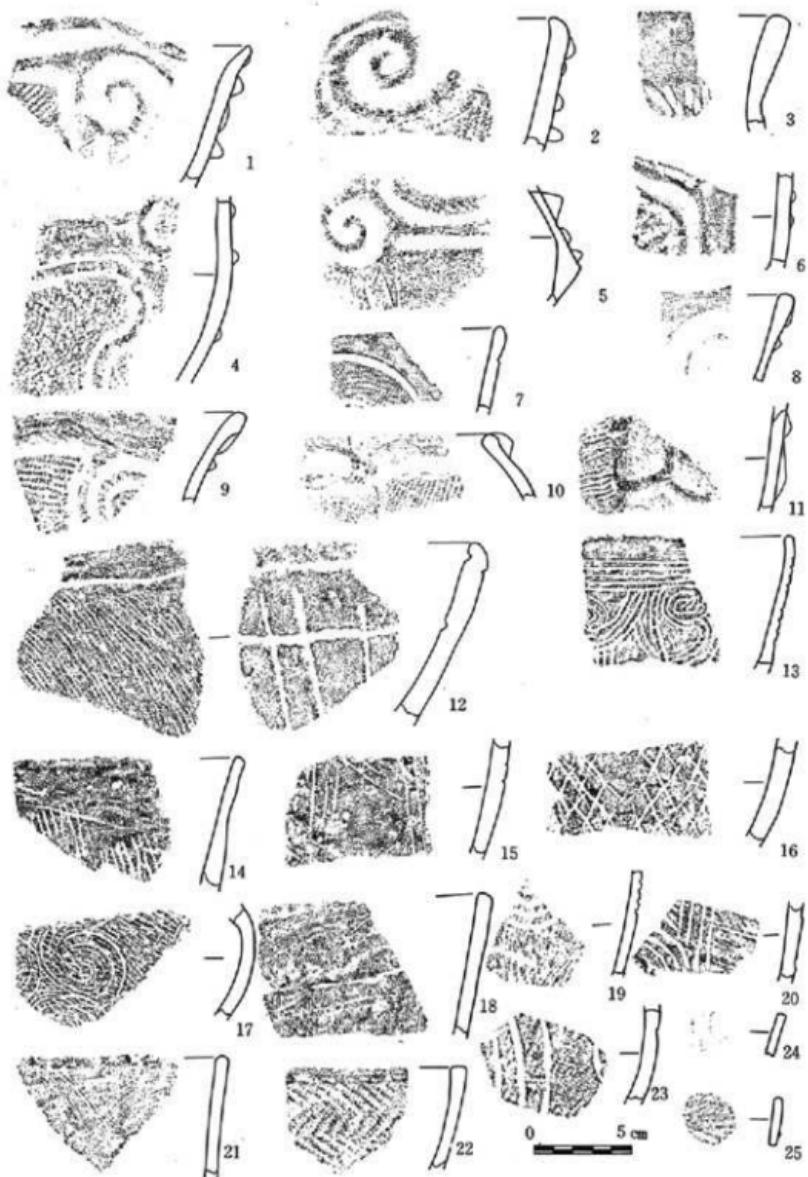
太い2~3条の沈線によってできる磨消手法の紐線文を中心とする土器群である。ゆるやかに波を打つ大波状口縁がやや外反する表に近い深鉢の口縁部から体部に紐線文(20・22)や同心円状の垂飾文(21)および曲線的な磨消縄文を施しているものなどがある。37・38も文様描出としては22と同じものであろう。大清水遺跡第2類土器と共に通する。

### 第4類土器 (第38図19・33~35)

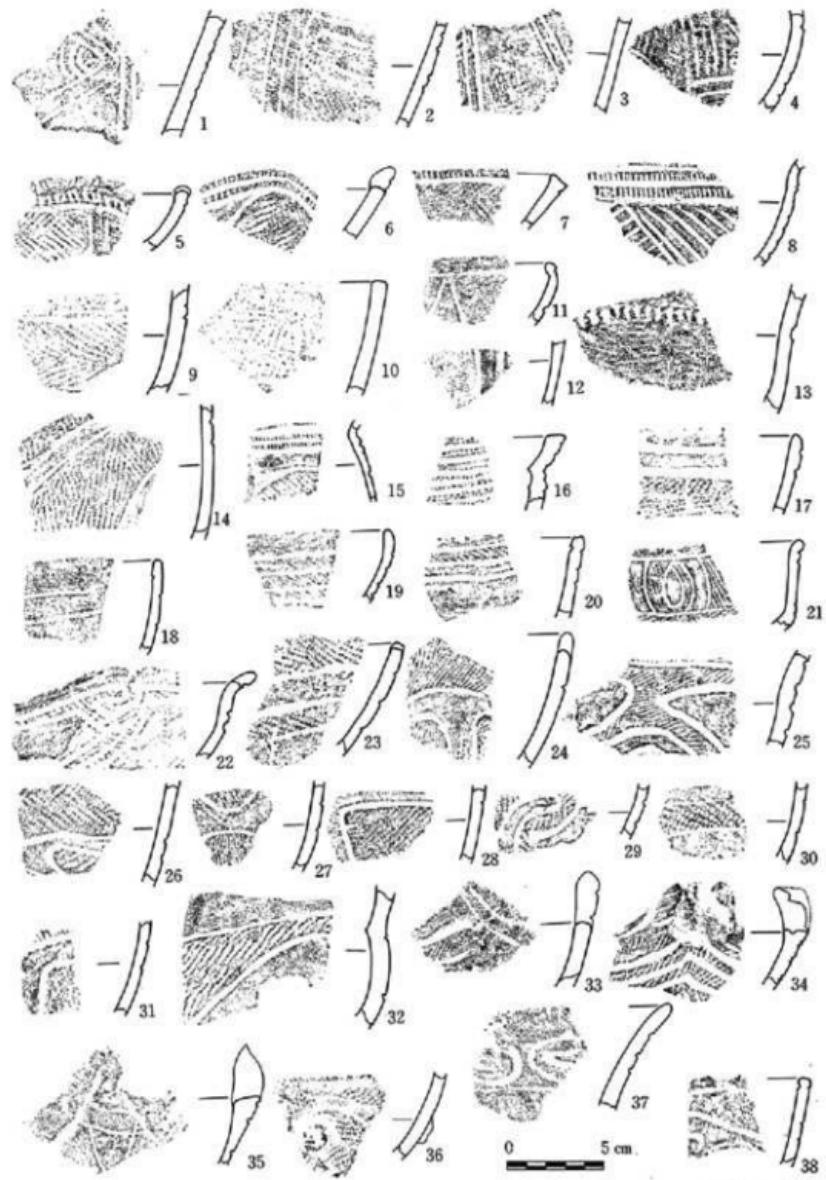
いわゆるS字状沈線文を有する土器群の仲間であるが、本遺跡出土の土器には明確なS字状沈線文がなく、大清水遺跡第3類土器と比較の上で本類を一括する。口縁が内側に肥厚しゆるやかな大波状突起を持つ深鉢(33~35)や平縁で口縁部から体部にかけて数条の平行な磨消縄文帶を持つもの(19)などがある。口縁下の文様の交叉部に円形の刺突文を有するもの(34・35)もみられる。

### 第5類土器 (第38図5~16・32)

羽状縄文を有する土器を主とする一群である。器形は口縁が内側に肥厚し、大波状口縁が花弁のように開く鉢形土器が多い。口縁部端にしばしば1~2条の連続した刻目文帶が



第37図 繩文土器拓影図 (1)



第38図 純文土器拓影図（2）

施される（5～7・10）。このほか羽状縄文の代りに羽状の平行沈線が施されるもの（8・9）、幅の広い横方向の磨消縄文が施されるもの（32）などがある。大形の鉢以外の器種として小形の鉢（11）や壺（15）などもある。大清水遺跡第6類土器と共通するものであるが、内容的には本遺跡のものがやまとまっている。

#### 第6類土器（第38図36）

いわゆる弧線連絡文を有する土器を中心とする土器群である。弧線と弧線の連結部にボタン状の張瘤を貼付するものも多い。

#### 第7類土器（第37図18・21）

平縁で曲線的な細い刷毛目文を持つ土器群である。大清水遺跡第8類土器と共通する。

#### 第8類土器（第37図16）

網目状撚糸文を有する粗製の深鉢形土器を一括して本類とする。器形は平縁で、口縁部端がやや肥厚する深鉢である。

#### 第9類土器（第37図22）

縄文を有する粗製の深鉢形土器を一括して本類とする。器形は第9群土器とほぼ同様である。縄文には羽状縄文（22）と斜縄文の二種があるが、概して文様が大粒である。

以上9類に分けた土器群は、時期的には縄文時代中期末葉から後期中葉に属するものであり、とくに後期前葉から中葉にかけての資料がやまとまっている。型式的には第1a類土器が大木9式、1b類が大木10式に比定される。第2類土器は東北地方南半でいう宮戸I b式、関東の堀之内I式、第3類土器は東北地方北半の十腰内I式に比較的まとった資料があり、関東の堀之内II式に対比できる。第4類土器は東北地方南半の宮戸II a式、関東の加曾利B I式、第5類土器は東北地方南半の宝ヶ峰式ないし宮戸II b式、関東の加曾利B II式にほぼ対比できるが、なお地域の独自性を示す資料も多い。第6類土器は東北地方南半で宮戸III a式とされるものにあたるが、むしろ関東の安行I式に類似性が強い。第7～9類土器は粗製土器の一種で明確な時期を比定することは困難であり、上述の第2～5類土器に併行するものとゆるく考えておきたい。

窪遺跡の環状列石や配石遺構の時期はこのいずれかに相当する訳であるが、層位的には環状列石の検出されたIII層中に各類土器が混在するというのが事実である。いわゆる層位学の立場からは新旧二つの遺物が同条件で混在する場合、新しい時期のものを優先させるのが原則であり、環状列石等の時期は第6類土器が極めて少ないことも考慮に入れて、第4～5類土器の時期、即ち縄文時代後期中葉宮戸II a・II b式ないし関東でいう加曾利B I・II式期頃と推定される。

#### (b) 土 製 品（第37図24・25 図版69）

縄文時代中期末葉の土器を2次加工した円盤状土製品と呼ばれるものが4点みられる。

(b) 出土石器 (第39~41図 図版22)

本遺跡から出土した石器は総数534点で、すべて包含層から検出された。以下、大清水、坊屋敷の分類基準に従って記述する。

石 鐵 (第39図1~4)

4点出土し、石材は鉄石英(1・2)、頁岩(3)、玉髓質(4)である。1はⅠ類の有茎錐で両側縁は鋸歯縁状に整形されている。2・3はⅡ類に属する無茎錐で、2はa面左と、右下端に熱作用によるハジケが認められ、3は粗雑なつくりで先端を欠いている。4は基部を欠くが恐らくⅡ類に属するものと思われる。

石 錐 (第39図5~8)

4点出土し、石材はすべて頁岩である。大清水・坊屋敷ではつまみのあるⅠ類と棒状のⅡ類に大別したが、本遺跡ではⅡ類ではなく、柳葉形で断面が台形のⅢ類がある。5・7はⅠa類に属し、いずれも尖頭部先端が折損している。8はⅠb類で先端を若干欠いている。6はⅢ類の完形品で先端が著しく磨耗している。

石 匙 (第39図9~14)

8点出土し、石材はすべて頁岩である。9はⅠb類、10はⅠc類、11はⅡa類、12はⅡb類、13・14はⅢb類に属する。残りの2点は、Ⅱ類、Ⅲ類の未成品である。12は薄身で精巧なつくりで、両面加工の尖頭器に似る。13・14はつまみをとればラウンドスクレーバーとなる。

打製石斧 (第39図15~17)

5点出土し、石材はすべて頁岩である。撥形で先端部加工のないⅠb類1点の他は、短柵形で先端部加工のあるⅡb類で、15~17は本類に含まれる。

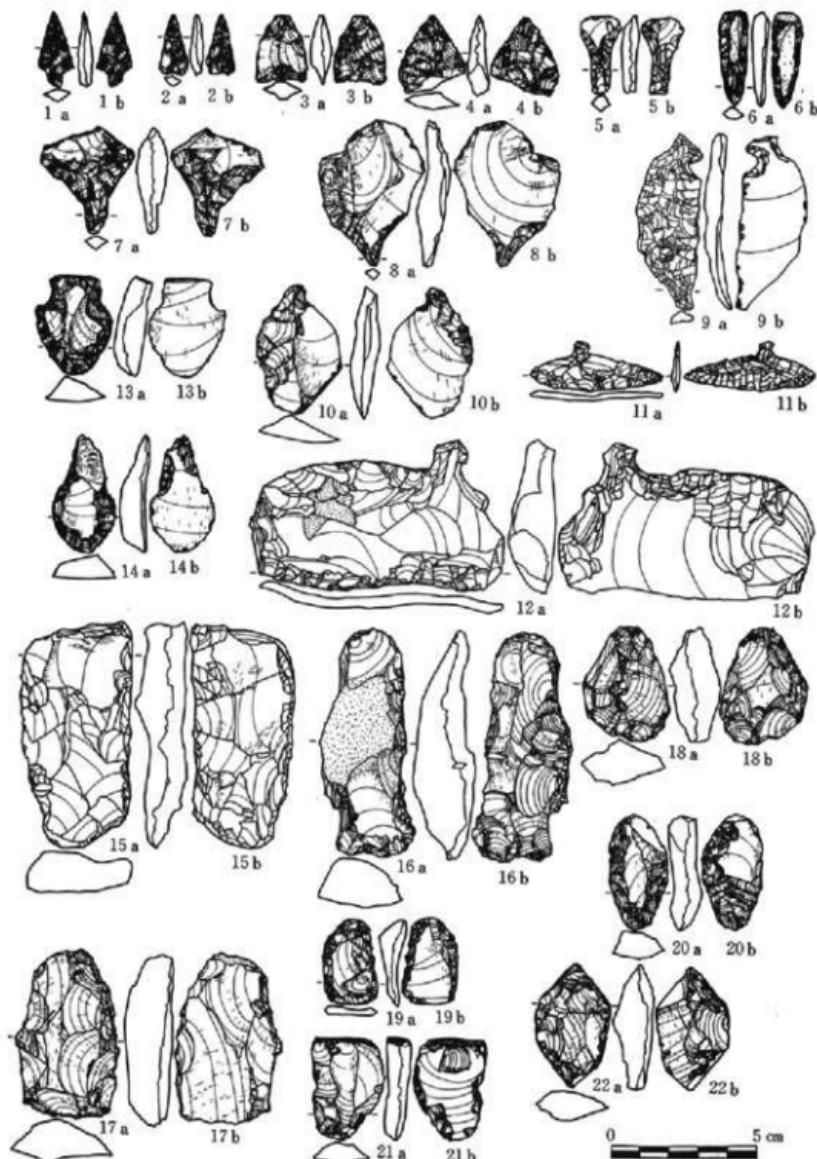
スクレーバー (第40図1~8)

15点出土し、石材は頁岩と玉髓質である。内訳はⅡa類2点、Ⅱb類6点(6・7・8)、Ⅲc類7点(1~5)である。先端を尖らすⅢc類が多いことが目立つ。

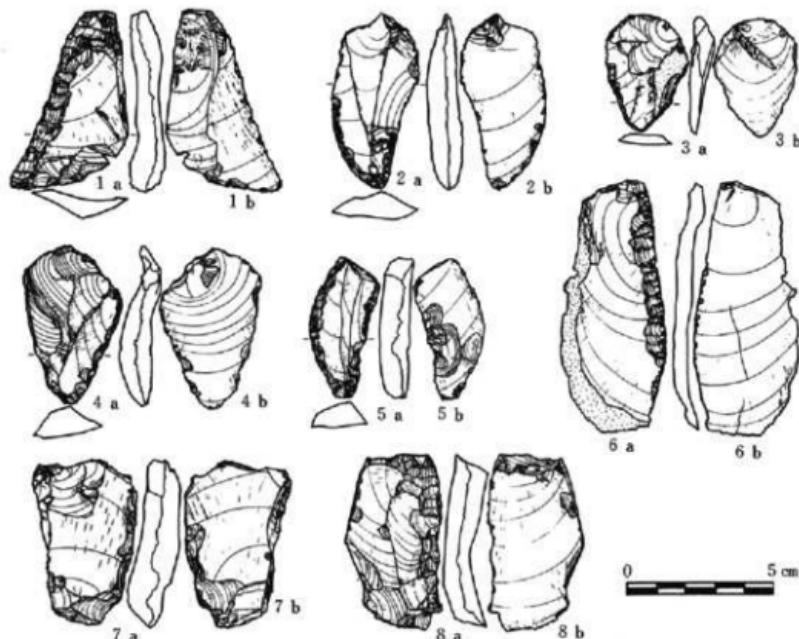
他に打製石器として両側縁と先端に両面加工のある範状石器に類似する小型の石器(第39図19・20)が3点、両面に加工のある未成品(第39図18・21・22)が10点、ノッチ13点、加工痕ある剝片19点、剝片334点、石核29点の出土がある。

磨製石斧 (第41図1~3)

3点出土した。いずれも折損しており、刃部資料1点、基部資料2点である。2・3はⅡ類、1はa類であるが、それぞれ刃部形態、基部形態は不明である。3は大型の石斧で側縁も丸く研磨され稜はない。



第39図 出土石器（1）



第40図 出土石器（2）

#### 凹 石（第41図4～9）

24点の出土があり、凹みだけのⅠ類と、凹みと研磨痕のあるⅡ類、さらに、それぞれの面の凹みの数に従って分類すると以下のようになる。I-1・0類1点(9)、I-1・1類5点(7)、I-2・1類2点、I-2・2類1点(8)、I-3・2・1類1点、II-1・0類5点、II-1・1類2点(5)、II-2・0類2点、II-2・1類1点(6)、II-2・2類2点(4)、II-2・1・1類1点で、研磨痕をもつⅡ類が多数を占める。

#### 磨 石（第41図10）

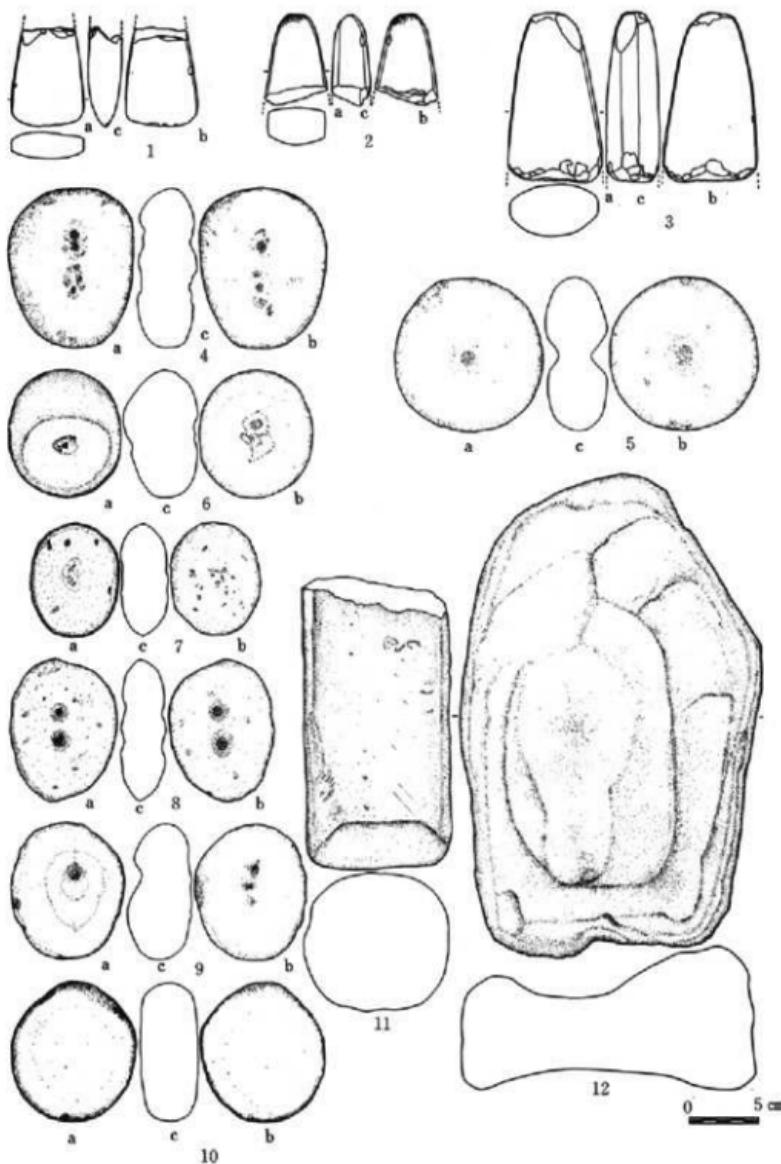
礫の一部に研磨痕のある石器で6点出土し、片面に研磨痕のあるもの2点、両面に研磨痕のあるものが4点あり、10は後者の例である。

#### 石 棒（第41図11）

5点出土し、いずれも一辺、あるいは直徑が10cm程度の角柱や円筒状を呈する。うち2点は未成品で、打ち欠きによって成形されており、長さは約30cmである。

#### 石 盤（第41図12）

砂岩製で1点の出土。表裏とも磨面があり、深い磨面の方が新しい。



第41図 出土石器 (3)

### 3.まとめ

今回の発掘調査によって窪遺跡からは、環状列石とその内側にみられる集石遺構3が認められ、住居跡やその他遺構がみられないことから、環状列石を中心とした祭祀遺跡としての性格が考えられる。地形的には、北側に流れる富神川をはさんで、標高402.2mの円錐形をなしている富神山が眼前にみられ、また柏倉地区の遺跡の中でも、標高地の高い位置に遺跡があり、周辺の環境は白鷹山からのびる丘陵に北側と南側および西側が区画されている。北東側の方向には、富神川をはじめとする須川の支流の小河川によって形成された扇状地に、点在する遺跡を望むことができる。

環状列石は、規模で半径20~24m・幅0.8~1.5mとなり、規則的な配列がみられず、自然の河原石や石皿などが雑然と配置され、立石や石棒など直立した状態はみられない。集石遺構については、径3.30~4.50mの楕円形を呈し、3号集石(SM3)は規則的に礫が配置され、1・2号集石(SM1・2)は不規則であり、いずれも礫の下部からは土壤などの施設は検出されない。層序は、第II層下面から第III層中に列石の位置がみられる。時期は、出土した土器からみて、第4~5類土器が多く出土しているため、縄文時代後期中葉の宮戸IIaからIIb式期にかけて、少なくとも2~3型式期にわたって、構築され使用されたと推定される。

山形県内における発掘調査の事例としては、東根市小林遺跡(註1)・長井市長屋敷遺跡(註2)・小国町谷地遺跡(註3)などが知られている。小林遺跡では縄文時代中期の大木9a~10a式期の集落跡で、列石は径45mとなっており規則的に配列され孤状になっている。長者屋敷遺跡は、縄文時代前・中・晩期の集落跡で中期の大木9b式期が主体になり、列石も9b~10a式期に伴い不規則である。谷地遺跡は、縄文時代中期大木7b式に伴うもので、住居跡群の南西に在り、1.5~2mの円形を呈する集石遺構が43基みられ、それらが二~三重に環状に廻っている。

このように、山形県内における列石もしくは集石遺構群が環状にみられ発生する時期は、現在時点では、谷地遺跡でみられるように縄文時代中期前半からであり、縄文時代中期にみられる環状列石は、集落跡の中でも住居跡群と隣接もしくは離れた地点に位置し、縄文時代後期にみられるように、窪遺跡や秋田県大湯遺跡の場合は集落跡から独立し、それぞれの集落跡の集約として考えられ、質的変化がみられる。なお、窪遺跡は、列石・集石遺構の構成からみて異なっている。

註1 山形県教育委員会1976 「小林遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第8集

註2 長井市教育委員会1979・1980 「長者屋敷遺跡」第1・2次調査略報

註3 山形県教育委員会1979 「谷地遺跡」調査説明資料

# VII 金池遺跡

## 1. 遺跡の概要

本遺跡は、須川へ流入する小河川の小扇状地の微高地にあり、遺跡全体は西側から東側にかけ傾斜しており、西端と東端では1~1.5mの比高差がみられる。北東側では小河川をはさんで坊屋敷遺跡と南西側で大清水遺跡と隣接している(第42図)。

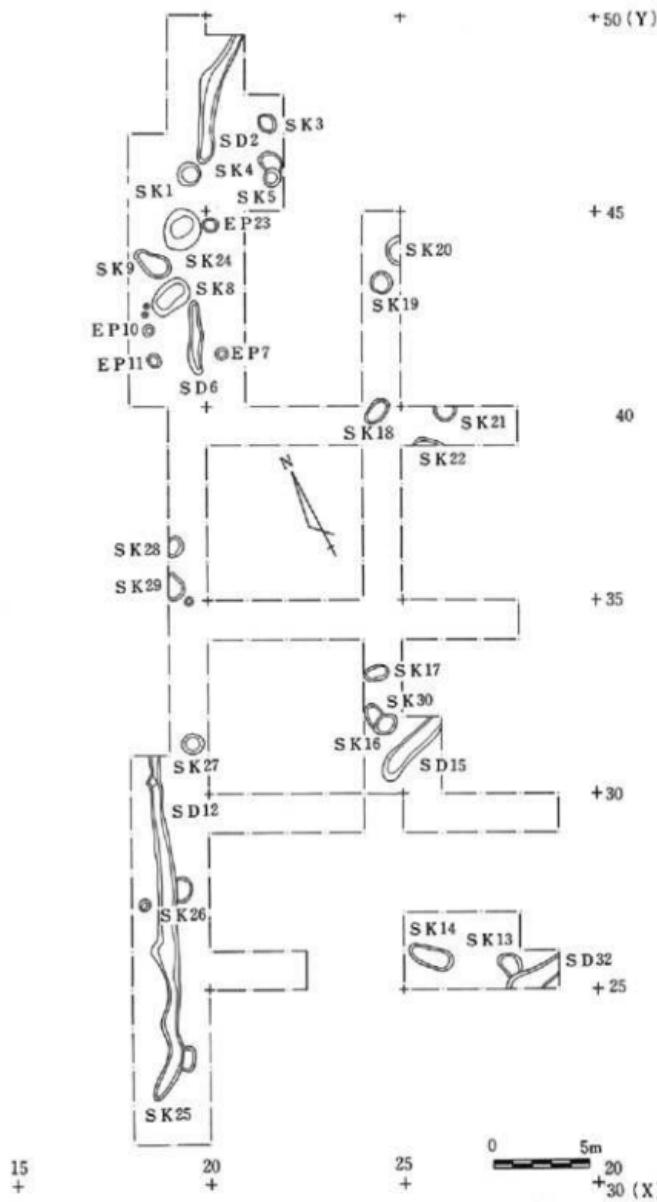
遺跡の層序は、概略して4層に分けられる。第Ⅰ層黒褐色土(耕作土20~30cm)、第Ⅱ層黒褐色土(15~25cm)で若干の炭化粒子と風化礫粒が混じり、第Ⅲ層暗褐色土(15~20cm)で第Ⅳ層の漸位層で、第Ⅳ層黄褐色土で砂礫粒が若干混じる。遺物は第Ⅱ層下部から多く出土し、遺構の確認面は平安時代で第Ⅱ層下部、縄文時代では第Ⅲ層中より確認し、いずれの時期も第Ⅳ層を掘り込んでいる。

検出した遺構は、土壙25・溝跡5・不明ピット7である。土壙は、円形ないし橢円形を呈し、径1~2.5mで深さ35~45cmであり、緩やかに傾斜をもって堀り込んでいる。SK3は、径1.10m・深さ38cmで不整円形を呈し、覆土上面より注口土器が出土している。SK13はSD32と重複しSD32が新しく、不整橢円形を呈し緩やかに掘り込まれており、覆土上面より手造ね土器が出土している。SK17は不整橢円形を呈し、径0.8×1.20mで深さ30cmで、壙底より深鉢形土器が押しつぶされた状態で出土している。SK24は円形を呈し径2.3×2.5mで深さ45cmで、覆土中位より小形壺2個体が出土している。SK27は円形を呈し径1.5mで深さ40cmで、壙底付近が若干袋状になっている。土壙の時期は、いずれも縄文時代晩期の大洞BC~C<sub>1</sub>式期にかけての所産と推定される(第43図 図版59)。

溝跡は、SD2・6・12でほぼ南北方向に走り、幅1~1.2m・深さ20~30cmであり、この三本については覆土からみて同時期とみられる。SD15・32はほぼ東西方向に走り、幅1.10~1.30m・深さ10~25cmである。時期は、出土した遺物および確認面からみて、平安時代後半と推される。EP7・10・11は径50~60cm・深さ45~60cmで円形になり、出土した遺物から平安時代後半と考えられる(第43図)。



第42図 金池遺跡全体図  
— 76 —



第43図 遺構配置図

## 2. 出土遺物

金池遺跡から出土した遺物には、縄文土器・石器・土師器・須恵器など整理箱にして約8箱分がある。柏倉地区遺跡群のうちでは遺物の出土量が少ない方であるが、縄文時代の遺物は土壤群からやまとまとめて出土している。

### (1) 縄文時代

#### (a) 縄文土器 (第44・45図 図版70・71)

縄文土器は遺物包含層からも多く出土しているが、ここでは土壤の底面および覆土内のものを主として述べる。金池出土の縄文土器は、時期的に縄文時代中期末葉から晩期中葉まで存在するが、とくに縄文時代晚期前葉の資料が豊富である。本遺跡の縄文土器については、全体としての類別を行なわず、主たる土壤毎に触れていく。

#### 31号土壤 (第45図7)

大形の壺形土器(第45図7)1個体と深鉢形土器2個体および小形の鉢形土器1片が出土している。7は深鉢形土器片に包まれるような状態で出土した壺形土器で、体部下半に直径6cmほどの焼成前の穿孔を持つ。口縁部がほぼ直立し体部中程に最大径を有する胴長の壺で、体部にLRの斜縄文が施されている。これと一緒に口縁部に玉抱き三叉文を有する小形の鉢形土器片が出土しており、時期は縄文時代晚期初頭大洞B<sub>1</sub>式期と推定される。

#### 3号土壤 (第44図1~3 第45図6)

覆土1層からほぼ完形の注口土器(第45図6)1個体と深鉢形土器片(第44図1・3)および小形の鉢ないし台付鉢片(同2)が出土している。第45図6は口唇部と体部中位に小二連突起、体部上下半に磨消縄文の手法による雲形文が施されている注口土器で、大洞C<sub>1</sub>式期に比定される。2の鉢ないし台付鉢片も羊齒状文が退化したもので同時期である。

#### 4・5号土壤 (第44図4・5)

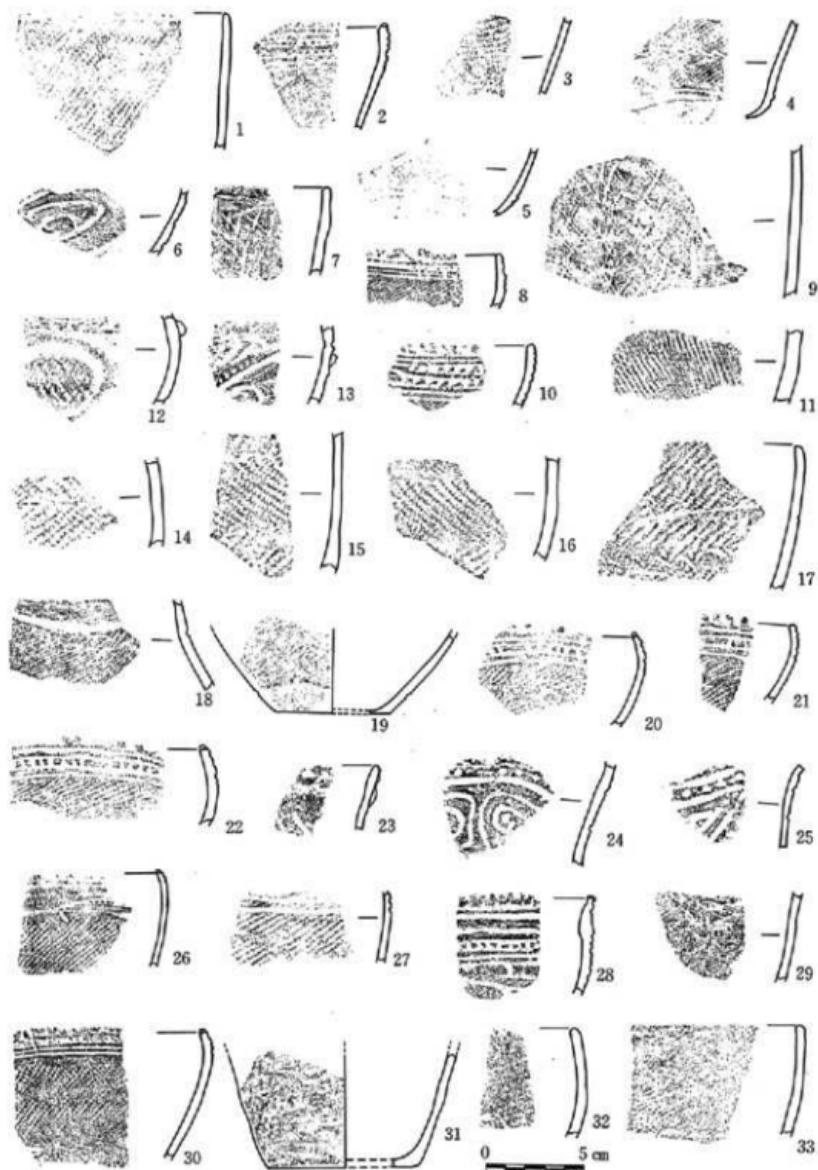
4号土壤覆土2層から小形鉢形土器が5片出土している。体部に結節による綾縞縄文、体部下端に2条の平行沈線が施されるもので、縄文時代晩期中葉大洞C<sub>1</sub>式期頃に比定できる。4号土壤と5号土壤は重複しており、4号土壤が新しい。

#### 8号土壤 (第44図6~11)

覆土から縄文土器が7片出土している。網目状撚糸文が全面に施される粗製の深鉢(7・9)、口頸部に羊齒状文ないし平行沈線文が施される鉢形土器(8・10)、磨消縄文による雲形文を持つ皿形土器(6)、撚糸文が施される深鉢片(11)などがある。時期的には縄文時代晩期中葉大洞C<sub>1</sub>式期に比定される。

#### 13号土壤 (第45図・4)

覆土から小形の手捏土器が1点出土している。時期的には縄文時代晩期大洞B<sub>1</sub>C~C<sub>1</sub>式



第44図 縄文土器拓影図

期頃のものであろう。

**14号土壙** (第44図12・13)

覆土から縄文土器が5片出土している。粘土墻に梢円形の磨消縄文を持つもの(12)、粘土紐に円形の刺突文を持つもの(13)、羊歯縄文を有する鉢形土器片などがある。時期的には縄文時代中期末葉大木9式から存するが、土壙の作られた時期は晩期前葉大洞BC式期頃と推定される。

**17号土壙** (第45図5)

覆土から小形の深鉢形土器が1個体出土している。口縁部が内傾し、内外面が研磨されているが、輪積みの成形痕がよく残っている。時期は縄文時代晩期大洞BC式期頃にあたる。

**18号土壙** (第44図14~16)

覆土1層から縄文土器が5片出土している。全面に羽状縄文を有する深鉢(14~16)、結節による綾縞縄文を有する鉢形土器片などがある。時期は縄文時代晩期中葉大洞C<sub>1</sub>式期頃と推定される。

**20号土壙** (第44図17~19)

覆土から縄文土器が3片出土している。斜縄文を持つ粗製深鉢(17)、頸部に1条の沈線を持つ小形壺(18)、小形鉢(19)がある。時期は晩期中葉大洞C<sub>1</sub>式期頃にあたる。

**24号土壙** (第44図20~22 第45図1~3)

覆土3層から小形壺2個、小形鉢片、深鉢1個体などが出土している。第45図2・3は器高8~9cmの小形壺で内外面とも磨き整形が施されている。3は外面の体部下間に削り調整がある。第44図20~22は口縁部が内湾する小形の鉢形土器で、口頸部に殊子状の刻目を有する。時期は縄文時代晩期中葉大洞C<sub>1</sub>式期である。

**27号土壙** (第44図23~27)

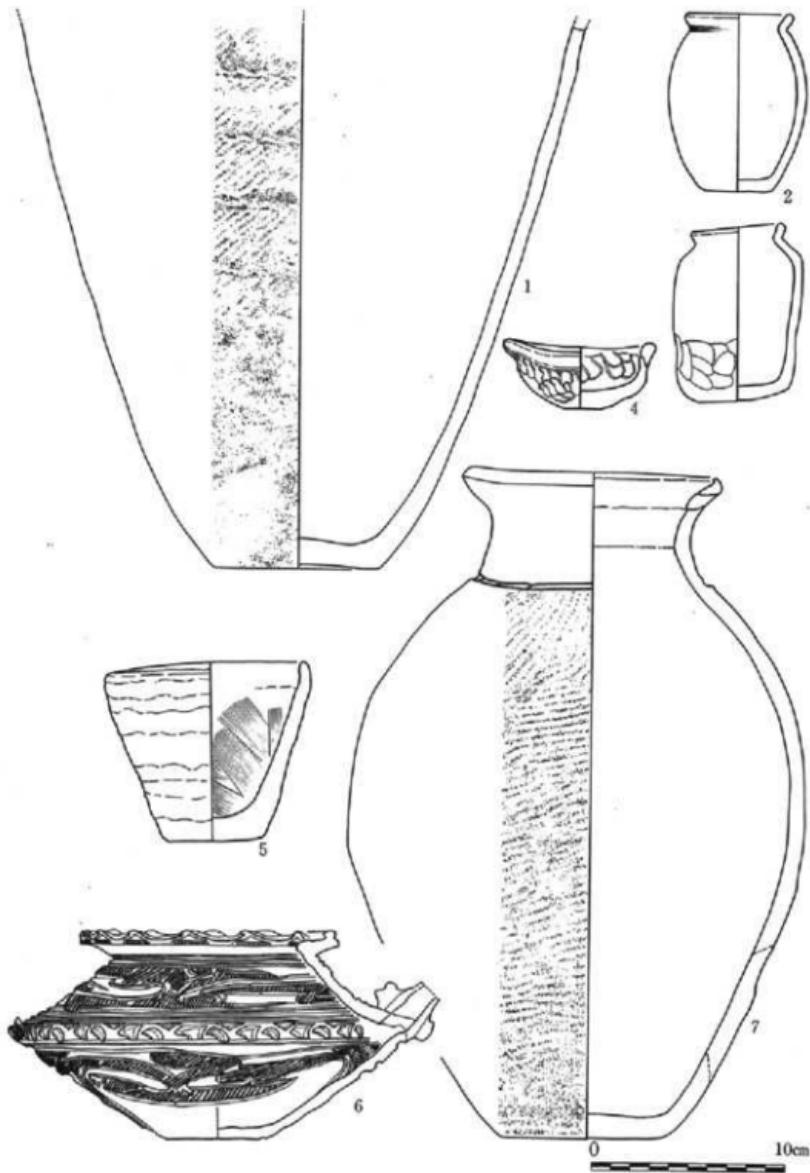
覆土2・3層から縄文土器が6片出土している。曲線的な沈線文に円形の連続刺突文を伴なうもの(23~25)、口縁部に羊歯縄文および平行沈線文を持つ鉢形土器(26・27)などがある。縄文時代後期初頭の土器もあるが、土壙の時期は晩期大洞C<sub>1</sub>式期に比定できる。

**28号土壙** (第44図28~31)

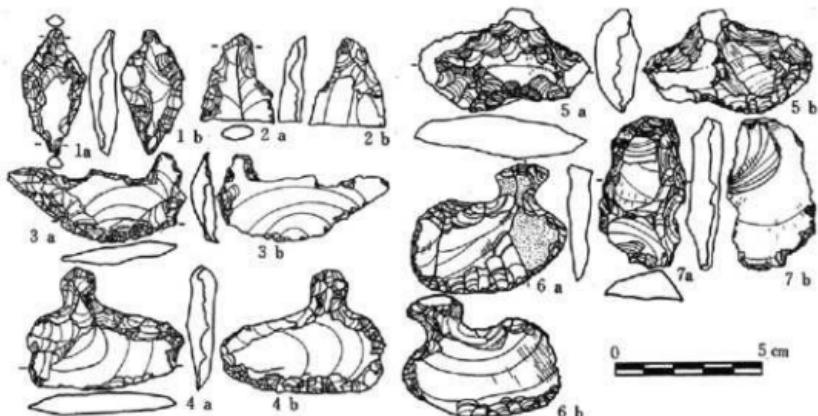
覆土から縄文土器が5片出土している。刷毛目状の沈線文を持つもの(29・31)と殊子状の連続した刻目を持つもの(28・30)があり、器形は小形の鉢ないし深鉢形土器である。時期は縄文時代晩期中葉大洞C<sub>1</sub>式に比定できる。

**29号土壙** (第44図32・33)

覆土から縄文土器が3片出土している。口縁部がやや内傾する深鉢形土器で、32には結節回転による綾縞文がみられる。時期は縄文時代晩期中葉大洞C<sub>1</sub>式期頃である。



第45図 土器実測図



第46図 出土石器（1）

**(b) 出土石器** (第46・47図 図版23)

本遺跡から出土した石器は総数76点と少なく、内訳は、石錐1点、石匙5点、スクレーパー2点、ノッチ1点、加工痕ある剝片10点、剝片53点、石核1点、磨製石斧1点、凹石2点となっている。

**石錐** (第46図1)

両端に尖頭部をもち、その断面形は上部が菱形、下部は台形である。

**石匙** (第46図2～6)

2は縦形のI b類で上半部のみの折損資料である。3・4は横形で片面加工のII b類、5・6は両面加工のII a類である。3・4・6はいずれも横長剝片を素材とし、3は剝片の末端に、つまみを作り出し、4・6は剝片基部を大きく抉りとつまみを作り出している。5は全体的に磨滅し、つまみ部分や周囲も、新しい剝離痕によって欠損している。6はつまみ部にタール状物質が付着しており(図版23、下段右上)、その状況を観察すると、糸状のものを巻いた痕跡と考えられる幾筋かの横に走る線を認めることができる。

**スクレーパー** (第46図7)

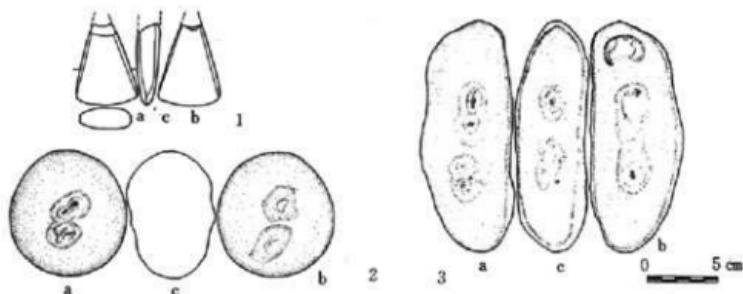
2点出土しており、剝片の末端を加工したI類と、両側縁を加工したII a類(7)である。

**磨製石斧** (第47図1)

平面形は撥形で、刃部は丸刃でb類に属し、基部は折損するが、尖がるII類と思われる。

**凹石** (第47図2・3)

両者とも研磨痕はなく、2はI-2・2類、3はI-4・2・4類の凹石である。



第47図 出土石器（2）

## （2）平安時代

調査区の西南第12号溝付近から、土師器・須恵器・赤焼き土器の破片が少量出土している。土師器には口縁部が「く」状に外反する甕、須恵器・赤焼き土器には杯などの器種がある。いずれも小破片で明確な時期判定のできる資料はないが、赤焼き土器杯が存することからおおよそ平安時代後半頃と推定される。

## 4.まとめ

今回の発掘調査によって金池遺跡からは、土壙25・溝跡5・不明ピット7が検出され、竪穴住居跡や建物跡は確認されず、昭和52年に実施した分布調査の結果から、今回の発掘区が中心地区と判断され、調査の結果からみても小規模な遺跡と考えられる。

### （1）縄文時代について

土壙の分布状況は、発掘区の中央部から北側にかけて偏在しているようにみられ、とくに北側の区域に集中するようである。31号土壙は、分布調査において検出され、壺形土器と粗製深鉢とがいっしょに壺棺として出土している。また覆土の状態からみても土壙は、土壙墓として考えられ、坊屋敷遺跡や大清水遺跡と関連性があり、縄文時代晩期の大洞B C～C<sub>1</sub>期にかけて土壙墓群として利用されたものと推定される。

### （2）平安時代について

平安時代の遺構は、溝跡とピット3であるが、その性格については不明であり、坊屋敷遺跡や大清水遺跡との関連性があるようである。

# VIII 柏倉土師・館・十二月田A遺跡

## 1. 柏倉土師遺跡

### (1) 遺跡の概要

本遺跡は、須川に流入する小河川に形成された小扇状地にあり、南西側で坊屋敷遺跡に隣接している。西側から東側へと全体的に傾斜し、遺跡の西端と東端で1~1.2mの比高差がみられる。

遺跡の層序は、大きく分けて4層に区分される。第Ⅰ層黒色土（耕作土10~15cm）、第Ⅱ層黒褐色土（15~25cm）で炭化粒子や風化礫粒が混じり、第Ⅲ層暗褐色土（20~30cm）で炭化粒子を含み粘質微砂で、第Ⅳ層黄褐色土で砂礫粒が多量に混じる地山である。遺物包含層は第Ⅱ層中である。また第Ⅱ層は水田耕作により擾乱を受けている。

遺構は確認されなかった。

出土した遺物は、整理箱に4分の1箱である。縄文時代は、石器剝片9点、土器片は中期大木8a式10点、晩期大洞B・BC式が12点である。その他、平安時代の土師器・須恵器の壺片が24点出土しているのみである。

### (2) まとめ

本遺跡は、当初坊屋敷遺跡と区別され、それぞれ単独の遺跡と考えられていたが、調査の結果、遺構が検出されずまた遺物の出土状況からみて、坊屋敷遺跡より遺物が流入したものとみられ、坊屋敷遺跡の続きとみられるが、その状況から遺構群が存在しない地区と考えられる。

## 2. 館 遺跡

### (1) 遺跡の概要

本遺跡は、須川に流入する小河川に形成された扇状地の扇端部に位置し、標高138m~140mを計る。今回の緊急発掘調査区は、遺跡西端部で遺跡全体の約10分の1の地区にある。遺跡は、高さ約1mの土塁が築かれており中央に館跡となっている。調査区は館跡をはずした西側にあり、館跡は事業区域外となっている。館跡内には、縄文時代中期の土器片や剝片が散布している。

遺跡の層序は、4層に大別される。第Ⅰ層黒色土（耕作土20~30cm）、第Ⅱ層黒褐色土（15~40cm）で炭化粒子が混じり、第Ⅲ層褐色土（30~45cm）で粘質土、第Ⅳ層暗青灰色土

シルトである。遺物は、第Ⅱ層中より縄文時代・平安時代の遺物が混入している。

検出した遺構は、平安時代後半の溝跡1が確認され、長さ約1m・幅60~75cm・深さ20~32cmで、第Ⅱ層中で検出され第Ⅲ層を若干掘り込み、ほぼ南北に走っている。その他館跡の周濠などは検出されない。

出土した遺物は、整理箱に2箱である。縄文時代中期大木8a・b式土器片と石器は凹石・磨石・石皿片それぞれ1点、剣片を合せると計1.5箱、平安時代後半須恵器片などである。

## (2) まとめ

今回発掘調査を実施した地区は、遺跡の主要な地区よりはずれており、遺物なども流入し、遺構は平安時代後半の溝跡で、内容および性格は不明である。館跡については、関連する遺物は出土しなかったため、時期は不明であり、今後の調査課題である。

## 3. 十二月田A遺跡

### (1) 遺跡の概要

本遺跡は、富神川の右岸の段丘上の微高地に在り、標高175m~179mを計る。北側の段丘下で窪遺跡と隣接している。西側から東側へと全体的に傾斜している。遺跡全体は、水田耕作により全体に擾乱を受けており、遺物包含層はみられず、深さ20~25cmで黄褐色土の地山にたっする。遺構は検出されなかった。

出土した遺物は、整理箱に約0.5箱である。縄文時代土器片・磨石1・石鎌1・石匙1と剣片が出土し、土師器・須恵器片がそれぞれ4片出土している。それぞれの時期は不明である。

### (2) まとめ

本遺跡は、水田耕作のための遺跡全体が擾乱しており、性格および内容は不明である。また、窪遺跡と隣接しているが、その関係も不明である。

## VIII 総括

今回は圃場整備事業に係る8遺跡について、発掘調査を実施したのである。これら遺跡群の時期は、縄文時代中期中葉から縄文時代後期・晚期、弥生時代中期末葉および古墳時代前期から奈良時代末葉および平安時代と、年代的には広範にわたり、それぞれ複合した遺跡群である。これら遺跡群を総合的に判断してみると次のようなことが明らかにされた。

### (1) 縄文時代について

主要なる時期は、縄文時代後期中葉から晚期中葉にかけてである。集落跡を構成する大清水遺跡は、宮戸Ⅰb式期からⅡb式期にかけて土壙墓群とともに構成され、坊屋敷・金池遺跡では縄文時代晚期を主体とする土壙墓群が確認され住居跡はみられない。また窪遺跡は、住居跡や土壙がみられず環状列石と集石遺構で、時期は後期の宮戸Ⅱa式期からⅡb式期である。このように、縄文時代後期から晚期にかけての集落構成などの相異がみられ、後期は、明らかに土壙墓群と環状列石の構成の違いがみられる。すなわち窪遺跡は遺跡群単位が集約されて、祭祀的儀礼の領域として存在していたと考えられる。

### (2) 弥生時代について

大清水遺跡と坊屋敷遺跡で土器片が出土しているだけで、遺構は検出されていない。土器の器種には、壺形土器と甕形土器などがある。壺形土器には半截竹管による平行沈線で文様を描出している。時期的には弥生時代中期末葉、広義の桜井式に比定される。なおこの地域での弥生時代集落跡の解明が今後の課題である。

### (3) 古墳時代から平安時代について

遺跡の立地は、坊屋敷・大清水・塩辛田の各遺跡のように、扇状地の中でもとくに扇中央部の微高地が選ばれる傾向がある。このうち遺構群とくに住居跡は、この微高地の平坦地を利用して作られている。

住居跡や建物跡の配置は、各時期とも空間的な広がりがみられる。河北町熊野台遺跡（註1）では、古墳時代前期と奈良時代末葉から平安時代前半にかけて7棟前後の住居跡や建物跡の単位群が推定されているが、柏倉地区の遺跡の場合は3～5棟の小単位の集落構成と考えられる。掘立柱建物跡は、熊野台遺跡と同様に奈良時代末葉から出現するものとみられる。本地域は、この近くにある菅沢古墳や大之越古墳が出現する時期の前後にあたり、また条里制との係わりも今後の重要な課題である。

註1 山形県教育委員会1980「熊野台遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財発掘調査報告書第31集

図 版



塩辛田遺跡近景



塩辛田遺跡近景



25号住居跡



26号住居跡



30・31号住居跡



3号建物跡



塙辛田遺跡32号建物跡



塙辛田遺跡90号建物跡



大清水遺跡遠景



大清水遺跡近景



大清水遺跡調査区全景



大清水遺跡調査風景

図版 3



坊屋敷遺跡全景



坊屋敷遺跡近景



B地区全景



B地区全景



1号住居跡



2号住居跡



2号住居跡



2号住居跡炉



2号住居跡土器出土状態



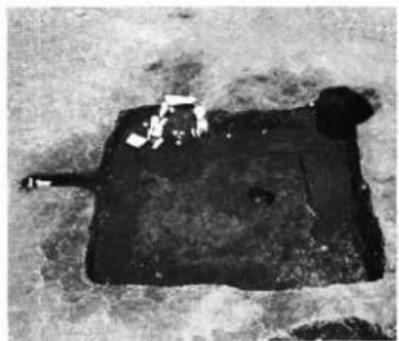
2号住居跡・7号溝跡土器出土状態



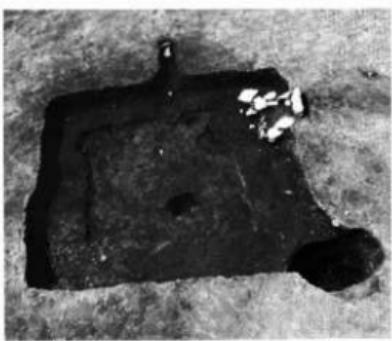
21号住居跡



21号住居跡土器出土状態



54号住居跡



54号住居跡



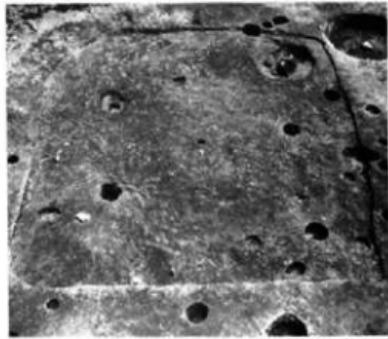
54 a号住居跡カマド



54 a号住居跡カマド



54 b号住居跡カマド



87号住居跡



70号住居跡



70号住居跡土器出土状況



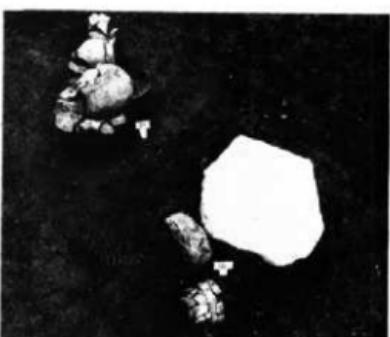
70号住居跡土器出土状況



70号住居跡土器出土状況

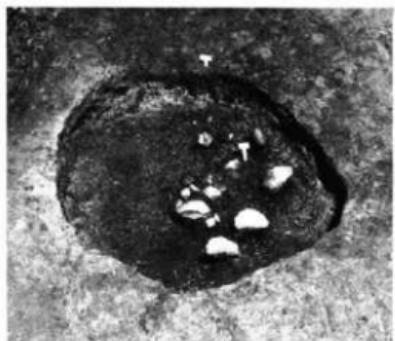


70号住居跡土器出土状況

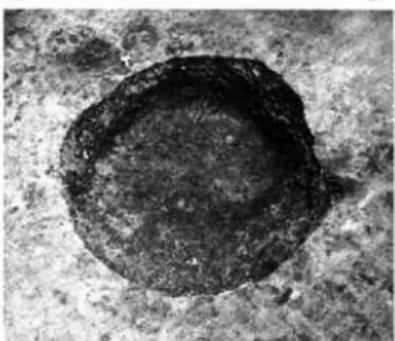


70号住居跡土器出土状況

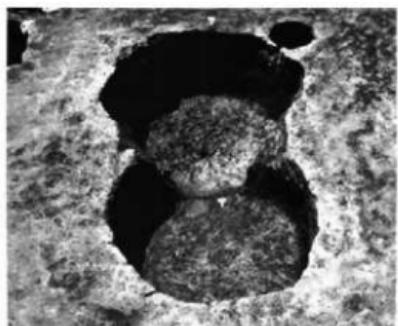
图版 7



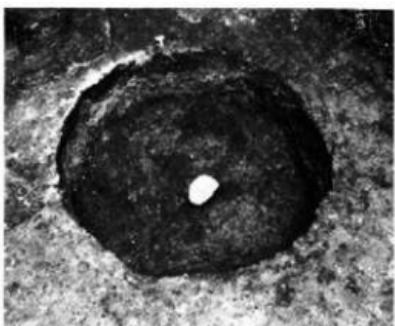
3号土壤



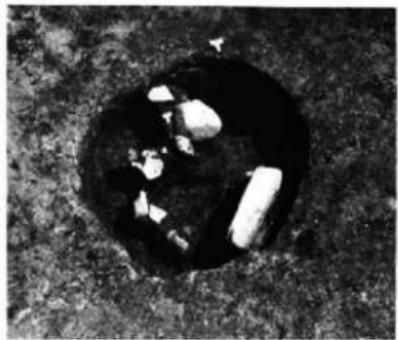
4号土壤



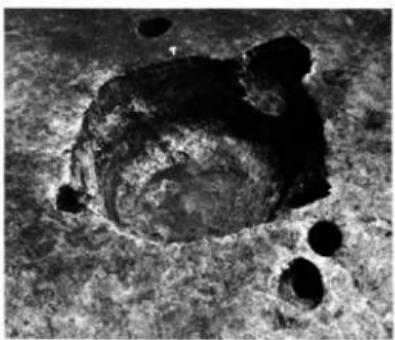
5·6号土壤



8号土壤



9号土壤



12号土壤



15・16・17号土壤



15号土壤



16号土壤



17号土壤

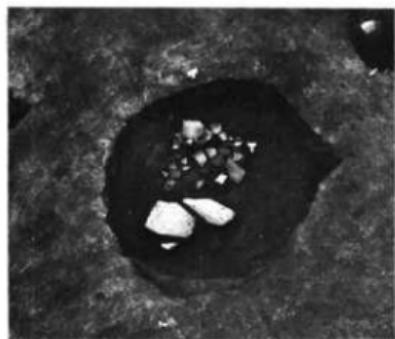


E U 52



E U 35

图版 9



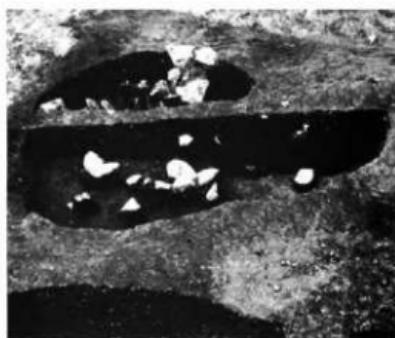
23号土壤



23号土塘土器出土状态



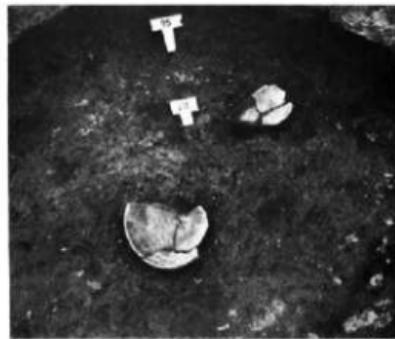
55·68号土壤



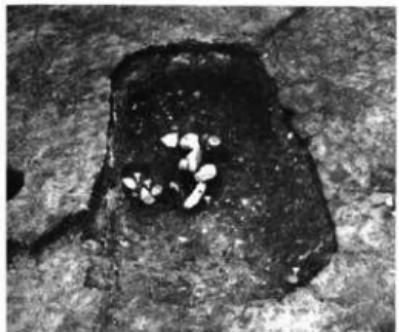
55·68号土塘



95号土壤



95号土塘土器出土状态





遺跡遠景



遺跡全景



環狀列石



環狀列石近拍



1·2·3號集石



1·2·3號集石



金池遺跡近景



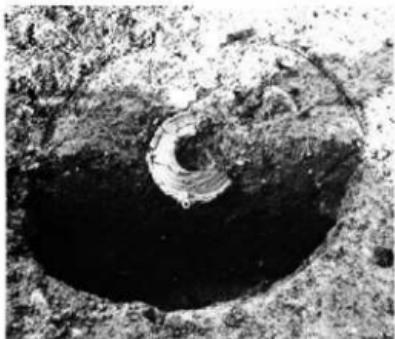
金池遺跡調査風景



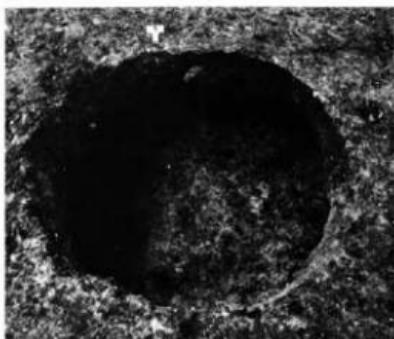
2号溝跡



1・9・24号土壤 6号溝跡



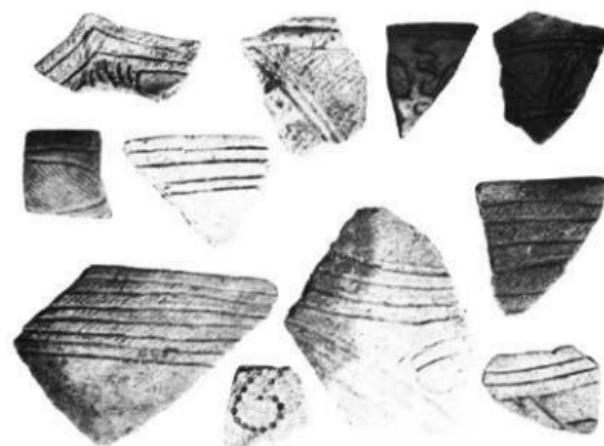
13号土壙土器出土状態



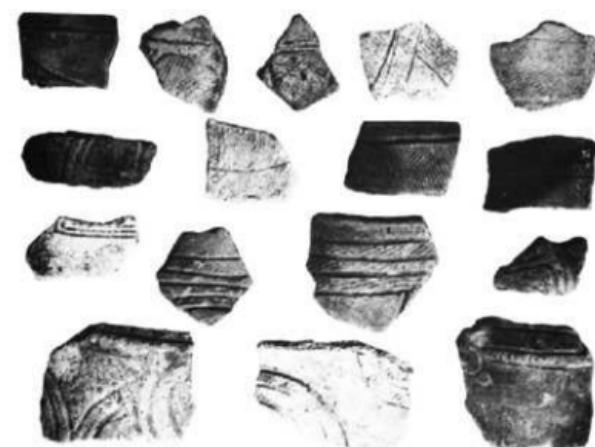
3号土壙



堆辛田遺跡出土土器



大清水遺跡出土土器 (1)



大清水遺跡出土土器 (2)



大清水遺跡出土土器 (3)

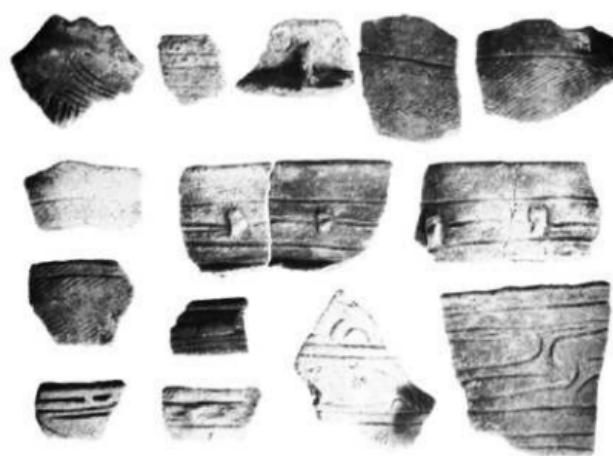
図版15



大清水遺跡出土土器（4）



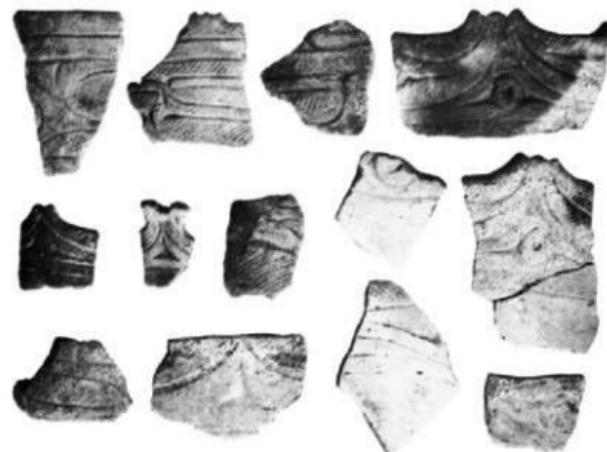
大清水遺跡出土石器



坊屋敷遺跡出土土器 (1)



坊屋敷遺跡出土土器 (2)



坊屋敷遺跡出土土器 (3)

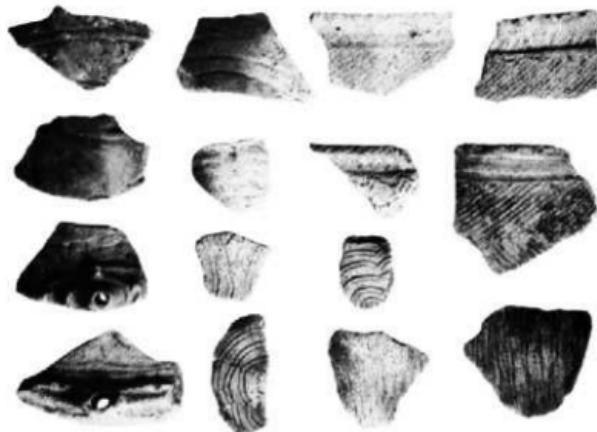
図版17



坊屋敷遺跡出土土器（4）



坊屋敷遺跡出土土器（5）



坊屋敷遺跡出土土器（6）



坊屋敷遺跡出土土器（7）



坊屋敷遺跡出土土器（8）



坊屋敷遺跡土製品



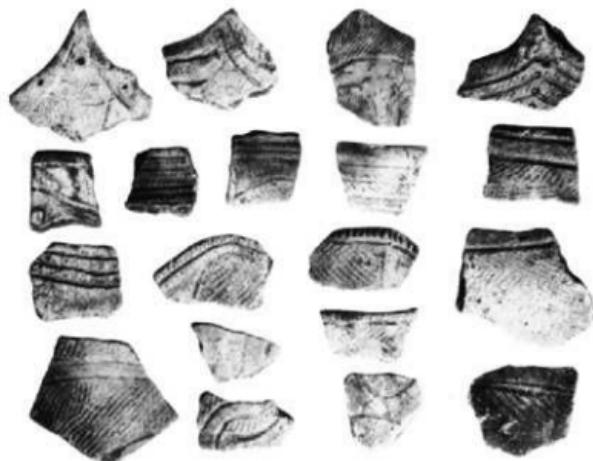
坊屋敷遺跡土石器



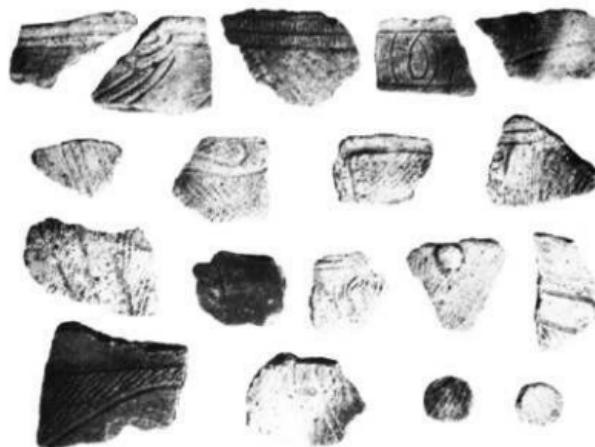
窯遺跡出土土器（1）



窯遺跡出土土器（2）



窯遺跡出土土器（3）



窪遺跡出土土器 (4)・土製内盤



窪遺跡出土石器 (1)



窪遺跡出土石器 (2)



金池遗址出土土器（1）



金池遗址出土土器（2）



金池遗址出土石器



金池遺跡出土土器（3）

---

山形県埋蔵文化財調査報告書第33集

かしわ ぐら

## 柏倉地区遺跡群

### —発掘調査報告書—

昭和56年3月25日 印刷

昭和56年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 大鳳印刷

---